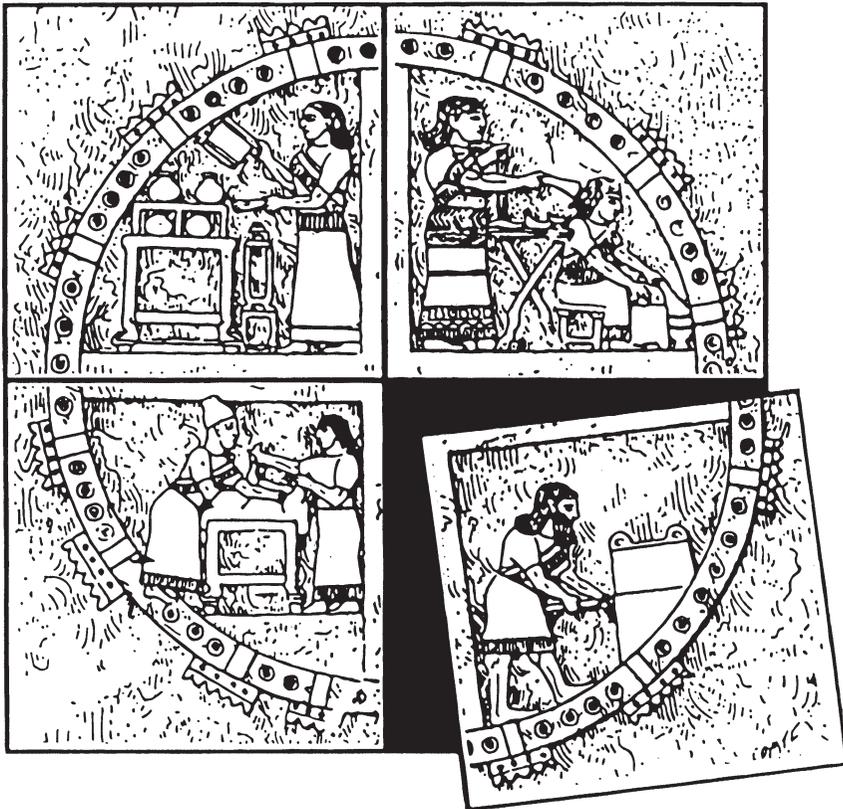


日本女子大学 総合研究所紀要

26



目 次

西生田キャンパスの森を活用した新規学習プログラムの開発

Development of New Education Programs Utilizing the Forest on Nishi-Ikuta Campus

……………研究課題 (74) 研究代表者 砂 川 俊 輔 … 1

女子教育の場としての寮の在り方に関する研究

—日本女子大学寮地区内の建物・家具の歴史的価値及び

過去から現在の自治組織の在り方の考察を通して—

Research on Roles of Dormitories in Women's Education

—Through Discussion of the Historical Value of Buildings and Furniture,

and the Change of Governance Structures from the Past to the Present

in Dormitory Area of Japan Women's University—

……………研究課題 (75) 研究代表者 葉 袋 奈美子 … 39

西生田キャンパスの森を活用した 新規学習プログラムの開発

Development of New Education Programs Utilizing the Forest on Nishi-Ikuta Campus

砂川 俊輔 SUNAGAWA Shunsuke
(研究代表者 日本女子大学附属豊明小学校教諭)

宮崎 あかね MIYAZAKI Akane
(日本女子大学理学部化学生命科学科教授)

田中 雅文 TANAKA Masahumi
(日本女子大学人間社会学部教育学科教授)

五十嵐 敏文 IGARASHI Toshihumi
(日本女子大学人間社会学部教育学科助教)

山田 陽子 YAMADA Yoko
(日本女子大学理学部化学生命科学科助手)

青木 ゆりか AOKI Yurika
(日本女子大学附属高等学校教諭)

大塚 泰弘 OTSUKA Yasuhiro
(日本女子大学附属高等学校教諭)

柴田 直子 SHIBATA Naoko
(日本女子大学附属高等学校教諭)

大越 佳子 OKOSHI Yoshiko
(日本女子大学附属中学校教諭)

山本 昂宏 YAMAMOTO Takahiro
(日本女子大学附属中学校教諭)

大石 円 OISHI Madoka
(日本女子大学附属豊明小学校教諭)

勝地 美奈子 KATSUCHI Minako
(日本女子大学附属豊明小学校教諭)

吉岡 しのぶ YOSHIOKA Shinobu
(日本女子大学附属豊明幼稚園教諭)

熊谷 彩香 KUMAGAI Ayaka
(日本女子大学附属豊明幼稚園教諭)

上田 実希 UEDA Miki
(日本女子大学理学部化学生命科学科講師)

高木 智子 TAKAGI Tomoko
(日本女子大学理学部化学生命科学科助手)

田 悟 知 里 TAGO Chisato
(日本女子大学附属中学校非常勤講師)

星 野 義 延 HOSHINO Yoshinobu
(元東京農工大学農学部地域生態システム学科教授)

大河内 博 OKOCHI Hiroshi
(早稲田大学創造理工学部環境資源工学科教授)

今 市 涼 子 IMAICHI Ryoko
(日本女子大学理事長)

関 口 文 彦 SEKIGUCHI Fumihiko
(日本女子大学名誉教授)

辻 誠 治 TSUJI Seiji
(元日本女子大学附属豊明小学校教諭)

目 次

まえがき	砂川 俊輔
I コナラ林の再生Ⅳ	辻 誠治・砂川 俊輔・勝地美奈子・大石 円 大越 佳子・田悟 知里・吉岡しのぶ・熊谷 彩香
II アカマツ林の再生Ⅳ	辻 誠治・砂川 俊輔・勝地美奈子・大石 円 大越 佳子・田悟 知里・吉岡しのぶ・熊谷 彩香
III 西生田キャンパスの森のナラ枯れの現状とこれから	辻 誠治
IV 西生田キャンパスの森のナラ枯れの原因と対策について	砂川 俊輔
V 中学校「生物・天文クラブ」との連携	大越 佳子
VI 西生田キャンパスの森の観察会	砂川 俊輔
VII 小学校西生田の森の利用に関して	勝地美奈子
あとがき	砂川 俊輔

まえがき

砂川 俊輔

本学の西生田キャンパスは、1934（昭和9）年に目白キャンパスからの移転構想による土地購入に始まり、現在の面積は293,800m²である。この広大な敷地の半分以上を森林が占めている。2003年に、本学の理科系教員（幼稚園～大学）の有志が、西生田キャンパスの森の保全と調査を目的とした研究グループを立ち上げ総合研究所の研究課題として申請し、研究課題25「西生田キャンパスの森の保全と教育利用に関する基礎調査」（2003年度～2005年度）が採択された。この研究により、キャンパス内には97科、244属356種の植物が生育していること、現存森林植生として2群集、2群落、2植生型を識別し、これらがキャンパスの59.4%を占めていることが明らかになった。

この研究結果をもとに、西生田キャンパスの森の保全および教育的利用に関する基礎アイデアを提言するため、2006年度に研究課題35「西生田キャンパスの森の教育的利用に関する研究と実践」（2006年度～2008年度）に取り組んだ。西生田キャンパスの森の大半を占めるコナラ林の下草刈りと落ち葉かきの再開による林床植生の回復過程と、絶滅危惧種Ⅱ類植物のエビネ、キンラン、タマノカンアオイの保全について研究を行った。教育的利用の観点から研究結果をホームページで公開し、保全活動の持つ意味や西生田キャンパスの森の豊かさを発信した。

2009年度には、教育的利用の試行は継続しつつ、西生田キャンパスの森の保全に焦点を置き研究課題44「西生田キャンパスの森の保全に関する研究」（2009年度～2011年度）では、コナラ林の林床植生の回復過程と希少種の保全と増殖についての研究を継続するとともに、新たに、森が周辺の大気や水環境に及ぼす影響について研究を始めた。この研究軸は、題名の多少の変更はあるものの研究課題44「西生田キャンパスの森の保全に関する研究」（2012～2013年度）および研究課題49「西生田キャンパスの再生」として引き継がれていった。例えば、2012年には、森の大部分を占めているコナラ・クヌギを1000m²伐採した。これは、更新時期を大きく超過していたためである。さらに2010年度より、附属豊明幼稚園や附属豊明小学校の園児、児童が森林内で採取した種子を育て、苗木にし、2015年2月に16本を更新予定地に植栽した。また、尾根筋にあるアカマツ林もその様相が大きく変化（弱体化）しつつあったため、母樹となる2本以外を伐採し（2013年）、以降、更新を試みている。

2016年度には、研究課題66「西生田キャンパスの森の再生と保全」として内容が引き継がれていった。17年にも及ぶ活動の中で、附属豊明小学校3年生を対象とした「西生田キャンパス森の観察会（春・秋）」や附属校園を対象とした公開研究会「里山体験：夏の下草刈り」「里山体験：冬の落ち葉かき」も実施した。毎回、児童と保護者が多く参加をし、小学校豊明会サポート部も活動に参加し、本研究会だけではなく、多くの人々が西生田キャンパスの森に興味関心を持つ機会となった。今までの西生田キャンパスの森の保全や再生をメインに行ってきた研究活動に加えて、2019年度からは研究課題74「西生田キャンパスの森を活用した新規学習プログラムの開発」として、教育活動に重きを置いた研究へとシフトした。しかし、2020年は、新型コロナウイルス感染症の蔓延により活動ができなくなり、研究活動は頓挫した。その中でも、オンラインミーティングで研究会のメンバーと情報交換をしたり、緊急事態宣言解除後は、少人数での保全活動を行い、いつか行えるであろう「教育的利用」に備え森の状態をできるだけ現状維持できるように努めた。状況が好転したか

に見える、すぐに感染者数の増加という「波」を繰り返して観察会や公開研究会を企画しては中止を余儀なくされた。2021年12月には、教職員組合を対象とした観察会を実施することができた（児童を対象とすることがまだ時期尚早と考えられたため、対象を大人にした）。これを足掛かりに、2022年は保全活動はもちろんのこと、調査や研究主題である教育的活動として「秋の観察会（附属豊明小学校3年生対象）」を実施することができた。後日、児童の日記や理科の提出物を見ると観察会のことが書かれていたり、直接感想を話してくれる児童が多く、森林を活かした教育的活動の意義深さを改めて感じた。

本研究は、研究課題74をもって約20年間の活動にピリオドを打つ。最後の3年間は、新型コロナウイルス感染症蔓延という未曾有の事態に見舞われ、当初の目的が十分に達成できたとは言えない。しかしながら、できる限りの活動をし、一定の成果をあげられたのも事実である。その記録を報告したい。

I コナラ林の再生Ⅳ

辻 誠治・砂川 俊輔・勝地美奈子・大石 円・
大越 佳子・田悟 知里・吉岡しのぶ・熊谷 彩香

はじめに

コナラ林の再生は、2011年度の冬に老木の目立つ林分約1000m²を伐採したことに始まる¹⁾。場所は、前回（研究課題66「西生田キャンパスの森の保全および再生の記録」（2017～2019年度）まで継続して実施してきた林床の保全作業と植生調査の調査区の隣接地（図1）である。2012年度には、25m四方のコドラートと5m四方のサブコドラート25を設置し、伐採した樹木の根元径と位置を測定した¹⁾。

森の再生のための苗は、2010年から豊明幼稚園園児や豊明小学校児童が農場体験などで西生田を訪れた際に森で採集したどんぐりを圃場に播種して育苗した。2015年2月にコナラ7本とクヌギ9本、続いて2016年2月にコナラ27本、クヌギ1本、ヤマザクラ1本を更新予定地に植栽した。2017年3月に活着状況を確認したところ、2年間に植栽した苗木45本のうち28本の活着が確認できた²⁾。

前回の取り組み（課題66）³⁾から、育苗は時間のかかるどんぐりの播種によるものではなく、キャンパス内の森に生育する実生苗をポットに鉢上げして1年間根を張らせ、翌年更新地に植栽することにした。

森の再生に際してもう一つの大きな課題は下草刈りである。植栽した苗木は年年成長するが、植栽後日の浅いコナラやクヌギは樹高が1mに満たないものが大半で、放置すると夏場は他の草木

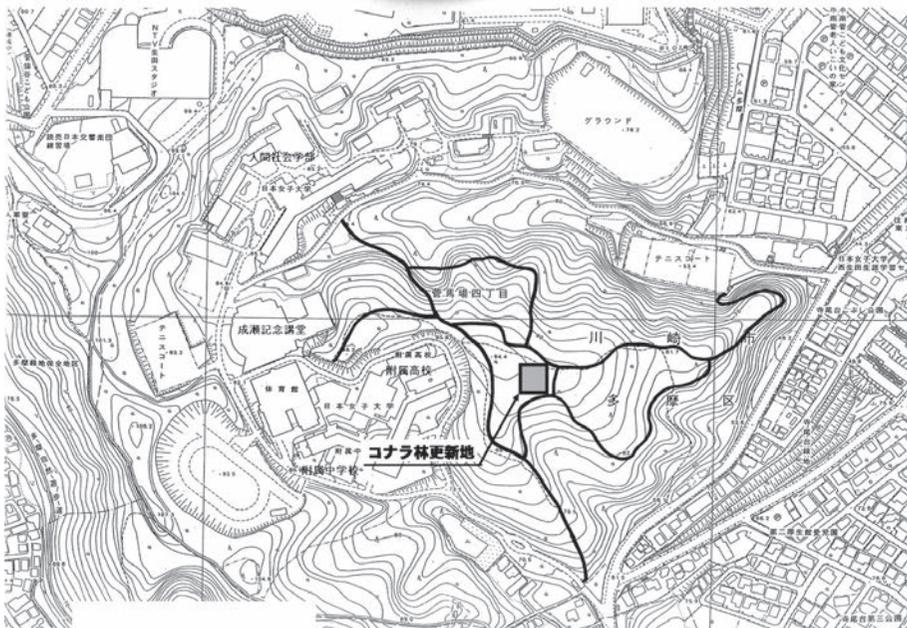


図1 コナラ林更新地位置図

に被圧され、成長が著しく阻害されてしまう。このため、1ヶ月に1回程度の下刈りが必要となる。今回の研究でもコロナ禍の中困難を伴ったが、出来るだけ時間を作って下刈り作業を実施した。

様々な制約下での活動であったが、以下に今時（2020年度～2022年度）の取り組みとその成果について述べる。

1. 植栽後の苗木と更新地の状況と今後の課題

今回（研究課題74「西生田キャンパスの森を活用した新規学習プログラムの開発」）の取り組みでは、更新地への新たな苗木の植栽は行わず、下刈り作業を中心とし、植栽木の毎木調査も最終年度の2月に1回のみ実施した。

植栽した苗木の位置とその後の生育状況を図2、表1に示す。前回（課題66）の最終年度の調査で生育が確認できたコナラ、クスギなどは順調に生育し、2020年4月の調査で生育を確認した63本の植栽したコナラ、クスギのうち、61本の生育が確認できた。樹高の内訳を見ると、2015年にはじめて植栽した（実生3本を含む）クスギ、コナラは、植栽当時樹高1m前後のものが大半であっ

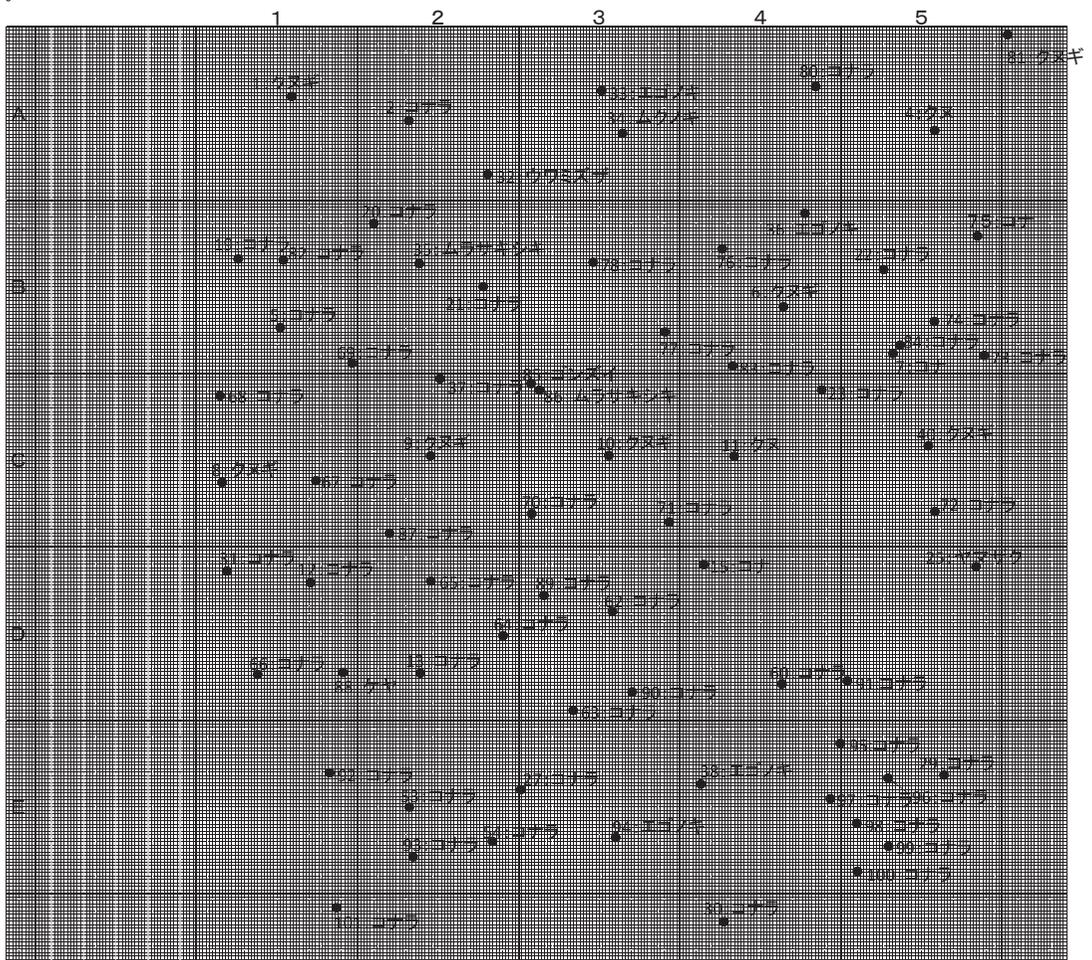


図2 コナラ林更新地植栽木位置図 (2023.2)

表1 コナラ林更新地の樹木の現況

No	樹種	樹高 (m) ± C3E52				胸高直径 (cm)				備考	樹種	No	樹高 (m)				備考	樹種	No	胸高直径 (cm)				備考												
		2016.4	2017.3	2018.3	2019.3	2020.4	2023.2	2016.4	2017.3				2018.3	2019.3	2020.4	2023.2				2019.3	2020.4	2023.2	2024		2023.2	2024	2023.2	2024								
1	クスギ	1.5	1.6	1.7	1.8	2.0	3.7	0.4	0.7	0.6	1.2	1.8	4.8		51	コナラ	0.9				1.3*			92	コナラ	1.5	4.4	0.5	3.1							
2	コナラ	1.4	1.9	2.1	2.3	1.8	3.1	1.2	0.8	1.2	1.5	1.8	3.2		52	コナラ	0.8				0.7*			93	コナラ	0.9	2.6	0.6*	1.8							
3	クスギ	2.0	1.7	1.8	1.8	1.7		1.2	0.6	0.7				枯れ	53	コナラ	0.7	0.8	4.9	0.8*	1.3*		4.1	94	エゴノキ	1.2	2.7	0.4	1.6	萌芽						
4	クスギ	1.8	2.2	2.2	3.8	4.6	8.7	2.0	3.2	4.4	5.8	6.3	12.5		54	コナラ	0.7	0.7	0.9	0.8*	1.3*		2.9	95	コナラ	1.2	3.7	1.1*	1.8	実生						
5	コナラ	1.6	2.5	3.5	4.4	6.4	8.0	0.3	2.2	2.6	3.7	5.9	12.2		55	コナラ	0.3	誤伐生		10*	誤伐生			96	コナラ	0.8	2.1	1.0*	0.8							
6	クスギ	1.8	0.1	1.2	1.8	2.9	6.0	1.0	4.3*	1.2	1.1	2.7	5.8		56	コナラ	2.2				0.8			97	コナラ	1.1	2.3	0.7*	0.8							
7	コナラ	1.4				2.9		0.3			2.2			誤伐後再生	57	コナラ	0.5				0.9*			98	コナラ	1.4	1.2	1.4*	2.5							
8	クスギ	1.0	1.1	1.2	1.4	1.8	6.1	0.1	0.2	0.6	0.8	1.6	5.1		58	コナラ	0.6				1.6*			99	コナラ	1.4	2.7	1.9*	1.4							
9	クスギ	1.6	2.2	2.4	3.6	5.2	11.6	0.8	1.4	2.1	4.0	7.0	12.2		59	コナラ	1.1				1.7*			100	コナラ	0.9	2.2	0.9*	1.2							
10	クスギ	1.4	2.2	2.2	2.8	5.6	9.3	2.0	2.5	2.9	7.0	10.5		60	コナラ	0.4	0.6	2.0	1.2*	0.7*		0.8	101	コナラ	1.5	3.7	0.8	2.4								
11	クスギ	1.3	1.5	1.3	1.9	3.4	7.5	0.4	0.3	0.6	1.2	4.0	8.4		61	コナラ	0.9				0.7*			102												
12	コナラ	1.4	2.1	2.2	2.5	4.2	9.1	0.2	1.0	1.3	1.6	3.0	8.5		62	コナラ	0.6	0.9	4.8	0.5*	1.3*		3.3													
13	コナラ	1.5	1.8	2.6	3.5	5.4	9.9	0.4	1.1	1.9	3.0	5.3	12.5		63	コナラ	0.6	0.6	3.8	1.4*	0.9*		2.8	103												
14	クスギ	1.5						0.9						枯死	64	コナラ	1.0	1.7	5.5	1.3*	0.6*		4.5	104												
15	コナラ	0.9	1.0	1.7	2.4	3.0	6.0	0.1	2.7*	1.0	1.0	2.8	9.2		65	コナラ	0.8	0.9	4.1	0.7*	0.9*		1.8	105												
16	クスギ	2.0						1.0						枯死	66	コナラ	0.8	1.3	4.3	0.7*	0.5*		2.5	106												
17	コナラ	1.1							1.2					枯死	67	コナラ	1.1	1.1	3.0	1.6*	0.6*		2.0	107												
18	コナラ	1.0												枯死	68	コナラ	1.0	1.0	3.7	1.0*	1.3*		2.0													
19	コナラ	2.3	3.0	3.5	3.5	5.1			1.2	1.4	2.1	2.8	6.0		69	コナラ	0.9	1.2	3.3	1.7*	0.4*		2.1													
20	コナラ	1.2	1.7	2.4	3.3	5.8			0.1	0.6	1.1	2.4	7.1		70	コナラ	0.3	1.4	6.4	1.4*	1.0*		5.8													
21	コナラ	1.7	1.7	3.0	4.1	7.5			0.2	0.7	1.9	2.6	6.4		71	コナラ	0.6	1.0	2.0	0.8*	1.5*		1.5													
22	コナラ	0.3	1.3	1.8	3.0	7.4			3.3*	0.3	0.9	2.4	8.0		72	コナラ	0.7	1.2	5.0	0.8*	1.7*		4.3													
23	コナラ	1.5	1.6	1.9	2.9	7.0			2.1	0.6	1.2	2.0	7.0		73	コナラ	0.7	1.1	4.0	1.0*	1.5*		2.8													
24	コナラ	0.3							8.6*	-				枯死	74	コナラ	0.7	1.2	4.3	0.7*	1.5*		3.2													
25	ヤマザクラ	1.7	2.5	2.8	3.7	7.5			0.5	1.3	1.8	3.0	6.1		75	コナラ	0.8	1.2	4.0	0.8*	1.3*		2.6													
26	コナラ	0.4							9.2*	-				枯死	76	コナラ	1.1	1.2	2.3	1.3*	1.3*		1.3													
27	コナラ	1.6	2.2	2.4	2.3	5.3			1.1	1.7	1.8	2.5	4.8		77	コナラ	0.7	0.9	4.1	1.4*	1.4*		3.0													
28	コナラ	1.1	1.0						2.9*	0.4				枯死	78	コナラ	0.5	1.0	3.4	0.6*	1.6*		1.7													
29	コナラ	1.0	1.4	1.9	2.8	6.9			1.0*	0.4	0.9	2.0	8.0		79	コナラ	0.4	0.6		0.6*	0.6*		0.6*													
30	コナラ	1.3	1.4	1.7	誤伐生	2.2			0.5	0.4	0.6	誤伐生	1.0	誤伐	80	コナラ	0.8	1.0	3.4	2.2*	1.4*		2.3													
31	コナラ	2.3	3.5	3.9	4.3	7.8			1.2	1.4	2.2	2.6	6.8	萌芽	81	クスギ	0.8	1.0	1.4																	
32	ウツミズザクラ		4.4	5.4	7.0	7.2			5.2	6.5	9.2	13.0	萌芽	82	コナラ		0.9	2.2																		
33	エゴノキ		6.5	6.7	5.2	10.5			6.2	8.0	7.0	10.1	萌芽	83	コナラ		0.8	4.1																		
34	コナラ		6.7	8.0	8.3	11.0								萌芽	84	コナラ		0.5	2.2																	
35	ムクゲ		3.5						6.5	8.0	10.2	15.5	萌芽	85	コナラ																					
36	エゴノキ		3.4	4.5	5.9	7.8			2.5	4.4	6.4	14.0	萌芽	86	ムクゲ		3.6	4.9																		
37	コナラ		2.6	3.7	5.3	8.8			1.6	2.6	4.9	11.5	萌芽	87	コナラ		1.0	4.3																		
38	エゴノキ		6.4	6.0	6.4	7.4			7.2	8.8	12.1	14.8	萌芽	88	ケヤキ		3.8	6.0																		
39	ヤマザクラ		5.2						3.3					枯死	89	コナラ		1.3	4.6																	
40	クスギ		1.4	2.8	6.3				1.0	3.2	9.0			90	コナラ		1.0	2.7																		
															91	コナラ		0.8	2.1																	

* : 根元径 (mm)

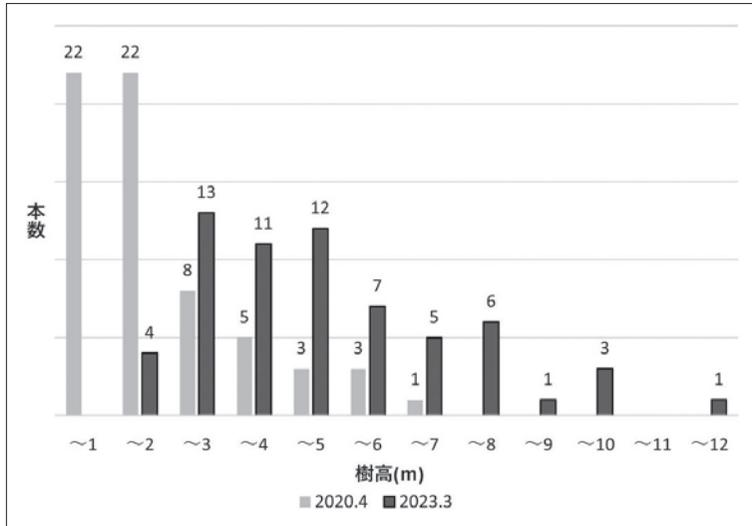


図3 コナラ林更新地植栽木の樹高成長 (2020.4~2023.2)

たが、2020年4月には、大きいものでは樹高6.4m、胸高直径5.9cmに達するコナラが見られるようになったほか、5m以上のクヌギ(2本)、コナラ(1本)なども見られるようになっていた。

2023年2月の調査の結果、樹高11.6mのクヌギをはじめ、前回では最高の6m以上のものがコナラ、クヌギなど16本確認できたほか、生育する植栽木の73%以上が樹高3m以上に達していた(写真1)。胸高直径も樹高ほど顕著ではないが、10cmを超えるコナラやクヌギが5本確認できるなど(写真2、3)、着実に成長を続けている。成長に伴う樹冠の発達によって、下草への光が遮られていくため、十分成林が期待できるところまでできているといえる。しかし、下草の成長によりコナラやクヌギの枝葉の枯れ上がりがか心配されるので、今後も定期的な下刈りは必要である。

今後は、雑木林としての林内景観を育成するために、カマツカ、ウグイスカグラ、サワフタギ、ヤマツツジ、ガマズミ、ムラサキシキブなどの低木を育成していくことも望まれる。また、早春から初夏を中心に美しい花を見せてくれる林床の草本の育成のためには、定期的な落ち葉掻きが必要である。

前回(課題66)から調査を開始した切り株から萌芽したコナラ、ウワミズザクラ、エゴノキ、ムクノキなどについても生育は順調である。

引用文献

- 1) 辻 誠治「コナラ林の再生. 西生田キャンパスの森の再生」『日本女子大学総合研究所紀要』17、2014年11月、8-10頁
- 2) 辻 誠治「コナラ林の再生Ⅱ. 西生田キャンパスの森の再生と保全」『日本女子大学総合研究所紀要』20、2017年11月、66-70頁
- 3) 辻 誠治・山田陽子「コナラ林の再生Ⅲ. 西生田キャンパスの森の保全および再生の記録」『日本女子大学総合研究所紀要』23、2020年11月、27-31頁



写真1 順調に成長する更新地のコナラなど



写真2 胸高直径10cm を超えたクヌギ



写真3 胸高直径10cm を超えたコナラ

II アカマツ林の再生IV

辻 誠治・砂川 俊輔・勝地美奈子・大石 円・
大越 佳子・田悟 知里・吉岡しのぶ・熊谷 彩香

はじめに

アカマツ林の再生は、2012年度から取り組みをはじめた¹⁾。調査地(図1)は泉山地区東端部の尾根筋から緩斜面である。作業開始時、アカマツをはじめ、ネジキ、アオハダ、ヤマウルシなど尾根筋の乾性地に多く生育する植物が見られたことから、かつてアカマツ林が成立していたものと考えられる。

再生の方法は、母樹の樹冠の下や周辺部に落下する種子から発芽した稚樹による更新方法である上方天然下種更新を採用することにした。

まず、かろうじて残っていた母樹となり得るアカマツ2本のまわりの面積約500m²に生育する樹木を西生田総務課の助力を得て皆伐した。また、林床は土の表面が出るまで下刈りと落ち葉掻きをした。これにより母樹から落下した種子の発芽とその後の成長が可能となる条件を整えた。

2013年度末に、アカマツの稚樹が1本確認できた。2本残るアカマツの母樹の樹勢が弱っているため、その後の種子の生産、供給が心配されたが、2015年3月に現地調査を実施したところ、34本の実生個体の生育を確認できた。2017年3月にも調査したところ、このうち33本の生育が認められ、樹高1mに達する個体も認められた。また、新たに29本の実生個体が確認できた²⁾。

前回の研究期間中は、毎年3月(最終年度は年度を超えて4月)にアカマツの生育状況を調べる毎木調査を実施したが、今回の研究期間中は、コロナ禍の影響によりアカマツ林の育林に必要な下

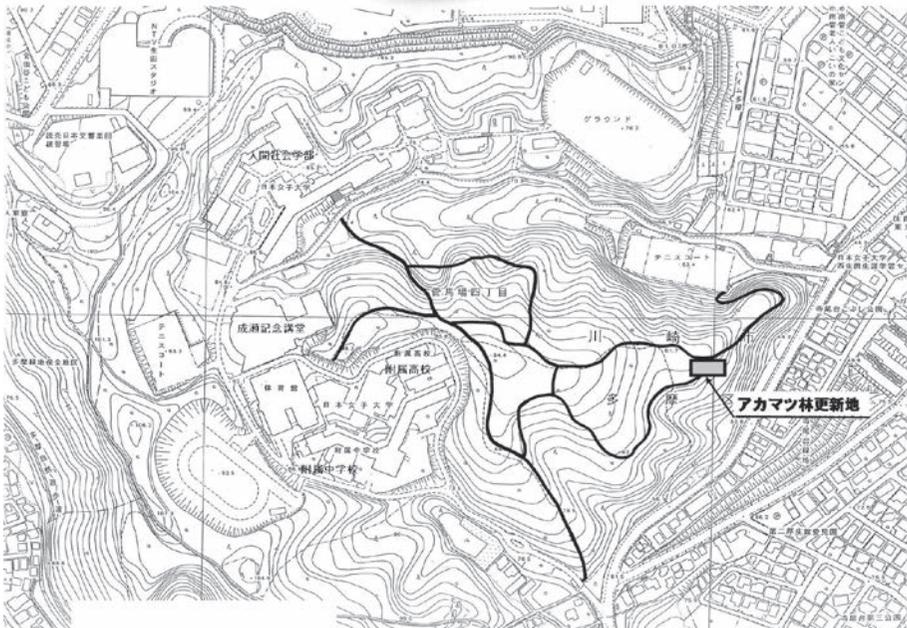


図1 アカマツ林更新地位置図

刈りなどの作業とアカマツの生育状況の調査は研究期間最終の3月まで実施出来なかった。

以下に2023年3月に実施したアカマツ林の再生の状況と育林のために実施した作業について述べる。

1. 更新地の現状

アカマツの実生幼木の位置を図2に、経年の変化を表1に示す。樹高と根元径、測定可能なものは胸高直径を測定した。今回は上述のように、2023年3月のみの調査となった。

2020年4月の調査と比べると、アカマツの実生幼木55本が枯死した。この数は、2013年3月にアカマツの実生個体の調査を始めてから、2020年3月までの6年間に枯死した個体数20本の2.75倍に達している。

枯死個体の樹高（2020年4月調査時）の内訳は、～50cm：38本、～100cm：9本、～150cm：6本、150cm～：2本（152cm、160cm）で、樹高50cmまでの個体が枯死数全体の約70%を、樹高100cmまでを含めると約85%を占めている。枯死の理由は、3年間の下刈り停止中に大きく生育したアズマネザサ、ヌルデ、モミジイチゴ、ヤマハギ、ススキ、ヒメコウゾ、アカメガシワ、クサギ、イヌザンショウなどの好陽生植物によりアカマツが光を遮られ、被圧されたことによるものと考えられる。典型的な陽樹であるアカマツの生育には下刈り等の施業が不可欠であることを如実に示している。

一方、残存し成長が確認できたアカマツは、計48本（うち1本はクロマツ）で、2023年3月調査時の樹高の内訳は、～50cm：10本、～100cm：7本、～150cm：5本、～200cm：5本、～250cm：7本、～300cm：2本、～350cm：2本、～400cm：1本、～450cm：2本、～500cm：2本、～550cm：5本、であった。2023年3月の調査では、2020年4月の調査時より平均で樹高を約2.4倍に成長させている（図3）。胸高直径も順調に成長しており、唯一のクロマツは10cmに達している（写真1、2）。

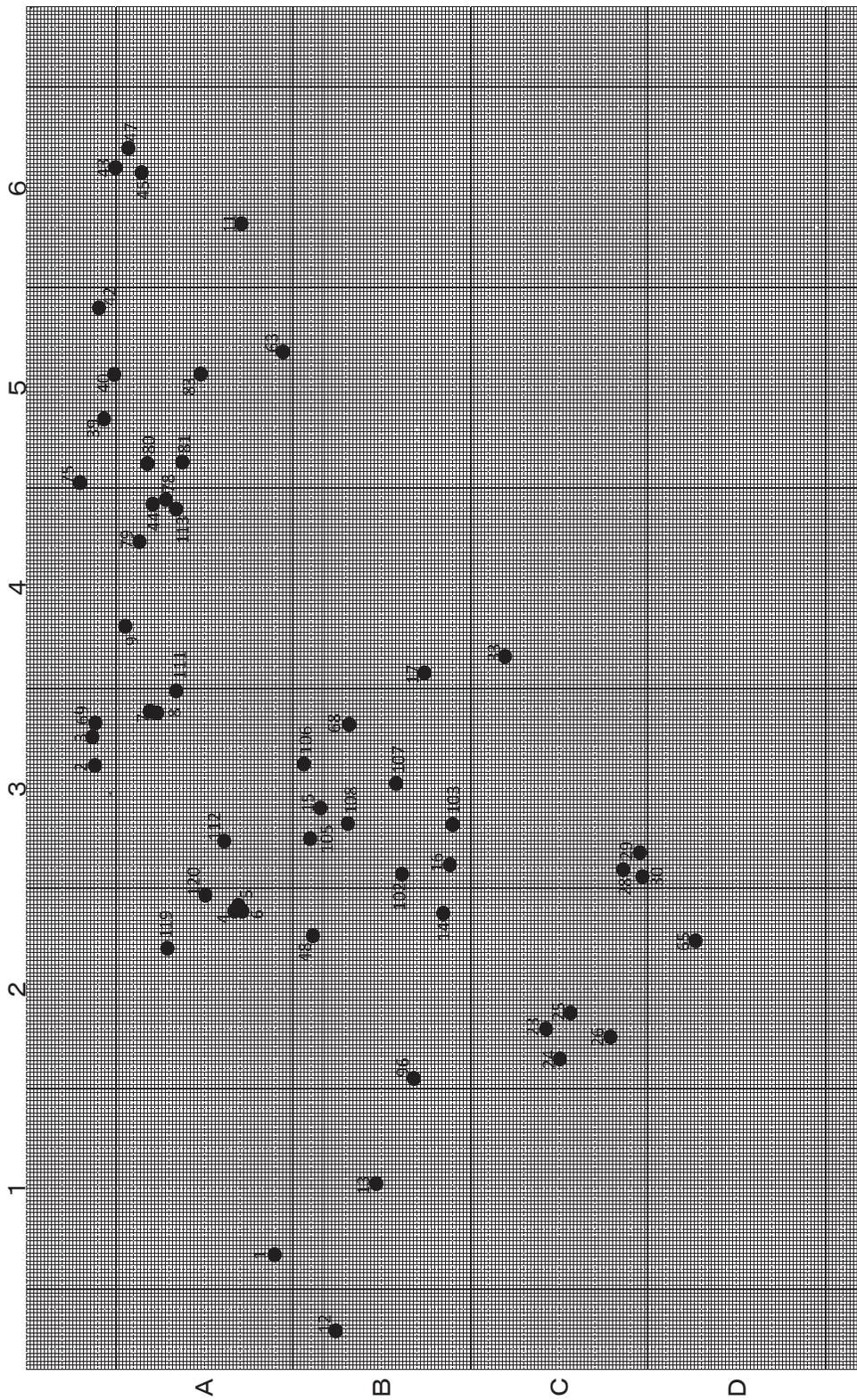
樹高が低くて残存したものの大半は最も尾根筋（幼木分布図のA1～6一带）に生育したもので、ここは表土が薄く上述の好陽生の植物はほとんど生育していなかった。

残存したものの約半数は樹高2mを超えており、今後も順調な成長が見込まれるので、5年程度でアカマツ林としての相観を示すようになることが期待できる。

アカマツ林の更新は達成できると思われるが、今後も下刈り等の作業は続けていく必要がある。

引用文献

- 1) 辻 誠治「アカマツ林の再生 西生田キャンパスの森の再生」『日本女子大学総合研究所紀要』17、2014年11月、11-12頁。
- 2) 辻 誠治「アカマツ林の再生Ⅱ」『日本女子大学総合研究所紀要』20、2017年11月、71-75頁。
- 3) 辻 誠治・山田陽子「アカマツ林の再生Ⅲ」『日本女子大学総合研究所紀要』23、2020年11月、23-26頁。



西生田キャンパスの森を活用した新規学習プログラムの開発

表1 アカマツ実生幼木の現況

No	樹高 (cm)						根元径 (mm)						No	樹高 (cm)			根元径 (mm)			胸高直径			
	2015.3	2017.3	2018.3	2019.3	2020.4	2023.03	2015.3	2017.3	2018.3	2019.3	胸高直径	根元径		胸高直径	根元径	胸高直径	2019.3	2020.4	2023.3		2019.3	2020.4	2023.3
1	7.5	60.0	110.0	150.0	292.0	538.0	4.0	11.8	22.0	38	1.3		3.4		10.0	66	5.0			11.0			
2	4.0	15.0	40.0	50.0	102.0	201.0	1.5	5.2	7.0	12		16.5			1.1	67	3.0			5.0			
3	4.0	25.0	45.0	60.0	96.0	182.0	1.0	7.2	13.0	15		22.1			1.1	68	4.0	70.0	217.0	13.0	26.7		2.1
4	6.0	15.0	20.0	30.0	80.0	82.0	1.0	4.2	9.0	11		11.0		20.0		69	3.0	70.0	106.0	7.0	10.6		1.5
5	6.5	5.0	10.0	20.0	50.0	92.0	1.5	1.3	15.0	3		6.0		15.0		70	1.0	17.0		4.0	3.9		
6	8.0	25.0	30.0	50.0	80.0	197.0	2.0	6.0	10.0	16		21.5			1.3	71	1.0	41.0		4.0	7.5		
7	3.0	30.0	37.0	50.0	110.0	225.0	1.2	5.8	7.0	11		16.3			1.5	72	1.0	21.0		3.0	4.3		
8	6.5	40.0	60.0	80.0	124.0	279.0	2.2	15.5	16.0	28		38.4			2.4	73	2.0	43.0		5.0	7.2		
9	5.0	20.0	35.0	50.0	105.0	237.0	2.0	7.5	12.0	16		24.2			2.3	74	1.0	8.0		1.0	1.5		
10	5.5	15.0	-	-	-	-	1.0	3.0	-	-		-	-	-	-	75	1.0	18.0	43.0	2.0	2.7	6.0	
11	6.0	20.0	30.0	60.0	96.0	152.0	2.0	9.7	10.0	14		24.8			1.4	76	1.0	24.0		3.0	3.1		
12	14.5	100.0	140.0	210.0	324.0	506.0	6.0	23.5	41.0	49	1.8		3.1		8.0	77	1.0	16.0		4.0	3.8		
13	4.0	25.0	65.0	100.0	195.0	326.0	1.9	16.8	16.0	28			1.0		5.5	78	1.0	-		2.0	-		
14	7.0	13.8	80.0	100.0	216.0	399.0	3.0	4.5	22.0	33			1.3	3.4	79	1.0	31.2	53.0	1.0	1.8	10.0		
15	12.0	70.0	84.0	140.0	265.0	526.0	5.0	22.0	34.0	44	1.0		2.9		8.7	80	1.0	14.0	47.0	2.0	2.5	13.0	
16	6.0	30.0	48.0	90.0	129.0	214.0	1.4	9.1	11.0	15		53.1			1.3	81	1.0	16.0	46.0	1.0	3.1	11.0	
17	5.5	45.0	65.0	100.0	184.0	428.0	1.7	9.0	14.0	26			1.7		6.4	82	1.0	-		1.0	-		
18	7.0	25.0	45.0	90.0	149.0		3.0	11.1	20.0	28			0.7			83	1.0	29.0	57.0	6.0	6.5	15.0	
19	3.5	20.0	30.0	50.0	62.0		1.5	9.8	10.0	16		20.5				84	1.0	50.0		4.0	7.4		
20	7.0	45.0	60.0	100.0	138.0		2.0	13.4	18.0	31			0.7			85	2.0	-		4.0	-		
21	2.0	-	-	-	-	-	1.9	-	-	-						86	1.0	-		5.0	-		
22	7.0	50.0	35.0	60.0	110.0		3.1	12.8	17.0	17		20.5				87	2.0	35.0		5.0	5.6		
23	5.0	50.0	85.0	120.0	220.0	523.0	3.0	9.6	16.0	24			1.3		4.3	88	1.0	30.0		6.0	2.8		
24	6.5	50.0	85.0	120.0	159.0	404.0	2.0	10.9	17.0	25			1.3	2.6	89	1.0	40.0		3.0	3.8			
25	8.0	75.0	120.0	160.0	259.0	532.0	4.0	15.9	33.0	45	1.4		2.4		6.2	90	1.0	40.0		3.0	5.4		
26	8.0	80.0	120.0	200.0	325.0	489.0	3.0	15.4	30.0	40	1.4		3.0		6.9	91	2.0	50.0		4.0	5.4		
27	4.0	40.0	70.0	90.0	152.0		2.0	10.0	16.0	24			1.0			92	1.0	40.0		3.0	4.1		
28	7.0	45.0	60.0	80.0	90.0	209.0	2.5	10.9	16.0	20		16.4			1.0	93	1.0	40.0		6.0	5.8		
29	7.0	15.0	30.0	50.0	117.0	223.0	2.0	7.4	7.0	13		24.4			1.7	94	1.0	-		3.0	-		
30	5.0	35.0	50.0	80.0	118.0	197.0	1.5	10.1	13.0	20		27.0			1.5	95	2.0	-		5.0	-		
31	6.0	40.0	80.0	100.0	160.0		1.4	10.0	15.0	19			1.0			96	2.0	50.0		5.0	7.6		
32	10.0	60.0	90.0	-	-	-	1.5	10.8	18.0	-						97	1.0	25.0		5.0	5.5		
33	10.0	85.0	125.0	150.0	223.0	468.0	4.5	15.0	22.0	34	1.0		2.2		5.8	98	1.0	-		2.0	-		
34	6.0	25.0	30.0	50.0	87.0		3.5	7.7	10.0	12		16.3				99	1.0	40.0		4.0	6.9		
35		8.0	17.0	-	-	-		7.3	5.0	-						100		30.0			4.2		
36		9.0	20.0	-	-	-		7.4	5.0	-						101		45.0			6.3		
37		5.0	8.0	10.0	20.0			1.9	2.0	4		4.9				102		25.0			5.4		
38		5.0	8.0	10.0	90.0			3.2	3.0	5		4.1				103		30.0			2.5		
39		5.0	9.0	10.0	12.0	50.0		1.2	2.0	3		2.4		10.0		104		37.0			4.8		
40		5.0	10.0	10.0	28.0	41.0		1.5	3.0	4		5.5		12.0		105		100.0	251.0		15.7		2.0
41		5.0	11.0	10.0	23.0			2.3	3.0	4		4.1				106		35.0	322.0		11.3		3.8
42		5.0	-	-	-	98		3.3	-	-				17.0		107		30.0			7.1		
43		9.0	20.0	30.0	61.0	112.0		2.4	3.0	5		10.0			0.7	108		50.0			8.9		
44		3.0	-	10	110	22		4.0	-	2		26.0		5.0		109		40.0			11.3		
45		8.0	11.0	30.0	55.0	149.0		2.0	3.0	5		9.7			0.8	110		110.0			28.3		
46		5.0	9.0	-	-	-		2.0	4.0	-						111		30.0	78.0		4.7	17.0	
47		6.0	11.0	30.0	50.0	91.0		1.3	3.0	4		7.7		21.0		112		48.0	149.0		10.5		1.0
48		5.0	15.0	30.0	80.0	196.0		3.3	4.0	10		22.0			1.9	113		5.0	20.0		1.5	7.0	
49		5.0	12.0	40.0				4.6	5.0	8						114		5.0			0.9		
50		6.0	14.0	10.0				5.1	6.0	4						115		7.0			1.0		
51		6.0	8.0	-	-	-		2.6	2.0	-						116		4.0			0.7		
52		7.0	17.0	30.0	74.0			4.5	6.0	9		20.7				117		24.0			4.4		
53		8.0	20.0	40.0	90.0			5.7	7.0	12		20.5				118		34.0			5.7		
54		10.0	25.0	50.0	102.0			2.0	8.0	14		21.5				119		15.0	32.0		4.2	11.0	
55		6.0	15.0	20.0	56.0			6.5	7.0	11		11.2				120		3.0	40.0		0.3	7.0	
56		5.0	10.0	20.0	42.0			1.2	2.0	6		6.8				121		10.0			2.2		
57		6.0	10.0	20.0	47.0			1.3	4.0	6		11.0				200			13.0			8.0	
58		8.0	15.0	30.0	57.0			7.2	5.0	9		11.0											
59		6.0	15.0	30.0	46.0			5.9	4.0	8		12.5											
60		25.0	50.0	70.0	137.0			6.9	11.0	18				8.2									
61a		6.0	23.0	40.0	83.0			3.0	6.0	15		20.4											
61a			15.0	20.0					3.0	7													
62		8.0	17.0	20.0	52.0			2.5	3.0	6		11.5		1.0									
63		6.0	7.0	10.0	31.0	115.0		2.1	3.0	5		7.3											
64		3.0	12.0	-	-	-		4.7	5.0	-													
65		5.0	-	-	-	-		5.9	-	-													

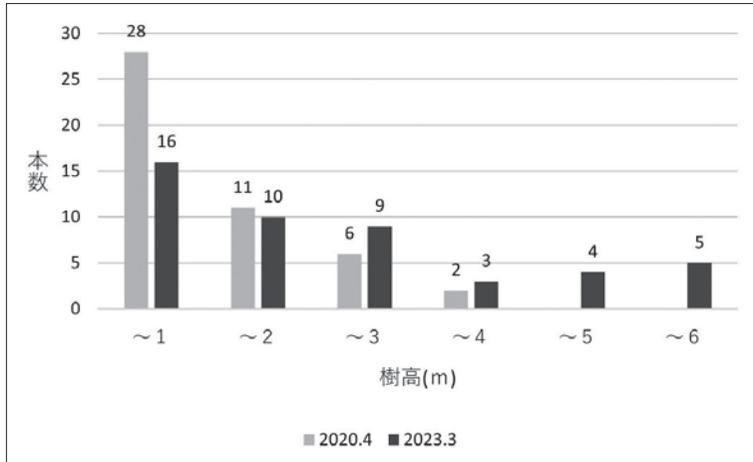


図3 アカマツ林更新地幼木の樹高成長 (2020.5~2023.3)



写真1 順調に生育するアカマツ林

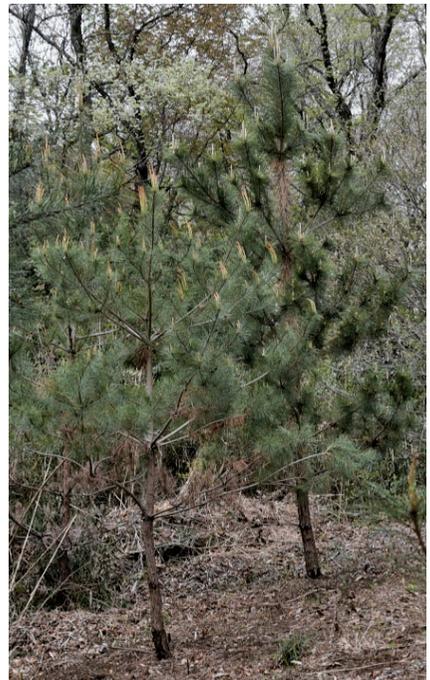


写真2 順調に成長するアカマツと森唯一のクロマツ

Ⅲ 西生田キャンパスの森のナラ枯れの現状とこれから

辻 誠治

[ナラ枯れの現状]

2020年9月に附属中学校の大越佳子研究員から、キャンパスのコナラ林のナラ枯れの被害が大きいとの連絡をいただいた。被害状況を把握するため、まず現況調査をということになり、早速調査を始めた。

まず、中高グラウンドとテニスコートの間にある小尾根一帯、正門脇から歩道を上り上部平坦部入り口付近までを調査した。被害木のマッピングと胸高直径の測定をしたが、長い間、下刈りや落ち葉掻きなどの管理作業が行われていないため、林内は大変荒れており、調査は困難を極めた。その後は新型コロナの影響でなかなか調査を進めることはできず、2回目は2021年6月に泉山地区について実施した。

調査結果は令和3年11月13日開催の第24回研究発表会で発表し、内容は総合研究所から公表されている。その後は、コロナ禍もあり調査人員が確保できないことや、被害が際限なくとも研究メンバーの手の及ぶところではなくなったので、新たな調査は出来ていない。その後のデータの再検討や新たな参考資料の検討により、一部訂正を加え追記したものを再録しておく。

2回の調査の結果、ナラ枯れによる枯死木55本、被害を受けた半枯死木4本、計59本が認められた(図1)。被害木の胸高直径分布を見ると、20cm以上、特に30cm以上のものが圧倒的に多いことが明らかとなった(図2)。このことは全国各地から報告のあるあるナラ枯れの被害の状況と同様の傾向で、伐採による萌芽更新の適期を過ぎた樹木が被害木の大半を占めていることが明確になった。

西生田キャンパス内にあるコナラの総本数は把握できていないが、生育するコナラ全体に占める被害木の割合や他の種を含めた樹木全体に占める被害木のおよその割合を推定するために、2021年10月に2006年より下刈り、落ち葉掻きなどの作業を継続し、林床調査を続けてきた調査区2カ所のコドラートに現存する胸高直径5cm以上の全樹木についてマッピングと胸高直径の測定をおこなった。

2つの調査区で確認できた樹木は43株、5cm以上の胸高直径を持つ幹65本に対して、コナラは22株(51%)、萌芽により分枝した幹31本(47.7%)であった。このうちナラ枯れにより枯死した幹が8本、半枯れなどの被害木が11本で、2つの調査区に現存するコナラの61.3%がナラ枯れの被害を受けていることが明らかになった。被害木は胸高直径の大きいものが多いが10cm以下のものにも被害が認められた(図3)。

ここまでの調査では、同じナラ属のクヌギには被害は認められなかったが、同年10月に大きく被害を受けたクヌギを発見した。キャンパス内にはクヌギも多く生育しているが、コナラに比べると被害は少ないようだ。

[今後]

林野庁から示された平成29年からの都道府県別のナラ枯れ被害量の推移²⁾を見ると、大阪府、奈良県、三重県、鳥取県、熊本県、鹿児島県などの西日本を中心とする地域では被害量が明らかに

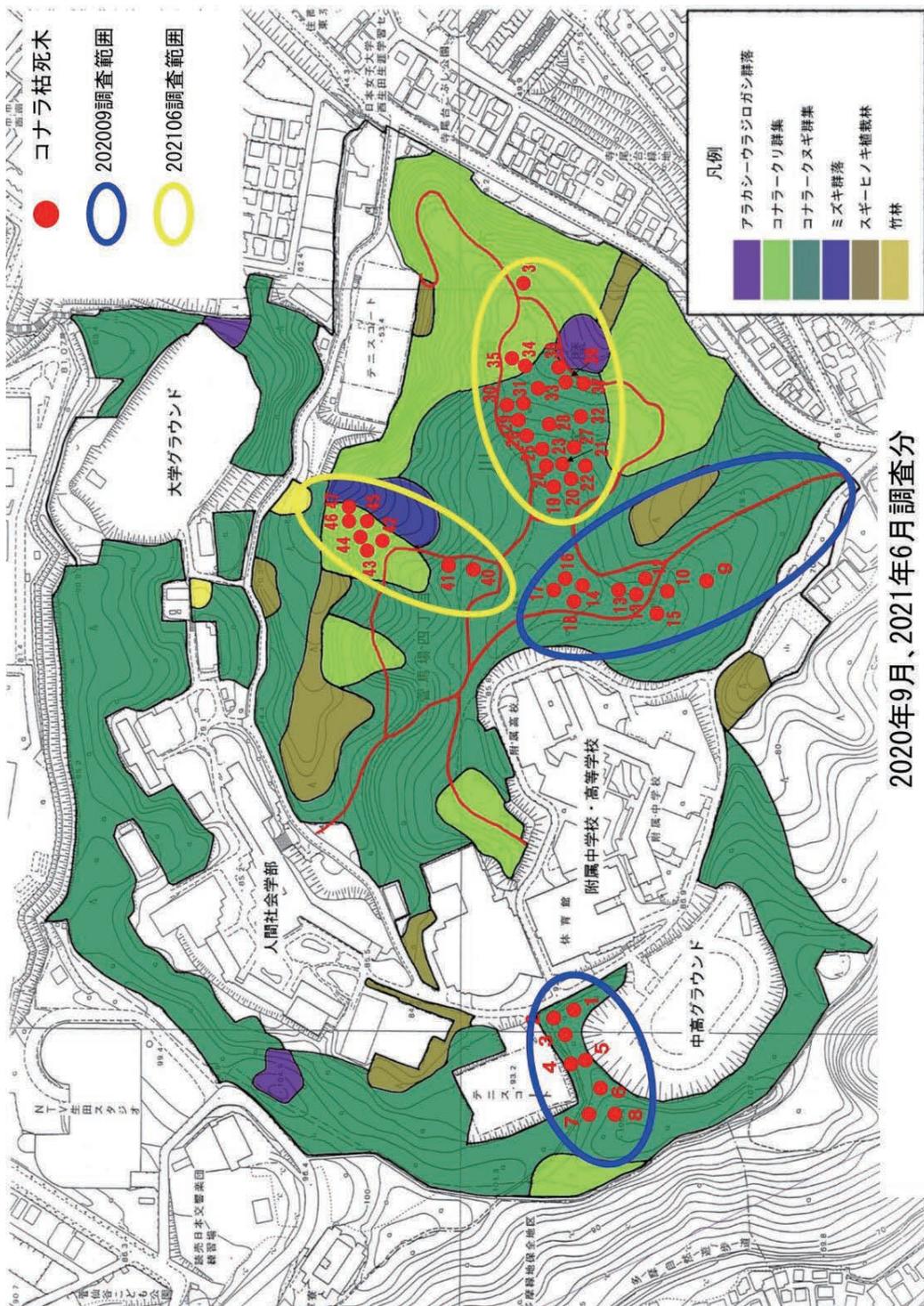


図1 ナラ枯れ被害木位置図

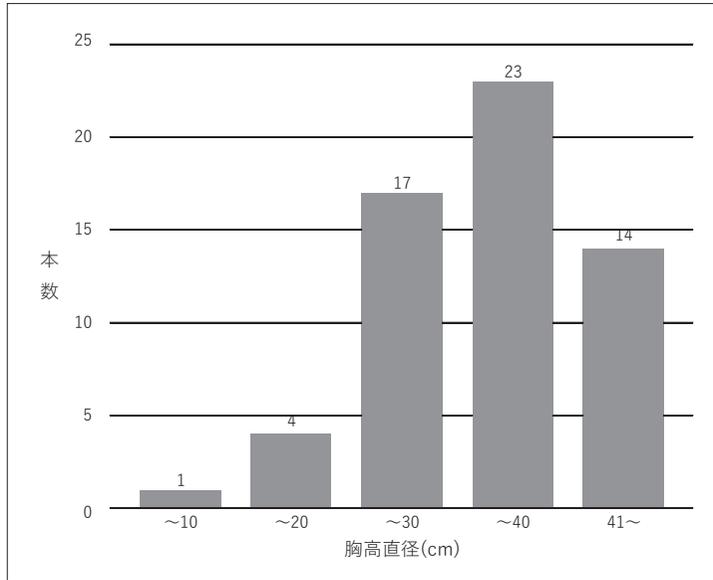


図2 ナラ枯れの被害木の胸高直径の内訳

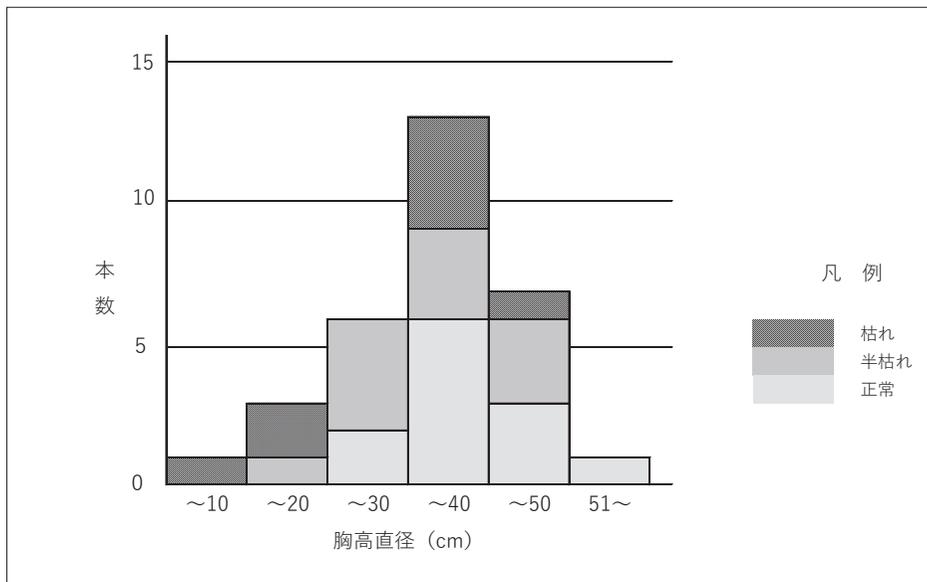


図3 林床調査地域内のナラ枯れの現況

減少傾向にある（岡山県などの例外もある）。5年くらいをピークに減少に転ずるようだ。一方、神奈川県、東京都、埼玉県、栃木県、茨城県、福島県などの東日本一帯では急激な増加傾向が認められる。この地域も5年後くらいには減少する可能性があるが、島根県、秋田県のように一度減少に転じた後に再び増加に転じる例もみられる。このように今後を明確に見通すのは困難というのが現状である。したがって、ナラ枯れ対策の実施は必要不可欠である。

今後なすべきこととしては、まず枯死木の伐採と撤去、倒木の撤去である。これらはキャンパス外には持ち出せない。

続いて防除の実施である。全国各地から報告されているナラ枯れに対しては様々な防除法が提案されている。本研究においても、そのうちの1つを試験的に導入したが、森全体に対策を講じるならば、もっと安価で効果的な方法を導入すべきである。

また、ナラ枯れに対する根本的な対策は森の更新であると筆者は考えているが、対象はキャンパスの森のほぼ全体に及んでいるので、計画的な対策の立案が求められる。

森の研究メンバーによるその後の調査は実施できていないが、2022年度末のナラ枯れの状況については、大学施設課がより正確な調査をされ、枯死木の撤去などを進められている。ナラ枯れの拡大はやや小さくなる傾向と伺っている。

学園全体が西生田キャンパスの森の現状と問題点、今後のあり方についての認識を共有し、具体的な対策を早急に講じていただく必要があると考えている。

引用文献

- 1) https://mcm-www.jwu.ac.jp/~sogoken/publication/report/jwu_sogoken_news_32_74.pdf
- 2) https://www.rinya.maff.go.jp/j/hogo/higai/naragare_R3.html

Ⅳ 西生田キャンパスの森におけるナラ枯れの原因と対策

砂川 俊輔

ナラ類やシイ・カシ類などの樹幹に「カシナガキクイムシ」(写真1)が潜入し、ナラ菌(ラファエリア菌)を感染させ、ナラ菌が増殖することで水を吸い上げる機能を阻害して枯死させる伝染病の総称である。カシナガキクイムシが、樹木に侵入すると、痕跡として樹皮に細かな木くずが見られる(写真2)。

平成30年から、西日本から全国的に広がりを見せ、令和2年度には、東日本に影響が拡大してきている(参照:林野庁HP)。おおよその傾向としては、約5年を一つのタームとして、地域が遷移していくことが判ってきている。

ナラ枯れのメカニズムは、①ラファエリア菌に寄生されたカシナガキクイムシがナラ科の樹木に侵入する。②カシナガキクイムシは、集合フェロモンを放出し、大量のカシナガキクイムシを呼び寄せる。これをマスマックという。③産卵し、幼虫が生まれると、樹幹をエサとして食い、物理的に道管(植物が水分を吸い上げる管のこと)を詰まらせたり、幼虫に引き継がれたラファエリア菌によって道管を構成する細胞が破壊され、給水障害が発生する。④一番、給水の必要な初夏から夏にかけて③がおこるため、枯死していく。⑤蛹を経て、成虫になり、ラファエリア菌を付着させた状態で木を出ていく。そしてまた次の世代を増やすために、①～⑤を繰り返す。

つまり、ナラ枯れは、カシナガキクイムシの生活環をラファエリア菌が利用した形で起こっているのである。



写真1 カシナガキクイムシ
(撮影: 附属中学校 生物・天文クラブ)



写真2 カシナガキクイムシに侵入されたコナラの樹皮
(撮影: 研究会)

2. ナラ枯れ対策

ナラ枯れの対策として挙げられるのは、大きく分けて3つある。

- A. 物理的：樹幹にシートを巻き、カシナガキクイムシの侵入を阻止する。
- B. 化学的：樹幹に薬品を注入し、昆虫の駆除や菌の増殖を抑える。
- C. A Bの合わせ技

本研究会では、まず実態調査を2つすることとした。

1つ目は、西生田キャンパスの森（調査範囲）の中にどれくらいナラ枯れが起きているのか？調査した。2つ目は、武蔵野市からナラ枯れ対策の委託を受けている業者に調査のレクチャーをしていただき、カシナガキクイムシがどれくらい、樹木に侵入しようとしているか？を調べた。この方法（写真3～写真5）は、ペットボトルの上部のみを切ったようなプラスチック製の部品を30個連結させた装置をナラ科樹木に設置する。昆虫が飛んでくると、足を滑らして一番下まで落下し、アルコールに浸って固定される仕組みとなっている。設置は、研究会が行い、継続調査は、中学校の生物天文クラブが行うことになった。



写真3 捕獲装置を設置している様子



写真4 捕獲装置



写真5 捕獲装置の下部

V 中学校「生物・天文クラブ」との連携

大越 佳子

1. はじめに

附属中学校生物クラブは、2020年度から天文クラブと合併し「生物・天文クラブ」となった。「天文部門」の活動は、週1回夕方から天体観測を中心に行っている。人工光の少ない西生田の森の中での天体観測は、本校ならではの設備と自然を活かした活動となっている。「生物部門」は、週2回おもに西生田の校地を利用した活動を行っている。入部理由として「豊かな自然を活かした本校ならではの活動ができること」があり、西生田の豊かな自然が生徒たちにとって魅力の一つとなっている。ここではおもに生物部門の活動について紹介する。

2. 生物部門の活動

* 十月祭

主には10月に行われる文化祭「十月祭」での発表に向けて、それぞれがテーマを決めて研究に取り組んでいる。研究テーマとして、西生田の自然を利用したものが多く見られる。例として「西生田の植物調べ」「葉脈標本づくり」「オオカマキリのあしについて」「ヤツデとツワブキの維管束の比較」「いろいろな植物で染めもの」「イヌワラビ、ヤツデ、ツワブキの光合成について」「オタマジャクシの観察」「西生田の昆虫の調査と標本づくり」「アジサイの色水実験」「西生田で見られる鳥」「カブトムシの成長」「クロナガアリを使った実験」「ダンゴムシの反応について」などである。生徒たちは、実際に動植物を観察して触って楽しみながら研究を行っている。



西生田の植物調べ



オオカマキリ



オタマジャクシの成長



カブトムシの成長

***季節ごとの活動**

春には新入生との親睦を兼ねて校地内の散策を行う。昆虫やオタマジャクシを採集し、個人研究の材料とする生徒もいる。

秋には文化祭（十月祭）の展示用にカブトムシの幼虫を採集する。

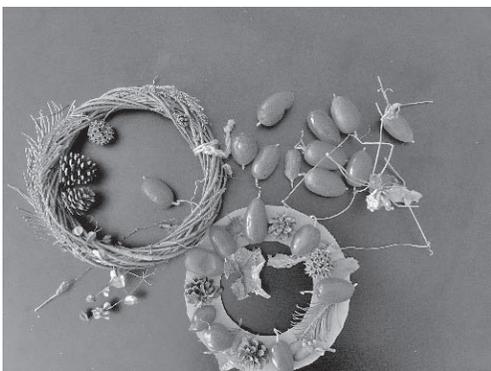


校地内の散策



カブトムシ幼虫採集

冬には校地内で採れる果実や葉を利用したクリスマスリースづくりや森林保全のための落ち葉掻きを行っている。



クリスマスリース作り



落ち葉掻き



アカマツ付近の下草刈り

3. ナラ枯れ調査

- ①森林の会のナラ枯れ調査の手伝いとしてトラップの回収と設置（図1参照）を行った。夏から秋にかけて2週に1回を予定して行ったが、クラブ活動の予定に合わせるため、2週以上空く場合もあった。1本のコナラに北方向（N）と東方向（E）の2セット設置した。
- ②回収した昆虫類の仕分けやカシノナガキクイムシの数の確認を行う（図2参照）。目的のカシノナガキクイムシ以外の昆虫他もトラップ内の液体に入っているの、一つ一つ分けて数を数えた。カシノナガキクイムシ以外の昆虫の名前もできるだけ調べた。大型のものは標本を作製した（図3参照）。



図1 トラップの回収と設置

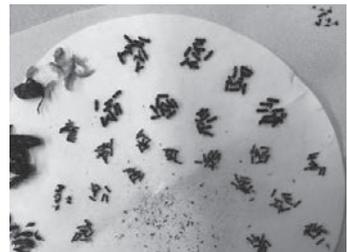


図2 カシノナガキクイムシ数の確認



図3 標本作成

③結果は以下の表の通りである。ナガキクイムシは合計で647匹（N 305匹、E 342匹）採集できた。

N		＜コナラ北方向＞		
設置日	回収日	カシナガの数	キクイムシ種類	その他生物・備考
2021.7.31	2021.8.3	70		8
2021.8.3	2021.9.1	103	カ：67 ヨ：36	156（ハマトビムシ、アリ、セイヨウシミ、甲虫など）
2021.9.1	2021.9.17	10	カ：7 ヨ：3	21（ムカデアリなど）
2021.9.17	2021.10.8	115	カ：113 ヨ：2	41
2021.10.8	2021.12.24	6		19
2021.12.24	2022.7.27	0		58
2022.7.27	2022.11.9	1		48

E		＜コナラ東方向＞		
設置日	回収日	カシナガの数	キクイムシ種類	その他生物・備考
2021.7.31	2021.8.3	80		10
2021.8.3	2021.9.1	234	カ：71 ヨ：163	155（クリノミキクイムシ11、ハマトビムシ、アリ、甲虫など）
2021.9.1	2021.9.17	7	カ：1 ヨ：6	55
2021.9.17	2021.10.8	9	カ：8 ヨ：1	51
2021.10.8	2021.12.24	1		11
2021.12.24	2022.7.27	11		3
2022.7.27	2022.11.9	—		落ち葉や土に埋もれ回収不能

④結果の表から、カシナガノキクイムシの活動は7月～9月が盛んだと考えられる。一般的に6月～9月（活動のピークは7～8月）といわれているので、今回の結果と合致している。コロナ禍でクラブ活動に制限があったため、予定通りの活動ができず、変則的な間隔でのトラップ回収となってしまった。小さな昆虫があつという間に大木を枯らしてしまう現実を、実験を通して知ることができた。

4. 今後の課題と活動

* 森の再生

今後は埋まってしまったトラップを掘り起こして再使用できるように整えて、回収調査を継続していきたい。また森林更新を目標として、今年はドングリ（コナラ、クヌギなど）から発芽した苗を採集し、伐採した木の根元付近に植えた。今後は、この苗の成長の様子を観察し、次年度の再生活動に活かしていく予定である。



図4 コナラ植え付け

* 附属校間での連携

小学校理科が西生田地区で行っている植物観察会は、森の会のメンバーが補助をしていたが、次年度からは中学校生物天文クラブ（生物部門）の生徒が補助に入り、実施した。また新たな企画として、附属小学校児童を対象とした天体観望会を中学校生物天文クラブ（天文部門）と一緒にを行う予定である。

自然豊かな西生田だからこそできることを今後も考え実施していく予定である。

5. 教育活動での利用（全体）

クラブ活動での西生田の利用についてまとめたが、クラブ以外でも豊かな自然環境を利用した活動が行われている。

附属中学・高校理科では野外観察、実験観察材料の採集、植物遷移の観察、環境調査など多岐にわたり活用している。また理科以外でも美術、社会（地理）、道徳総合、自治活動（総務）など、また幼稚園、小学校、大学理学部などでも利用している。このように西生田の自然環境は、児童、生徒、学生の教育活動に欠かせないものとなっている。この素晴らしい教育環境の維持のためには学園の力が不可欠である。学習カリキュラムも考慮しながらの整備（草刈、樹木管理など）をお願いしたい。

Ⅵ 西生田キャンパスの森の観察会

砂川 俊輔

1. はじめに

研究課題74では、今までの「西生田キャンパスの再生と保全」の趣旨を継承しつつ、より教育的活動にシフトした形の研究を目指した。その基盤ともなるのが「西生田キャンパスの森の観察会」であろう。この観察会は、研究課題初期から附属豊明小学校3年生とその保護者を対象にして春と秋、年2回行ってきた。2020年から始まった研究課題74だが、前述（まえがき参照）したように、新型コロナウイルス感染症の蔓延により、企画をしては緊急事態宣言の発令、感染状況の悪化や社会情勢の動向、悪天候、ナラ枯れなどさまざまな要因によって、ことごとく中止を余儀なくされた。

その中でも、2021年12月「くみあい主催の観察会」、2022年12月「附属豊明小学校3年生対象・秋の観察会」を実施することができた。この章では、小学校対象の観察記について報告させていただく。なお、報告の形式は過去の活動と比較できるように、今までの研究紀要に準えて行うことにした。

2. 実施に向けての確認事項

- ・西生田キャンパスの森の研究グループ（日本女子大学総合研究所 研究課題74）と豊明小学校理科研究部との共催にする。
- ・対象は附属豊明小学校3年生児童とその保護者とする。
- ・観察会は豊明小学校で行う3年生の理科の学習に関係するものではないことをきちんと伝える。
- ・西生田キャンパスへの行き帰りと、観察会中の危険防止・安全確保はそれぞれの家庭の責任とすることを明確に伝える。
- ・スタッフを十分確保する。

3. 観察会（秋編）

- ・日 時：令和4年12月3日（土）10時30分～12時20分
当時は、8時50分に集合し、サポート部（豊明小学校）と共に、下見を行い、コースの安全性や観察のポイントの確認を行った。なお、2週間前にも作業で現地に来ていたため、下見は最小限で大丈夫だった。
- ・参加者：24組48名（当日欠席：1組2名）→ 23組46名
- ・スタッフ：西生田の森の研究会メンバー 8名
小学校豊明会サポート部 13名
- ・流れ：8時50分 教員、サポート部 バス転回場集合
10時30分 参加者 集合
10時30分～12時10分 散策
12時20分 解散

【観察のポイント】

- ・樹皮で見分ける樹木の種類
- ・秋の草花や実、紅葉
- ・保全活動について

【森を歩くときの注意】

- ・おしゃべりをしない
- ・走り回らない
- ・花をとらない
大切な植物がたくさんあります
- ・家族と一緒に

4. 観察会を終えて

教育的活動に重きを置いて活動するはずであったのに、3年間で1回しか実施できなかったことが本当に悔やまれる。しかし、ネガティブなことばかり目を向けていてもよろしくない。久しぶりに開催できた観察会は、実に楽しかった。私自身もそうだが、参加した子供たちの表情が素晴らしかったのである。森の中を散策というよりも「探検」に近い気持ちであったように思える。道中、どうしても撤去することのできなかった大きな枝の下をくぐったり、または乗り越えたり、自然を満喫するということ子供たちから教わったような気がする。教育的利用というのはこういうことなのだとはっとした。保護者も同様に、自然を満喫していた。初冬の北風が通り抜ける道を抜けると日差しが差し込むアカマツ林にたどり着く。そこで感じた陽の温もりは、まさに自然の恵みである。学園の中に、自然を満喫できる森林がある、これほど尊いことはないのではないかと改めて感じられた観察会であった。

5. 資料編

記録のために、募集用紙を添付する。

2022年11月11日

3年生保護者各位

日本女子大学附属豊明小学校 理科
日本女子大学総合研究所研究課題74
西生田キャンパスの森の研究会

西生田キャンパスの森の観察会（秋編）開催のご案内

<はじめに>

秋も深まり、木々の葉の色にも変化が見られるようになってまいりました。

「西生田キャンパスの森の研究会」は、日本女子大学総合研究所の研究課題として採択され、附属幼稚園から大学までの理科系の教員から構成されている研究グループです。

森の研究会では、かねてより3年生の児童と保護者を対象に「西生田キャンパスの森の観察会」を開催しておりましたが、この3年間コロナ禍により実施ができませんでした。今年度は、学校行事が通常に行われていることを考慮し、本研究会でも感染対策を行った上で、加えて野外での活動ということなど総合的に判断し、「観察会を実施する」とことといたします。

<観察会の内容>

秋の西生田の森は、木々の紅葉の色どり、落ち葉を踏みしめたときの音など、感覚で楽しませてくれます。今回ご案内する観察会は「この森を3年生の児童、保護者の皆様と一緒に楽しく観察しましょう」というものです。研究会所属の教員と参加者数組のグループをつくり、森の中を解説しながら散策します。

日 時：2022年12月3日（土） 受付開始10：30

散策 11：00～12：20ごろ（予定）

集合場所：西生田キャンパス内 バス転回場（正門からサポート部の誘導があります）。

服 装：歩きやすい服装・靴、長袖、長ズボン、冷え込みが予想されますので防寒具をご用意ください（厚手の上着・手袋・マフラー・カイロなど）

<ご参加について>

感染症防止の観点から

- ・3年生のお子様1名に付き、保護者様1名でお願いいたします。
- ・マスクを着用、水分補給はご指定の場所でのみお願いいたします。
- ・現地集合、現地解散にいたします。
- ・状況によって、直前で中止になる場合がございます。



・その他

当日の雨天が予想される場合は、前日にご連絡することがございます。

お申込み時にご登録いただくメールアドレスにご連絡いたします。

「 <お申込み>

「 お申込み期間

「 11月14日（月）～11月21日（月）

「 右フォームからお願いします。

お問合せ先

ご質問、当日の欠席連絡はこちらへ

※受付開始時刻までにお問い合わせいたします

Ⅶ 小学校西生田の森の利用に関して

勝地美奈子

現行の西生田校外学習の比率とその重要性

西生田の森は、小学校理科において大変重要なフィールドとなっている。サツマイモやジャガイモの収穫体験をしている小学校は数多くあるが、学園の所有する敷地内で実施している小学校は数少ない。施設課の管理のもと、無農薬栽培された野菜を収穫できるというのは、本学ならではのアピールポイントとなっている。

小学校内に目を向けた時、校外学習*の約30%が西生田の活動であることが分かった。(資料1) これらが今まで継続できたのは、西生田総務課(現施設課)の職員のご尽力があったに他ならない。また、総合研究所・研究課題(以下・森の会)が10年以上活動する中で、森の維持管理が継続的に行われていた成果も大きい。残念ながら、森の会は今年度をもって終了となる。この活動がなくなったまま、だれの管理も入らず、整備が行き届かなくなると、小学校の学習活動に支障が生じ大きな損失となる。

西生田校外学習新設案

2022年度に小学校で行っている行事、および今後新設の可能性のある行事を挙げてみた。年間通してみると定期的に通い活用していることが分かる。(資料2)

2023年度から、森の会で管理・研究していたコドラート内の整備作業を校外学習に取り入れたいと検討している。これは6年生の3月卒業週間に行いたいと考えていて、毎年通った西生田の森が里山であること、里山は人の管理が必要な森であることを体感する学習である。この森が10年を超える年月をかけて研究維持されてきて、今後は学園が中心となって保全活動が行われることを伝えたい。学園が大切にしている森の保全活動に、校外学習を通して小学生全員が参加することで、進学後も森の保全に気を配れる生徒になってほしいという願いがある。

施設課との打ち合わせ、管理依頼案

森の会の活動がなくなっても、小学校は西生田キャンパスの森を活用していきたい。そのため、西生田施設課との打ち合わせを定期的に行いたいと考えている。あくまで小学校理科部だけで考えた素案である。(資料3)

希望としては、小学校が短縮授業に入る時期に、小学校理科部が西生田に出張し、簡単な整備も兼ねて施設課職員と巡回し、短期的な整備・長期的な管理の計画を立てる機会にしたい。施設課のできる整備、外部委託できる整備の検討もできると考えている。また、年度末の3月には中学校・高等学校の理科部と共同で巡回することで、活動内容やカリキュラムの共有もほかりたい。

2023年度、4月14日(金)にオンラインミーティングの機会をいただいた。そこでは、外部委託で森のコンサルティングが進んでいる情報も伺えた。

整備必須区域

前述の4月14日(金)の施設課とのミーティングでは、地図上の赤い道の整備を施設課が実施し

てくださっている旨を伺えた。(資料4) コナラ林管理・更新区域、アカマツ林更新区域も小学校としては大切にしたい区域なので、このエリアの整備体制をどのように整えていくかが、今後の課題になる。

今後の活用

2023年度、森の会の活動終了後、初めての西生田キャンパスの森の観察会が開催された。この観察会は小学校3年生対象のもので、いままでは、森の会のメンバーが案内していた。今年度は、附属中学校の生物・天文クラブの生徒による案内で開催することができた。(資料5)

また、2023年6月9日(金)小学校研究部主催の教室訪問では、西生田の森の活用法について教員全体で話し合う機会を持てた。森の会の活動を小学校教員内で共有するとともに、小学校行事の中でより有意義な使い道ができる案を出し合った。実現可能と見込める、1年生の遠足、全校遠足での活用案から、将来の希望として、博物館の建設やキャンプ場としての活用案なども出された。小学校の力ではどうにもならない夢のような話ではあるが、労力と費用をかけることで、本学の豊かな教育活動を展開するための希望溢れる案を多く出すことができた。

いずれ、卒業生のつながりが広がって、森の管理が目指せる時代がくると良いと思っている。LINEグループやSlackなど、「新設・森の会」に入会した学園関係者・PTA・卒業生のコミュニティーが、クラウド上で森の利用を共有することは可能ではないだろうか。

公園の様に遊べるエリアがあったり、研究を展開できるコドラートがあったり、ピクニックがてら散策可能なエリアがあったら、活用の幅が広がるだろうと、総合研究所の作業をするたびに思っていた。

小学校に勤務していると、大人が驚くほどの探求を積み重ねる児童、その子どもの周りに集まるグループと出会う。崖下教材園に愛着を持つ児童は多く、崖下の動植物を地道に調査し、300種類の植物をリスト化した6年生もいる。このような児童・生徒が自主的な研究を深められるためにも、自然観察可能エリアがあっても面白いと考えた。(資料6)

<参考> 小学校校外学習

- (1年生) *秋探し
- (2年生) 商店街見学、パン工場見学、石拾い、郵便局見学、*ピーナッツ掘り
- (3年生) 学校のまわり散策、文京区めぐり(護国寺、小石川後楽園、文京区シビックセンター/東京ドーム)、印刷工場見学
*サツマイモ苗植え、*サツマイモ掘り、(西生田の森観望会 春編・秋編)
- (4年生) 浄水場見学、清掃工場見学、中央防波堤見学、川の上流中流散策、川の河口散策、*ジャガイモ掘り
- (5年生) 菅平スコレー、日本女子大学電子顕微鏡施設見学、自動車工場見学、*田植え、*稲刈り・サトイモ掘り
- (6年生) 最高裁判所・国会議事堂見学、軽井沢夏の学校、修学旅行

*西生田で実施の校外学習

資料 1

西生田の森 現行の小学校校外学習

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6
7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7
8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8
9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9
10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11
12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12
13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13
14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14
15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15
16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16
17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17
18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18
19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19
20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20
21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21
22	22	22	22	22	22	22	22	22	22	22	22
23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23
24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24
25	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25
26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26
27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27
28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28
29	29	29	29	29	29	29	29	29	29	29	29
30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30
31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31

現時点で 10回/年
使用する月は偏っているものの
西生田での課外活動は
小学校校外学習の約30%をしめる。
(希望者参加行事含む。学校行事を除く。)

春の
観望会

豊明会
希望者

秋の
観望会

豊明会
希望者

5年
イネ刈り
里芋収穫

5年
田植え

4年
ジャガイモ
収穫

3年
サツマイモ
収穫

3年
サツマイモ
苗植え

2年
ピーナッツ
収穫

1年
秋探し

落ち葉
掃き

豊明会
希望者

- 小学校行事
- 総合研の活動
小学校行事に
移行したいもの

資料 2

来年度より新設検討行事

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6
7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7
8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8
9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9
10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11
12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12
13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13
14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14
15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15
16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16
17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17
18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18
19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19
20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20
21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21
22	22	22	22	22	22	22	22	22	22	22	22
23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23
24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24
25	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25
26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26
27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27
28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28
29	29	29	29	29	29	29	29	29	29	29	29
30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30
31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31

校外学習としての保全活動
1年生より毎年通い、
6年生では保全の実験を体験する。
進学先で理科の学習に利用し
卒業後も森に関われる機会を作る。

春の
観望会

豊明会
希望者

秋の
観望会

豊明会
希望者

5年
イネ刈り
里芋収穫

5年
田植え

4年
ジャガイモ
収穫

3年
サツマイモ
収穫

3年
サツマイモ
苗植え

2年
ピーナッツ
収穫

1年
秋探し

落ち葉
掃き

豊明会
希望者

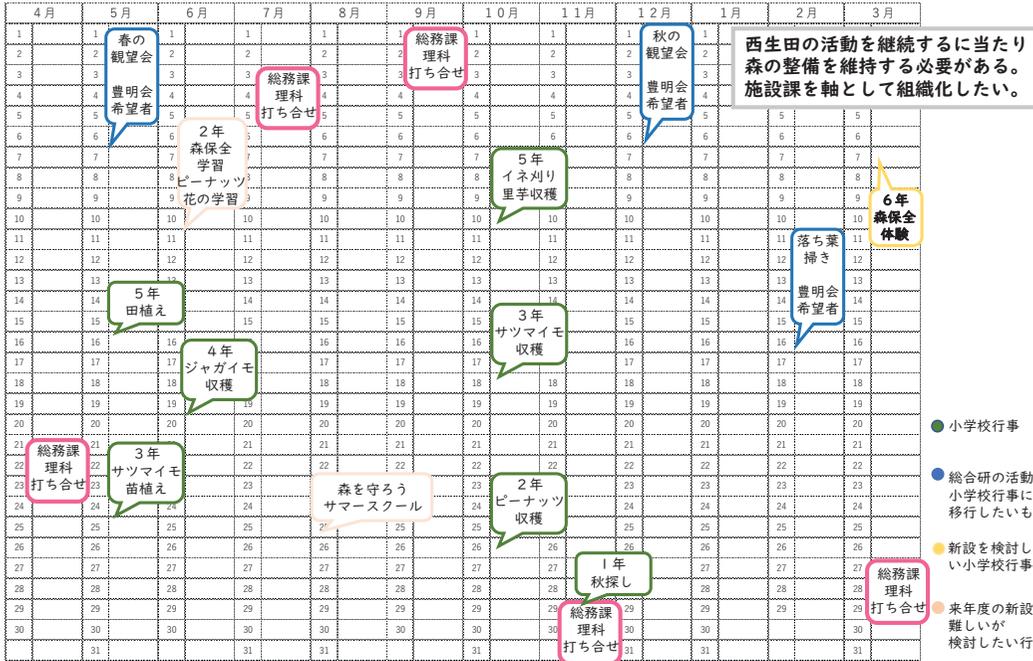
6年
森保全
体験

森を守ろう
サマースクール

- 小学校行事
- 総合研の活動
小学校行事に
移行したいもの
- 新設を検討した
い小学校行事
- 来年度の新設は
難しいが
検討したい行事

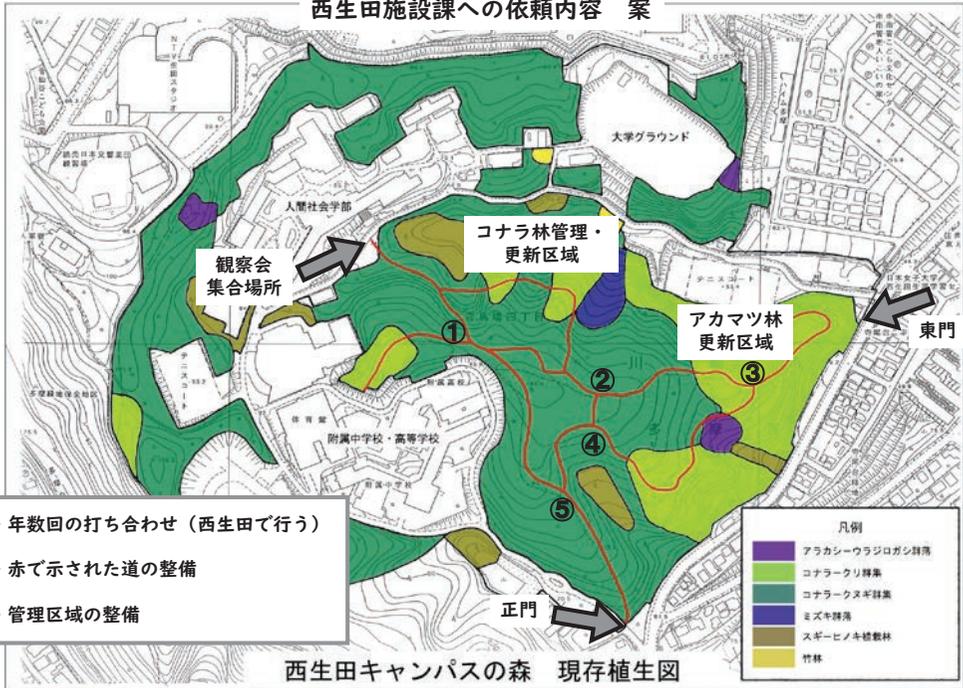
資料3

西生田施設課との打ち合わせ日程案



資料4

西生田施設課への依頼内容 案



資料5

附属中学校 生物・天文クラブの生徒の案内による
西生田キャンパスの森の観察会



資料6

西生田の森の活用 今後の展望 想像案



あとがき

砂川 俊輔

萌芽

私事ではあるが、今年で附属豊明小学校に赴任してから10年目になる。同時に、西生田の研究会に関わるようになるのも10年目である。当時、豊明小学校の教頭でいらした辻先生から森の研究会にお誘いを受けたことがきっかけだった。私は、理科専科ではあるが動物を専門としてきたこともあり、植物には疎く、保全活動と聞いてもピンと来なかった。正直なところ、作業は大変であった。夏は、ものすごい暑く、熱中症対策はもちろんのこと、蚊やオオスズメバチを気にしながらの作業。2月の落ち葉かきは、春の兆しを感じながらも積雪の残る厳しい寒さの中の作業と心が折れそうになったこともあった。

2019年度から代表になり、私の中の意識が変わった。今まではどこか他人事というか先輩方についていくことでなんとなく参加していたのが「自分事」となったのだ。代表という責任感もそうだが、研究のテーマをさらに自分ごとと捉えられるようにすれば良いと感じていた。研究会は大学・附属校園の理科系の教員からなる。そう、教員なのだ。教育の要素を取り入れた保全活動なら多くの先生方が主体的に取り組めると考えた。よってテーマを「新規教育プログラムの開発」とした。「新規」「開発」が入っているだけで、参加されている先生方も新しい何かを生み出せるのではモチベーションが上がると感じていた。その矢先の新型コロナウイルス感染症の世界的大流行。出鼻を挫かれた形となった。緊急事態宣言の発令、外出自粛、学校を取り巻く情勢等、様々な要因によって野外活動を主とする研究会の活動は大きく制限されることとなった。定期的にオンラインミーティングを開催したり、限られたメンバーによる最低限の保全活動の継続などできる限りの活動は行ってきた。活動の縮小は、研究会所属メンバーの参加率の低下及び固定化を生み、予算執行もままならない状況が続いた。

2022年度は、社会情勢的にも緩和の動きが進み、研究会としても小学校サポート部や附属中学校の生物部に協力してもらいながら保全活動を行ったり、附属豊明小学校の3年生とその保護者対象に「森の観察会」を開催するなど以前の姿を取り戻し始めた。しかし、研究会の現状はあまり変わらず、今後も改善が見込めないため、話し合いを重ね、研究会の終了を決定した。約20年にも及ぶ研究活動にピリオドを打つ決定に、本当に良かったのかと自問することも多かった。終了決定後に、数回、観察会や作業を行なったが、参加する子供達や保護者が本当に楽しそうで主催側の私たちも幸せな時間を共有できていた。充実感があった。その度、この活動の意義深さを感じていた。

しかし、感情論では解決するものではなく、やはり関わる人や取り巻く環境が整わないと継続は厳しい。今では、この決定に納得している。

この研究会に入って、得たものが2つある。1つ目は、保全の知識や技能。ある程度の山野草の名前は言えるようになり理科教員としてスキルアップできた。また草刈機が使えるようになったのは自慢である。2つ目は、人とのつながりである。研究会に入って普段関わりのない先生方と知り合うことができた。情報交換はもちろんのこと、西生田キャンパスへの往復では、仕事の悩みや私的な話など私にはかけがえのない時間となっていた。

個人的に、今でも親交があるのもこの研究会のお陰だと感じている。

さて、森の研究会がなくなってしまう、今後この森はどうなっていくのだろうか？森の管理の面で、研究会が担っていた部分は大きかったと思う。そんなことを考えていると、附属小学校理科研究部と附属中学校生物部がコラボして「春の観察会」を実施した。森の中を中学生が小学生を案内する。非常に盛況、好評であった。まさに一環教育。よく考えると「新規教育プログラム」が開発されたのではないか？まさに研究会が無くなるという「倒木」から新しい活動が「萌芽」したのだ。今まで培われてきた活動が肥やしとなり、新しい何かが生まれようとしている。今後、この芽を大木にできるか？または枯らしてしてしまうかは、学園に関わる全ての人にかかっていると思う。植物を上手に育てるためには、目をかけ手をかけることにある。つまり興味関心を寄せることなのだ。森がある学園から森にある学園へ。そのためには、安心して森に入れるような環境整備、入る機会を作ることが必要となってくる。環境整備の面は、是非、学園に先頭に立っていただきたい。保全や整備にはお金がかかるが、その価値は大いにある。入る機会は、教員にかかっているだろう。活用の工夫次第で、森にある学園になる。その可能性を大いに秘めている。私も豊明小学校の理科教員として微力ながらも機会を作り関わりたい。

謝辞

長きにわたり活動に参加して下さった先生方を始め学園関係者の皆様、さまざまなサポートをして下さった西生田の職員の方々、研究の機会をくださった総合研究所に心より御礼申し上げます。

女子教育の場としての
寮の在り方に関する研究
—日本女子大学寮地区内の建物・家具の
歴史的価値及び過去から現在の
自治組織の在り方の考察を通して—

Research on Roles of Dormitories in Women's Education
—Through Discussion of the Historical Value of Buildings and Furniture,
and the Change of Governance Structures from the Past to the Present
in Dormitory Area of Japan Women's University—

浅見 美穂 ASAMI Miho
(日本女子大学家政学部通信教育課程特任教授)

磯田 大輔 ISODA Daisuke
(日本女子大学管理部施設課課長)

江尻 憲泰 EJIRI Norihiro
(日本女子大学家政学部住居学科教授)

片山 伸也 KATAYAMA Shinya
(日本女子大学家政学部住居学科教授)

河村 尚美 KAWAMURA Naomi
(日本女子大学学生生活部学生支援課課長)

関村 啓太 SEKIMURA Keita
(日本女子大学学術研究員)

高橋 香織 TAKAHASHI Kaori
(日本女子大学通信教育・生涯学習事務局生涯学習課課長、元学生生活部学生支援課課長)

薬袋 奈美子 MINAI Namiko
(日本女子大学家政学部住居学科教授)

宮崎 あかね MIYAZAKI Akane
(日本女子大学理学部化学生命学科教授、元学生生活部長)

薮下 美雪 YABUSHITA Miyuki
(日本女子大学学術研究員)

口絵1 明桂寮 建築的特徴 1 外観



池袋高層ビル街と寮地区



南側鳥瞰写真



南東角からの全景



縦長のアーチ窓
下段は地階洗濯室
上段は食堂のベランダ部分



窓庇



屋上 洗濯物干し



塔屋



1階東側
ベイウィンドウ



1階ベランダ外観



壁面頂部仕上げ

口絵2 明桂寮 建築的特徴 2 食堂・玄関



食堂 南面バルコニー



バルコニー南東角



八角柱・梁・持ち送り



食堂北面出入口回転扉



照明器具台座



鏝絵のある持ち送り



正面玄関



正面玄関ホール



ホールから正玄関への扉



正面玄関 庇の持ち送り



正面玄関ホール内タイル



学生用靴箱

口絵 3 明柱寮 建築的特徴 3 居室・廊下・台所等



学生居室 入口より



学生居室入口を臨む



寮監室内洗面器



学生居室 押し入れ



学生居室 角部屋



調理員用トイレ手洗器



南廊下・階段室



地階階段と学生玄関の間に
設けられた明り取り窓



南廊下の棚



南向きの明るい厨房
天井にはトップライト跡も残る



厨房と食堂の間の開口部

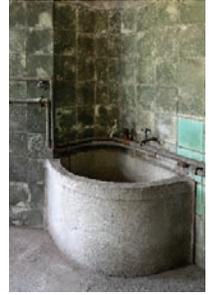
口絵 4 明桂寮 建築的特徴 4 浴室・トイレ・階段室



洗い場ペイウィンドウ



浴室全景



地階洗濯室への廊下
左側は浴室の窓



傾斜地に南面する洗濯室全景



水切り板のついた
洗濯用流し台



居室前廊下



洗面室



竹を使ったタオル掛け



YAYOI ロゴ入り木製シ
スタックの残るトイレ



階段室



階段室アルコーブ



塵取りしやすい階段



曲線の美しい手摺

撮影：恵雅堂出版 鈴木善実 協力：同社 麻田恭一

目 次

はじめに 一研究にあたって一	薬袋奈美子
第1章 常時微動計測による明桂寮の耐震性の考察	江尻 憲泰
第2章 自治の変遷と新たな自治寮の創出	薮下 美雪 薬袋奈美子 宮崎あかね 高橋 香織 河村 尚美
第3章 明桂寮の生活と自治	薮下 美雪 浅見 美穂
第4章 明桂寮のアーカイブおよび寮地区の家具	関村 啓太 薬袋奈美子 薮下 美雪 片山 伸也 磯田 大輔
第5章 これからの日本女子大学寮の検討	薬袋奈美子 宮崎あかね 関村 啓太
謝辞	

はじめに

1901年に日本女子大学校が開学した際には、牧歌的な風景が広がる中にあった日本女子大学の目白キャンパスも、今や都心の一等地である。開学時に設けられた寮は年々拡大し、特に金山地区では、田畑を耕し、牛を飼い、そして戸建て住宅で家庭風の生活を送る場であった（図0-1）。今その丘は、5棟のRC造寮舎が建つものの、利用されているのは2棟で、学生の大多数は自宅や学外の下宿先から通学している。学内での寮の存在感はとても小さくなった。

本研究ではこれらの寮に改めてスポットライトをあて、本学の教育にとっての位置づけをたどるとともに、寮舎・寮地区のこれからを考える。寮地区に残る建物とそこで営まれていた生活、そして使用されていた家具の当時の状況や現在の状況を確認、未来に向けて、本学の教育の場として、また日本での持続可能な社会を形成するための建物やそれをとりまく生活空間・什器の在り方を提案を試みるものである。

今、大学は122年の歴史の中でも大きな変革の時を迎えている。図書館、青蘭館、百二十年館、杏彩館、体育館を新しく建てた。西生田キャンパスにあった人間社会学部が創設から約30年を経て目白で学ぶこととなった。更に学部学科の再編も進められており、2022年に文化学科が国際文化学部国際文化学科となり、約60年の歴史のある住居学科が2024年に建築デザイン学部建築デザイン学科となる予定である。このような大きな変化は、大学が社会の変化を踏えて教育・研究にあたるためには欠かせないものである。しかし同時に歴史ある大学としてそれと見えるようにまた歴史の中



日本女子大学四十年史に筆者加筆



国土地理院 CKT20191・C38・45に筆者加筆

図0-1 日本女子大学目白キャンパスの1910年頃と2020年頃

で育んできた他にない特徴や、建学の精神を受けつぐものを確認し、適切な対応をしていくことは欠かせない。しかしそれを考えるための基礎的資料が十分にあるとは言えない。

研究は、建物、そこに残されている家具の実測、建物の写真撮影（口絵1～4）、そしてそこで営まれていた生活の記録をとることに重点を置いた。本稿ではその一部を紹介しつつ、今回の実測やヒアリング等から得られたデータをもとにした未来の女子大学寮のあり方について論考を試みた。

第1章 常時微動計測による明桂寮の耐震性の考察

江尻 憲泰

1-1. 明桂寮の構造史

明桂寮は1927年に佐藤功一によって設計された日本女子大学の洋風の女子寮である。本学で最初の鉄筋コンクリート造（RC造）で、地下1階、地上3階建てのL字型平面の建物となっている。老朽化により1993年に閉寮された後、倉庫として使われているが立ち入りが制限されている状況である。

建築構造の歴史としては、1908年ごろからRC造が建設され始め、当時はラーメン構造で主筋の断面算定程度の計算しか行われていなかった。その後1916年に佐野利器による設計用震度の概念が発表され耐震設計の第一歩が踏み出される。1918年には、内藤多伸「架構建築耐震構造論」が発表され、耐震構造理論の体系化が進められた。1923年の関東大震災により、ラーメン構造に代わりRC造耐震壁を配置するラーメン構造が一般化されることになった。明桂寮は、このような建築構造の背景に建てられており、建築構造学における重要性も非常に高いといえる。

これまでに寮としての歴史やその位置づけについての研究は行われているが、振動計測を行った事例はなく、構造的な観点での研究は行われていないのが現状である。今後の活用が望まれ、現在の劣化状況や歴史的価値について考えていくことが求められる。

1-2. 振動計測概要

常時微動を主として計測し、起振器による強制振動に対する計測を併用した。卓越振動数を導出し、建物の構造特性を把握すると共に建築基準法上の壁量との比較を試みる。また、リサージュ波形を用いて振動の動きを視覚化し、動的挙動についての考察も行っていく。

計測機器は加速度センサー（RS-AD24 ALNIC社製）を使用。無線（Bluetooth接続）と有線（USB接続）を組み合わせて各振動計測器とノートPCを接続し、水平2方向、鉛直1成分の計3成分についての計測を行った。常時微動の計測においては、交通振動の影響があるが、不忍通りからは100m程離れたところに位置しているので影響は小さいと判断し、日中での計測を行っている。

a. 調査日：2022年11月12日（土） 10：00～16：00

b. 計測器：加速度センサー（N1-N8）

c. 計測方法：case 1：各階での常時微動計測

case 2：屋上での起振器を使った計測

d. サンプリング周波数：case 1_100Hz case 2_200Hz

case 1は、揺れの状態を把握するために基本的な情報となる建物全体の固有振動数、振動モードを把握するために屋上4箇所（N1-N4）、地下1階から3階まで各階1箇所（N4-N8）の計8箇所に加速度センサーを設置し、1時間に渡り計測を行った。

case 2は、屋上の健全性を把握するために起振器を用いて屋上5か所（N1-N5）で計測を行い、起振器の揺れは30秒間でx方向に対して3.0～4.0Hzのスweep加振とした。起振器は質量25kg、大きさはW/379mm・D/220mm・H/128mmである。

計測器配置は、東西方向をx軸、南北方向をy軸とし、各計測の加速度センサーの配置を以下

に示す（図1-1、図1-2）。

1-3. データ解析概要

床面が板張りであることや床面が水平でないことから加速度センサーの固定方法が原因で加速度波形にずれが生じたため、波形を整えるためにハニング窓による FIR フィルターをかけた（図1-3 参照）。波形の修正後に、時刻歴の全計測時間における周波数（以下全時刻周波数応答）と時

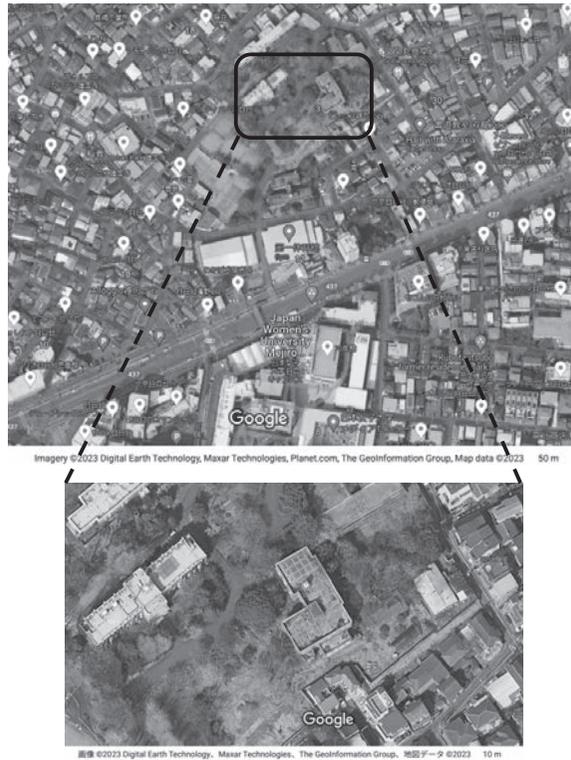


図1-1 敷地

N1～N8は加速度センサーの番号を示す。
以降、設置位置は番号で記載することとする。



図1-2 センサー配置 case 1



図1-3 センサー配置 case 2

刻毎の周波数（以下時刻毎周波数応答）を把握する目的で、図 1-4 の処理を行った。

各 Step で行った数値処理について以下に示す。

Step 1：波形の乱れの補正を行う。

補正のためのフィルターは、0.1-5.0Hz の帯域通過、減衰率200dB/dec、フィルター長 1024、窓関数は Rectangular とした。

Step 2：時刻毎の周波数の変動を把握するために補正時刻歴の分割を行う。

Step 3：FIR フィルターを補正時刻歴にかける。

Step 4：フーリエ変換を行い、振動数とフーリエ振幅の分布をグラフ化する。

Step 5：全時刻周波数応答と時刻毎周波数応答それぞれの卓越振動数を抽出する。

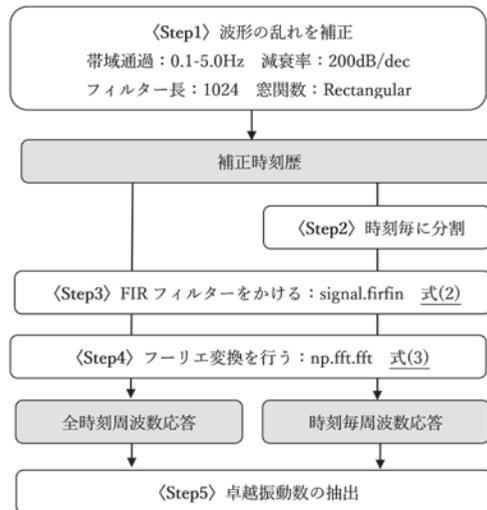


図 1-4 卓越周波数抽出過程

各ルーチンでの計算式を以下に示す。

・ハニング窓の FIR フィルター係数 $h(n)$

$$h(n) = 0.5 - 0.5 \cos\left(\frac{2\pi n}{N-1}\right) \quad \text{--- (1)}$$

N ：窓関数の長さ

・時刻歴に FIR フィルターをかけた後の出力 $y(n)$

式 (2) に式 (1) を代入

$$y(n) = \sum_{k=0}^{M-1} h(n)x(n-k) \quad \text{--- (2)}$$

M ：FIR フィルターの長さ

$h(n)$ ：式 (1) より

$x(n)$ ：入力信号

・ $y(n)$ をフーリエ変換し得られた周波数分布 $Y(\omega)$

式 (3) に式 (4) を代入

$$Y(\omega) = \sum_{n=-\infty}^{\infty} y(n)e^{-j\omega n} \quad - (3)$$

ここまでのプログラムのうち、全周波数応答のプログラムルーチンを掲載する (図 1-5)。

```
#csvからインポート
df1=df.iloc[:, line] #列指定1

num_data = len(df1)
n=num_data

#設定
dt = 0.01 #サンプリング
t = np.arange(0, n * dt, dt) # 時間軸
Hz = np.linspace(0, 1.0/dt, num_data) # 周波数軸
# 最初のエントリ0だけ非常に小さい値に変更
Hz[0]=1e-16
period = 1/Hz # 周期
#フィルター
filter3 = signal.firwin(numtaps=2048, cutoff=[0.1, 5],
                        fs=1/dt, pass_zero=False)

#フーリエ変換

y1 = signal.lfilter(filter3, 1, df1) #フィルターの適用

F1 = np.fft.fft(y1) #フーリエ変換

Amp1 = 2 * np.abs(F1) / len(df1)*1000 #フーリエ振幅に変換

range_start = int(n*0.001)
range_end = int(n*0.2)
select_Amp1 = Amp1[range_start:range_end]
Amp_max1 = np.amax(select_Amp1) #振幅の最大値

#グラフ作成
plt.plot(Hz, Amp1,linewidth=0.5)
plt.ylim(0, Amp_max1)
#タイトル
plt.title('N1-y', fontsize=5)
plt.xticks(fontsize=5)
plt.yticks(fontsize=5)
##グリッドの有無
plt.grid()
##x軸とy軸のラベル
plt.xlabel("Frequency (Hz)", fontsize=5)
plt.ylabel("Amplitude × 10-3", fontsize=5)
plt.tight_layout()
# x軸の範囲を変更する
plt.xlim(0.1, 5)
```

図 1-5 全時間周波数応答の解析プログラム

切り取る時刻により卓越振動数の変化が見られたため、Step 2 で10分毎に分割を行い、それぞれの卓越振動数を算出した。これにより、時間毎の卓越振動数の変化を把握する。

Step 2 で行った操作について具体的な内容を以下の図に示す (図 1-6)。

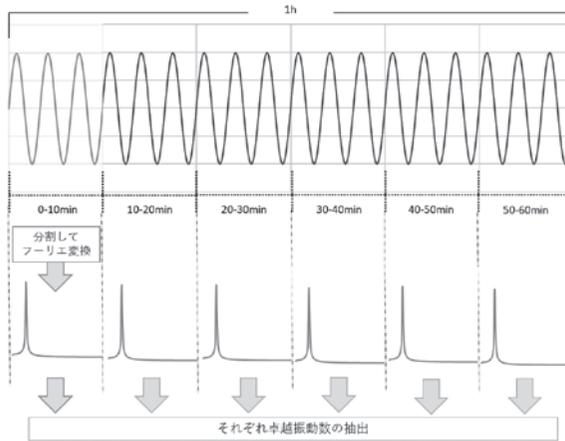


図 1-6 時刻分割概念図

1-4. 振動計測結果のまとめ

1-4-1. 時刻歴応答について

補正時刻歴応答の x 方向および y 方向の N1 から N8 の時刻歴を示す (図 1-7、図 1-8)。

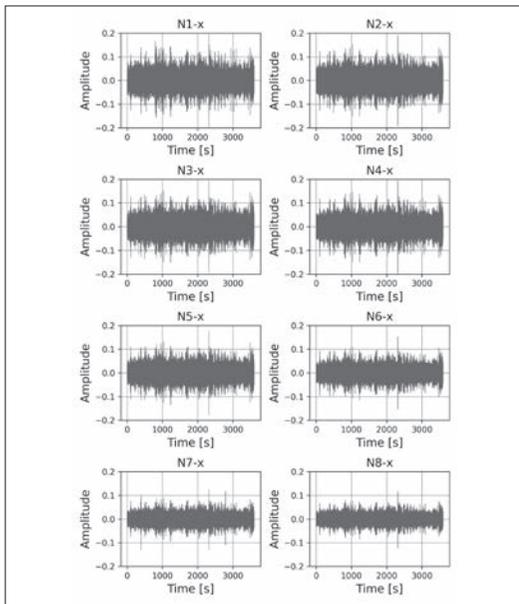


図 1-7 x 方向時刻歴

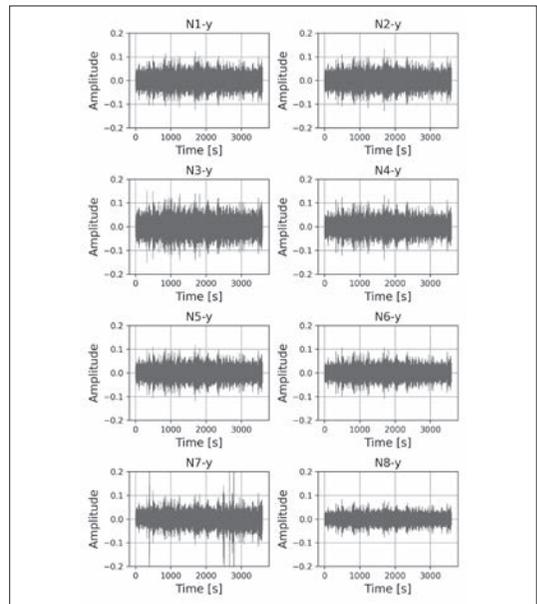


図 1-8 y 方向時刻歴

x 方向の N1 (屋上) から N8 (地下 1 階) までの比較で、階数が異なるにつれ振幅が変化している。N1 (屋上) と N8 (地下 1 階) を比べて振幅に約 2 倍 ($-0.012\text{gal}/-0.006\text{gal}=1.9$) の差がある。地下に入力された振動が N8 (屋上) まで到達する間に増幅されている。上階ほど振幅が大きくなり、下階は振幅が小さくなることによるものである。y 方向についても同様の傾向であるが、N1 と N8 を比べて約 1.5 倍 ($-0.011\text{gal}/-0.007\text{gal}=1.4$) の差となっている。

また、x方向とy方向の振幅を比較すると、x方向に比べy方向のほうが振幅は小さいことが分かる。振幅が小さい理由は、剛性の違いによりy方向が揺れにくい可能性が考えられ、これについては5節で検討を行う。

1-4-2. 周波数応答について

全時刻にわたる周波数応答のx方向およびy方向のN1からN8のグラフを示す(図1-9、図1-10)。

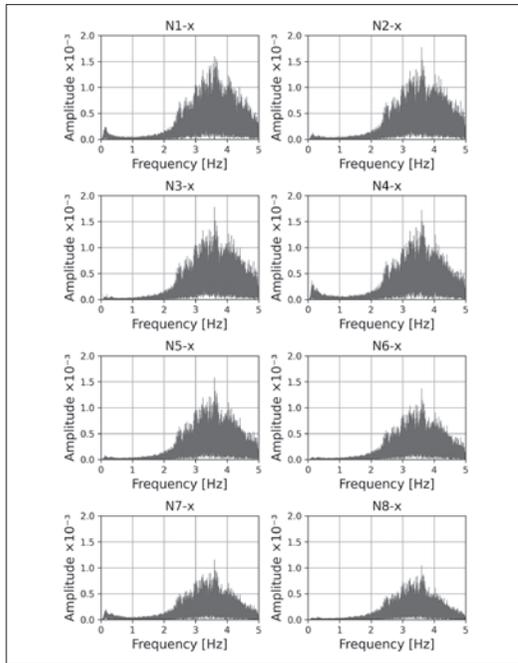


図1-9 x方向振動数(全時間)

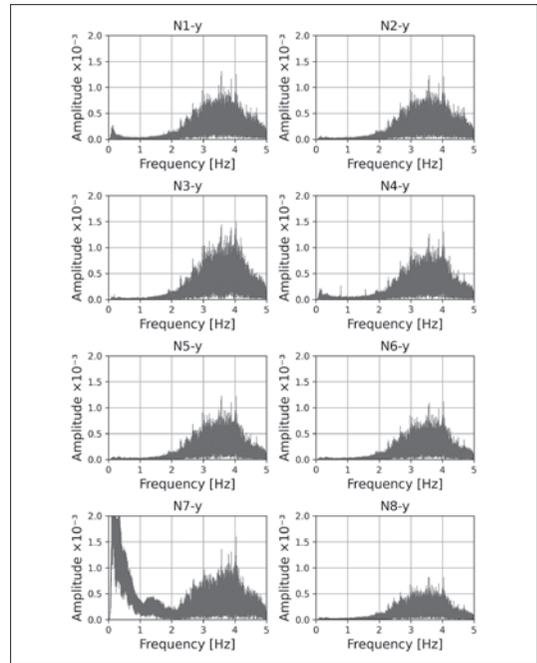


図1-10 y方向振動数(全時間)

x方向、y方向のN1からN8までを比較すると、補正時刻歴と同様に周波数応答においても階数が異なるとフーリエ振幅が変化している。また、x方向ではN1からN8まで、3.0~4.5Hzの間に卓越振動数がみられる。y方向も3.0~4.5Hzの間に卓越振動数がみられるが、x方向より高い4.04Hzにも卓越がみられる。x方向では卓越部分が一か所であるのに対して、y方向では三か所で卓越している。

N7(1階)のy方向の波形については、固定方法が計測データに影響があり周波数分布が不安定なため以下では取り扱わないことにする。

1-4-3. 卓越振動数について

建物の卓越振動数を推定するために、全時刻周波数応答でのフーリエ振幅の大きい卓越振動数上位3つを表にまとめた。表1-1、表1-2のfreq1はもっとも振幅が大きい振動数を示しており、次いでfreq2、3となっている。また、卓越振動数が3.0~4.5Hz間にあったため、その間の周波数分布グラフを以下に示す(図1-11、図1-12)。

表 1-1 x 方向卓越振動数 (全時間)

[Hz]

	freq 1	freq 2	freq 3
N 1	3.60	3.65	3.68
N 2	3.60	3.62	3.68
N 3	3.60	3.62	3.68
N 4	3.60	3.62	3.68
N 5	3.60	3.62	3.68
N 6	3.60	3.62	3.68
N 7	3.60	3.62	3.65
N 8	3.60	3.65	3.48

表 1-2 y 方向卓越振動数 (全時間)

[Hz]

	1st frequency	2nd frequency	3rd frequency
N 1	3.58	3.56	4.04
N 2	3.58	4.04	3.56
N 3	4.04	3.58	3.89
N 4	3.58	4.04	3.56
N 5	3.58	4.04	3.56
N 6	3.58	4.04	3.56
N 7	4.04	3.58	3.89
N 8	3.56	3.58	4.04

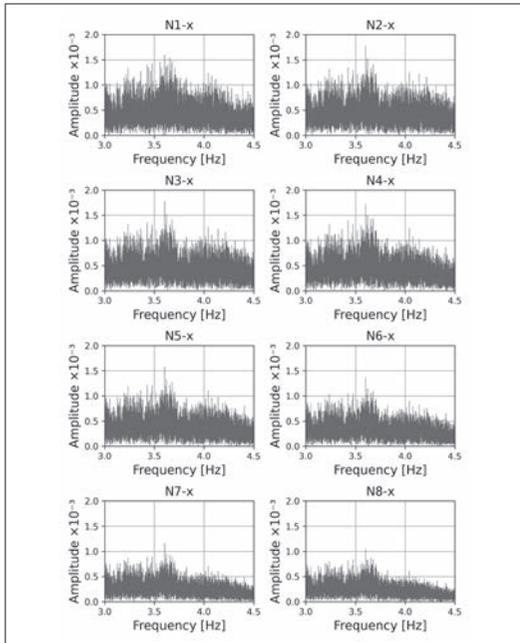


図 1-11 3.0~4.5Hz x 方向周波数応答 (全時間)

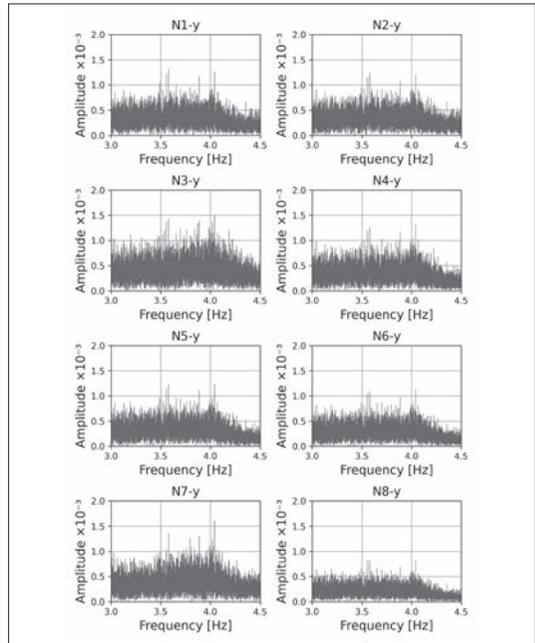


図 1-12 3.0~4.5Hz y 方向周波数応答 (全時間)

表1-1、表1-2より卓越振動数を比較するとx方向の1次ではN1からN8までの位置による振動数の変化はない。グラフより、突出する卓越部分が一か所のみであり、その部分が3.60Hzであるため、x方向は3.60Hzが一次固有周期であると推定される。一方で、y方向は3.58Hzと4.04Hzで卓越振動数がみられ、グラフにおいても卓越部分が三か所であることが改めて確認できる。3.58Hzと4.04Hzにおいて、特にフーリエ振幅が近いいため、固有振動数の判別が難しいので、リサージュ図形を用いて3.58Hz、4.04Hzでの揺れ方をリサージュ図形で視覚的に考察する。

時間での卓越振動数の変化を把握するために、時刻毎周波数応答より卓越振動数を算出し、グラフと表にまとめた(図1-13、図1-14、表1-3、表1-4)。

表1-3 x方向卓越振動数(時間分割)

[Hz]

	0 min	10min	20min	30min	40min	50min	平均
N 1	3.63	3.41	3.64	3.71	3.70	3.76	3.64
N 2	3.63	3.33	3.64	3.71	3.68	3.76	3.62
N 3	3.63	3.33	3.64	3.71	3.68	3.76	3.62
N 4	3.63	3.33	3.64	3.71	3.70	3.76	3.63
N 5	3.63	3.33	3.64	3.71	3.68	3.76	3.62
N 6	3.63	3.33	3.64	3.71	3.68	3.76	3.62
N 7	3.63	3.33	3.64	3.71	3.60	3.76	3.61
N 8	3.63	3.33	3.64	3.71	3.70	3.76	3.63

表1-4 y方向卓越振動数(時間分割)

[Hz]

	0 min	10min	20min	30min	40min	50min	平均
N 1	4.03	3.61	3.72	3.94	3.89	3.76	3.82
N 2	4.03	3.61	3.72	3.94	3.89	3.72	3.82
N 3	4.03	3.61	3.72	4.02	3.89	3.99	3.88
N 4	4.03	3.61	3.72	3.94	3.89	3.99	3.86
N 5	4.03	3.61	3.72	3.94	3.89	3.99	3.86
N 6	4.03	3.61	3.72	3.94	3.89	3.99	3.86
N 7	4.03	3.61	3.72	3.94	3.89	3.99	3.86
N 8	4.03	3.61	3.72	3.94	3.89	3.76	3.82

表1-3、表1-4とグラフ(図13)よりx方向ではN1~N8で位置による卓越振動数の違いは少ないが、時間による変動は最大で0.43Hzある。また、y方向においてもx方向と同様に位置による違いは少なく、時間による変動は最大で0.42Hzある。x方向、y方向ともに変動は0.40Hz程度であるが、x方向に比べy方向のほうが卓越振動数の平均が高くなっている。

一般的には、建物の固有振動数は急激な変化はしていないため特定はできないが、ほとんど無いと考えた交通振動などの環境振動に影響されていると推定される。

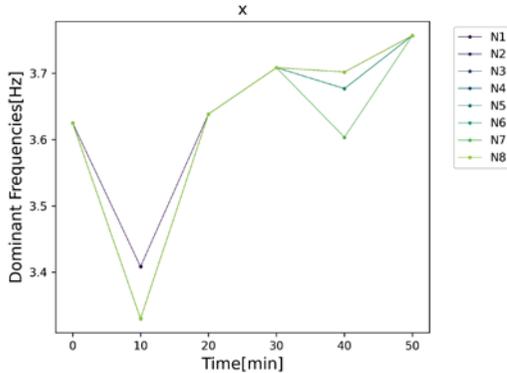


図 1-13 x 方向卓越振動数（時間分割）推移

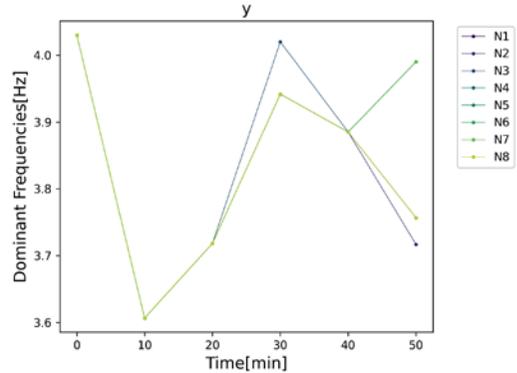


図 1-14 y 方向卓越振動数（時間分割）推移

1-4-4. リサージュ波形

y 方向での 1 次の卓越振動数を算定するために、固有振動数とみられる振動数の付近で帯域通過の FIR フィルターをかけ、リサージュ図形を作成した（図 1-15、図 1-16）。

帯域通過をそれぞれ 3.55～3.65Hz（x の卓越振動数付近）と 3.95～4.05Hz（y の卓越振動数付近）とした。図 1-15、図 1-16 よりそれぞれの方向に対して直線状に振動していることより固有振動数は x 方向で 3.60Hz、y 方向で 4.04Hz であると推測される。x 方向の卓越振動数は y 方向にも卓越振動数として表れているため、3.6Hz 付近のリサージュ波形では円を描くような図形となっている（図 1-17）。

1-4-5. 起振器による周波数応答の変化

case 2 の起振器を用いた計測での x 方向および y 方向の N1 から N4 の周波数応答（2.5～4.5Hz 間）を以下に示す。また、起振器の上での周波数応答（N5）も以下に示す（図 1-18、図 1-19）。

全時刻周波数応答のグラフ（図 1-11、図 1-12）と卓越振動数を比較すると、起振器での振動の影響は少なく、建物の卓越振動数が乱されて卓越振動も消えている。30秒間の短い時間でのスイープ加振としたため、通常大きな応答を示すが、現象が生じなかった可能性がある。また、全時刻周波数応答のフーリエ振幅に比べ、x 方向と y 方向の両方で振幅が大きくなっており、起振器の揺れが屋上面に伝わっていることが示されている。

1-5. 壁量と振動計測結果からの耐震性の考察

1-5-1. 概要

明桂寮は 1927 年竣工であり、壁量の概念が形成され始めた時期である。壁量とは耐震壁の量を表すもので、1950 年に制定された建築基準法の中に木造建築の仕様として規定されたのが壁量計算の始まりである。

このときには、木造建築物での床面積当たりの必要壁量や軸組の種類、倍率が定義された。しかし、現在の基準と比べて必要壁量は半分程度とされていた。その後、1959 年に一回目の法改正が行われ、1950 年の基準から 1.5 倍程度まで必要壁量の基準が増えた。また、壁倍率についての基準も見直しがされた。1981 年の新耐震基準により、必要壁量は現在と同じ値となっている。1995 年に耐

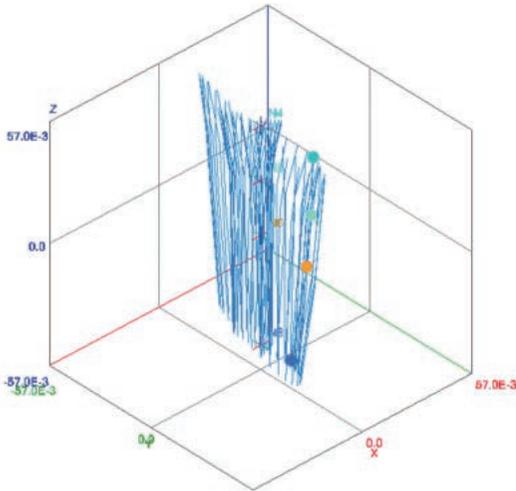


図 1-15 リサーチ図形 (x : 3.55~3.65Hz)

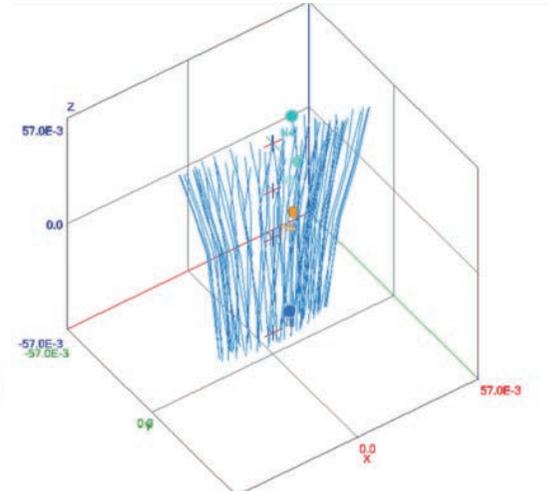


図 1-16 リサーチ図形 (y : 3.95~4.05Hz)

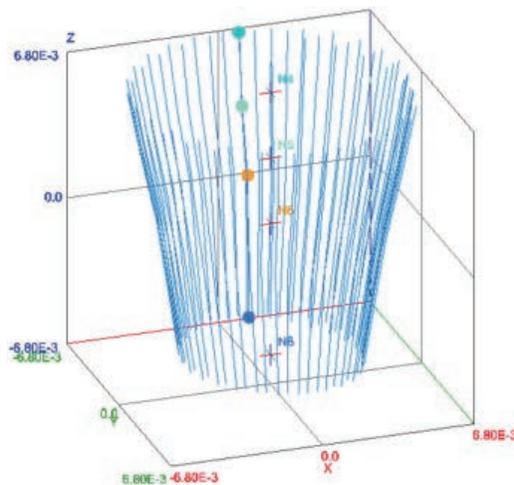


図 1-17 リサーチ図形 (xy : 3.6Hz 付近)

力壁の配置の規定などが追加され、加えて、2025年に向けて ZEH 水準等の木造建築物に対する壁量の見直しがされることが決まっている。壁量計算は、とくに構造計算を必要としない建築物に対しての耐震性を評価する重要な指標である。

1-5-2. 明桂寮の壁量

x 方向及び y 方向それぞれ、剛性についての検討を行うために壁量を算出し、表 1-5、表 1-6 にまとめた。現存する平面図から数値を読み取り各階について計算を行った。なお、2 階と 3 階は同じ壁量であった。

壁量の計算については、「壁式鉄筋コンクリート造設計・計算規準・同解説」¹⁾をもとに算出した。

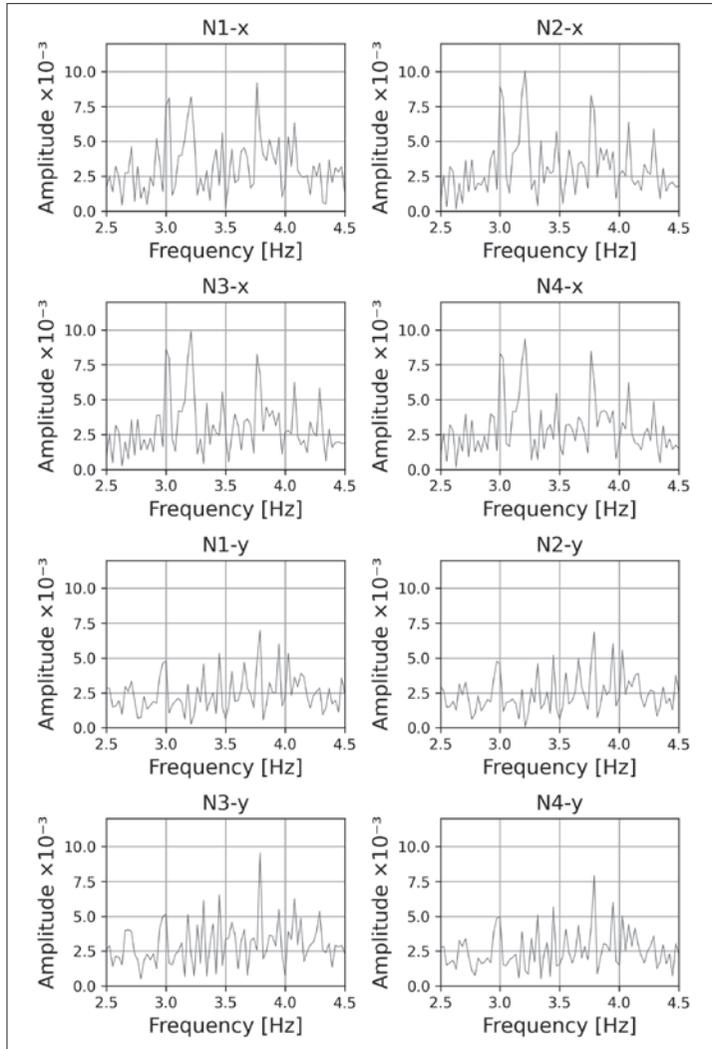


图 1-18 周波数応答 (N1 ~ N4)

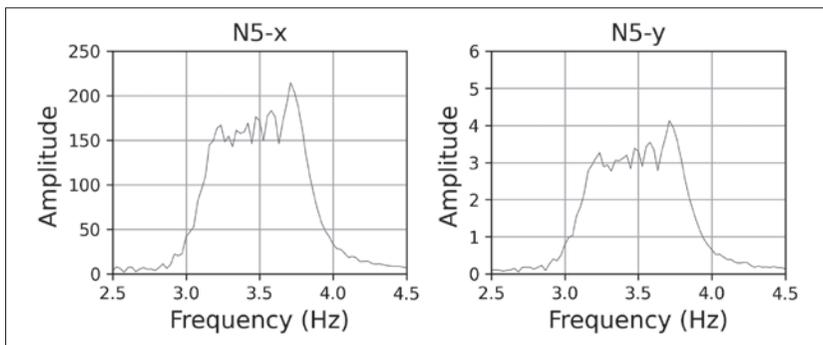


图 1-19 周波数応答 (N5)

表 1-5 x 方向壁量

	実長 (mm)	存在壁量 (mm/m ²)	標準壁量 (mm/m ²)	標準壁量 建築基準法 (mm/m ²)
地階	27,272	263	150	200
1 F	53,878	126	120	150
2 F	68,811	186	120	120
3 F	68,811	186	120	120

表 1-6 y 方向壁量

	実長 (mm)	存在壁量 (mm/m ²)	標準壁量 (mm/m ²)	標準壁量 建築基準法 (mm/m ²)
地階	29,696	286	200	200
1 F	83,482	195	150	150
2 F	73,787	200	120	120
3 F	73,787	200	120	120

標準壁量は同書により引用し、建築基準法（告示1216号）も併せて記載した。

表 1-5 より階ごとの x 方向と y 方向を比較すると、すべての階で x 方向に比べ y 方向の壁の実長が長く、y 方向の壁量が多いことが読み取れる。1 階での方向による壁量の差に比べ、2 階と 3 階は方向による差が小さくなっている。方向別の壁量と卓越振動数について次項で考察を行う。

また、壁量については、標準壁量（「壁式鉄筋コンクリート造設計・計算規準・同解説」より）と比較して存在壁量が多くなっており、現代の壁式基準と比べても十分な壁量があるといえる。

1-5-3. 現行法規の壁式構造の固有振動数の推定

建築基準法（告示1783号）での固有周期を求める式より、 $T=0.02h$ ($h=9.84m$) を用いて固有振動数を計算したところ 5.08Hz であった。また、明桂寮についての「日本女子大学寄宿舍増築工事 構造計算書」²⁾ より質量と剛性を求め、固有振動数を算出した結果、5.50Hz であった。これらの結果は、本研究での振動計測の結果による卓越振動数 (x : 3.60Hz, y : 4.04Hz) に比べて高く、コンクリートのひび割れなどにより竣工時と比較して剛性が低下し、固有振動数が低くなっている可能性が伺える。

1-5-4. コンクリート強度試験

報告書³⁾ よりコンクリートの圧縮強度は $15.4N/mm^2 \sim 41.2N/mm^2$ である (表 1-7)。一部 $15.4N/mm^2$ と低い値が出ているが、新耐震基準 (1981年) 以降の建物と比較してもそんな色ない強度が得られている。

表 1-7 コンクリート圧縮強度試験

コア記号	直径 d (mm)	キヤピリング 後高さ h (mm)	高さ と 直径の 比 h/d	補正後 圧縮強度 f_{ck} (N/mm ²)	見掛け の密度 ρ (g/cm ³)	備考
B 1 外	74.1	147.2	1.99	30.8	2.31	
1 S 1	74.1	146.9	1.98	25.0	2.30	
1 W 1	74.1	118.4	1.60	26.7	2.33	豆板あり
1 W 2	74.1	106.8	1.44	20.1	2.21	豆板あり
1 天井	74.2	101.0	1.36	41.2	2.38	
2 N	74.2	103.2	1.39	28.9	2.22	
2 S	74.3	146.7	1.97	28.6	2.35	
2 E	74.2	140.9	1.90	15.4	2.23	豆板あり
2 天井	74.2	79.6	1.07	32.4	2.26	
3 N	74.1	145.9	1.97	19.8	2.25	
3 S	74.3	146.3	1.97	23.0	2.27	
3 E	73.8	138.7	1.88	18.1	2.27	

1-5-5. 考察

1-4 節の時刻歴応答と周波数応答から、常時微動のレベルでは x 方向に比べて y 方向の振幅が小さいことが観察される。このことから、剛性の違いにより y 方向が揺れにくくなっている可能性がある。また、表 1-5、1-6 によるとすべての階で壁量は y 方向がより大きいため、y 方向の振動に対しては壁量により剛性が効果的に働いていると推測される。したがって、壁量と振幅の間に関係があると考えられる。

さらに、1-4 節から明桂寮の固有振動数は x 方向で約 3.60Hz、y 方向で約 4.04Hz と推測された。表 1-5 によると、y 方向の壁量に比べ x 方向の壁量が少なく、これらの結果から壁量と固有振動数には関連性が高い。x 方向に関しては、振動計測による卓越振動数が現行法規による固有振動数と比べて低くなっている。これは、1 階の壁量が規定に比べ少なかったことに起因していることが予想される。

また、剛性は卓越振動数の 2 乗に比例するため、方向による卓越振動数 (3.60Hz と 4.04Hz) の差が約 2 割であり、壁量が 1 階で約 3.5 割、2・3 階で約 1 割の差となっている。この結果より、建物全体で見たときの方向別の卓越振動数と壁量に相関関係があることが示唆される。

以上の結果から、壁量と振動の間に関係があると推測される。

1-6 まとめ

本研究では、明桂寮について構造的な視点から現状を調査することを目的とし、常時微動計測を行った。振計測解析により、x 方向に比べて y 方向の振幅が低くなる傾向が確認された。また、全時刻における周波数応答による卓越振動数では x 方向と y 方向でほとんど差がないことが分かったが、時刻ごとの周波数応答では y 方向が高い卓越振動数を示し、複数の卓越部位が特定された。木の床板上で計測していた影響の可能性があり、RC 造床に直に置いて計測することが望まれる。

さらに、これらの結果と壁量との関係から、1 階の壁量と振幅、2 階と 3 階の壁量と固有振動数には関連性が示唆された。今後の研究では、より詳細な計測や解析を行う予定である。明桂寮の壁量についての考察を以下に示す。

- 1) x 方向の1階を除いて現行の壁量を有している。
- 2) 剛性については、現行よりも振動数が小さく、壁量が x 方向で少ないことが影響している。

現段階での考察であるが、当初設計は現行の基準法の性能に近く、劣化又は当時の施工の影響により性能が落ちているが、修復すれば性能は回復できるオーダーであると考えられる。

今後の研究では、固有振動数の変化やその原因について研究を行う予定である。そのためには、常時微動計測において夜間も含めた長期間の計測を行う必要がある。また、起振器を用いた計測では、長時間の計測と本研究で特定した固有振動数と同じ振動数での励振を行うことが求められる。

第1章の最後に、明桂寮の構造調査・解析にあたり尽力していただいた本学修士2年次生の金子陽氏に感謝申し上げる次第です。

参考文献

- 1) 日本建築学会、壁式鉄筋コンクリート造設計・計算規準・同解説 (2015)
- 2) 佐藤功一事務所、日本女子大学寄宿舍増築工事 構造計算書 (1926)
- 3) 株式会社八洋コンサルタント、日本女子大学明桂寮の躯体調査 報告書 (2020)

第2章 自治の変遷と新たな自治寮の創出

藪下 美雪・薬袋奈美子・宮崎あかね・高橋 香織・河村 尚美

2-1. 「寮」という言葉の意味：教育寮としての寮に込められた思想

日本女子大学の寮が開学とともに始まったことが知られているが、その寮の在り方は寮により、時代により異なってきたことは既に「女子高等教育における学寮／日本女子大学学寮100年研究会」（ドメス出版）等にて示されてきた。本稿は、寮舎という空間の視点を手掛かりにしながら、本学での寮教育の意味をコロナ禍を経て、現代的に読み解こうとするものである。

日本女子大学内で使用される「寮」という言葉には二つの意味がある。一つ目は、建物としての寮舎である。創立当初は、木造長屋建て風の寮舎が学生用に2棟用意され、また教員用に戸建て風の寮舎が3棟用意された。その後戸建て風の寮舎が学生用にも建てられ、関東大震災後からは鉄筋コンクリート造の大型の寮舎が建てられた。その計画については次節で整理する。本稿では建物の寮を「寮舎」と表現する。

もう一つの「寮」の意味として、生活コミュニティの単位としての「寮」がある。戸建て風の寮舎であった場合には一寮舎一寮組織として寮舎との関係性が明快であるが、大型の寮舎の場合是一个の寮舎の建物内に複数の寮組織が存在していた。本稿では、このような意味を持つ寮という言葉で「寮組織」として表現する。

2-2. 寮舎のタイポロジー

開学時から現在までの主な寮舎の形を図2-1に示す。1901年開学時には3棟8寮（組織）で始まったとの記述があり、キャンパスの配置図を見ると、現在の泉山地区の不忍通り沿いに長屋風の木造寮舎が2棟、学生用として建てられていたことが確かめられる。これらの建物は敷島寮と呼ばれ、各棟の中に複数の寮組織を受け入れることのできる平面計画により構成されている。図2-2にその使い方の詳細を示す。不忍通り沿いに並ぶ寮舎のうち西側の寮舎には3か所の玄関、3か所の階段等、同じ間取りの行き来が出来ないように仕切られた空間ユニットを3つ確認できる。図中の点線内がそのうちの一つである。東側の建物は4ユニットが設けられており合計7ユニットに仕切られた空間構成であったことが確かめられた。

2階の図面は確認できていないが、1階、2階とも3部屋の居室があると考えられる。大規模な木造建築物としての寮を建て、限られた敷地内に多くの学生を居住させるための建築物ではあるが、生活空間としては小規模な単位に区切り、居室も一般的な家庭にあるサイズである。当時他大学の寮では軍の兵舎のような大部屋があったとの記録があることと比べると、大きな差がある。

以上で2棟7寮組織が示されたが、残りの1棟1寮は、教師館として建てられたもののうち1棟を学生寮として供したとの記録がある。図2-3に2棟分の図を示すが、戸建て住宅風の建物で教師館と示されている。(ヲ)は不忍通りの拡幅工事での道路用地として東京都に譲渡した際に、成瀬記念館横に解体・移築された成瀬仁蔵が暮らした建物である。また学生寮の東側にあった教師館は、麻生学監が居住していたとの記録がある。(ル)の建物が学生寮として利用されていたと考えられる。戸建て住宅内に学生が一つの寮組織としてのコミュニティを築いていた。同様の建物は1903年の地図には既に敷地東側に見られる。

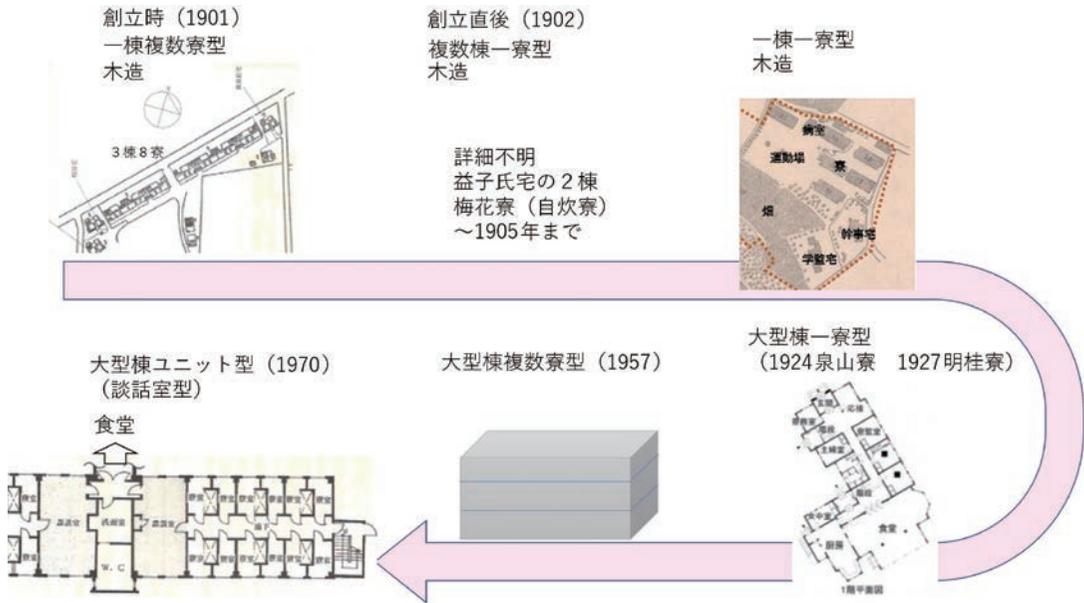


図2-1 寮舎の変化

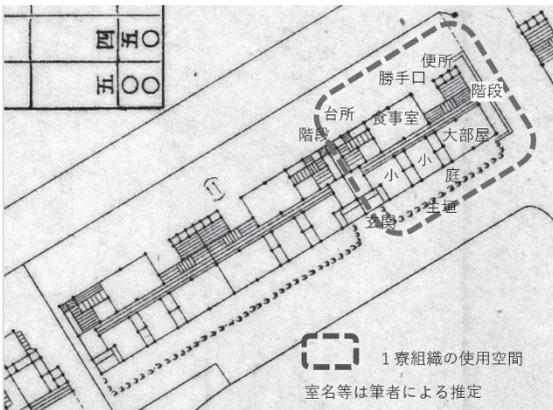


図2-2 創立時の西側寮舎の使い方

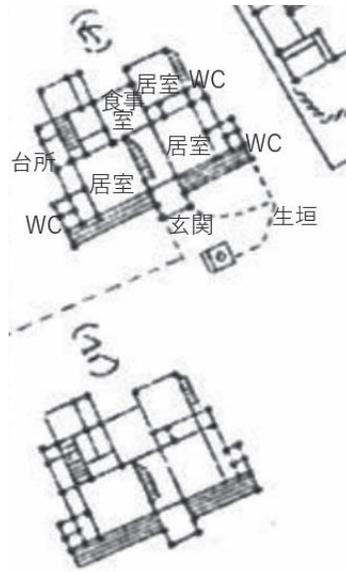


図2-3 教師館2棟の図 (明治36年7月学報1に筆者加筆)

図2-2・図2-3は建物と部屋の間仕切りの他に、生垣の位置が示されている点が興味深い。図2-2では、3つに分かれるユニットのうち、2ユニット分の玄関が並ぶ場所を境に、東側の1ユニット分が生垣で囲われ、玄関よりも西側の2ユニット分が一つの生垣で囲われていることがわかる。家庭的な単位で、居住者同士で利用できる小さな庭が用意されていると言える。成瀬仁蔵の住んでいた建物でも部屋の前に生垣がある。建物そのものも生垣で囲われるように学生寮とは異なる



図2-4 富士寮・静明寮
(学報 No 1 に筆者加筆)

る。また庭自体も東側と西側の座敷に面した庭は、各々が生垣で囲まれ、座敷と庭をセットでプライベート空間が形成されている。一方で学生寮として使用されたと思われる建物には生垣が描かれていない。この資料は、明治36（1903）年の学報に記載されたもので、その図内の別表には教師館が3棟とは書かれているものの、図面としては、利用の実態を表していると考ええると、教師館と学生寮としての異なる使い方が現れているものと判断できよう。このような使い方がされた背景には、学生の居場所の不足という問題があったことが主な要因であろうが、同時にそもそも成瀬は計画団体から学生が家庭的な生活を送る場として寮舎としての利用の可能性を意識していたのではないかと推測される。届け出上は教師館としても、柔軟な運用ができるようにするための設計であったことが、3箇所の便所というつくりで導かれたとも考える。そしてそれは成瀬が教員・学生の分け隔てなく人としての暮らしを一にしたいとの思いがあったとも推測できる。

一件しか確認されていないタイプが、複数棟一寮型である。図面や写真が残っていないが、開学間もない1902年～1905年に希望者を敷地内の寮で収容しきれない状況であったために、大学近くの益子氏宅の2棟を梅花寮として使用していたという記録がある。2棟の寮舎を、

一寮組織として運営したものである。なおこの梅花寮は、自炊寮とされ、寮監の記録も見当たらないため、完全に自立した寮として運営されていたと考えられる。期間限定であり、この頃は教育の場として寮監が他の寮では必ずいたと考えると、不足する入居場所不足を補うという臨時のものであったと位置付けられる。

1903年のキャンパスの図には目白通りを挟んだ現在の図書館地区に平屋建ての2棟の平屋建て寮舎も建設された。南北方向に中廊下を設け、東向き4室、西向き7室、食事室が東向き1室と読み取れる11室の居室により構成される大型の寮であるが、一寮舎を一寮組織として運営されていた。富士寮、静明寮という名称が与えられ、独立した寮運営を意識する始まりの形と言えよう。更にその後、1906年より不忍通りを挟んだ向かい側の丘の一角（金山地区）や、泉山地区東側に寺田勇吉氏の敷地を寮（豊明寮）や体育館を設けるために使い始める。高等女学校を終えた女性がさらに教育を受けるための場として、全国から女性が集まり、かつ当時は現在のように気軽に女性が一人暮らしができるような場がない時代であり、学生生活を送るためには入寮する以外に方法がない人も多かったこともあろう。ここでは戸建て住宅風の寮舎を建て、一寮舎を一寮組織とする一棟一寮型である。このような形態の寮舎は、その後暫く継続されていた。

1924年に金山地区に大型の木造寮舎が建設された。1923年の関東大震災後に居住の場所に困る、また被災者による住宅需要や自宅を失う等で住まう場所を確保できない学生がいたことに対応したのではないだろうか。東日本大震災直後の仙台でも、被災者と復旧・復興に関わる業者の需要が増加し、学生が居住する賃貸住宅が著しく不足したことがあった。同潤会アパートメントのうち一つが大塚女子アパートメント（1930年）として、夫が他界した女性や「独人の職業婦人」と呼ばれた女性が住んでいたことが知られるが、本学でもそれに先んじて大型の居所で大勢を入居させるという取り組みを行った。なお、この頃東京の住宅需要圧力は高まり、大正期に入り大学周辺の雑司が谷での賃貸住宅増加が確認されている。泉山寮は洋風生活を送ることのできる建物で、全30室あり

100名以上が生活することができた。家庭的な組織の人数を超えた、大規模な組織運営が求められる人数となっている。台所・食堂等は1階にまとまって設けられ、本格的な大量調理に耐えうる台所が設置された。その後1927年には鉄筋コンクリート造の大型寮舎である明桂寮が建設され、居間（一般の寮室）26室、寮室27室、寮監室3室、図書室、応接室2室、寮務室、主婦室、食堂、貯蔵室、厨房、浴室、脱衣室、洗濯場、そして各階に便所、洗面室、女中室のある100名以上の学生を収容できる洋風寮が設けられた。この寮舎は女中室のみが和室で、他の部屋は洋室である。教育対象ではない女中のみ和室であり、他の部屋が洋室という構成は、洋室での生活を一つの教育の機会として考えていたことの現れとも読み取れる。

しかしこの流れが変化する時期が到来する。第二次世界大戦を経て、1957年に建設された寮舎は、3階建て1棟の建物に対して、3つの寮組織が入った。従来木造戸建て住宅風の3棟の寮だった紫峰、精華、そして新泉である。各階の入り口に施錠のできる玄関があり、食堂やキッチン、そして寛ぐための空間（談話室）が各フロアに独立している。間取りはどの階も同じであるが、寮の運営等は組織ごとに異なる運用が可能となる建物のつくりである。戸建て住宅風の寮舎を面積効率の良いRC造の大型寮舎に建て替えていく状況は、大学の規模が大きくなり、かつ周辺も市街化が進む中で一つの選択であった。しかしその際に、明桂寮や泉山寮のような寮舎1棟で一寮舎としての運営に適した建物ではなく、一層毎に異なる寮組織を受け入れられる建物にした点は、本学の寮の歴史として特筆すべきであろう。100名以上を一組織として運営することに対する限界を感じていたのかもしれない。

その後1961年には、潜心寮が鉄筋コンクリート造で建設された、ここでもフロア毎に寮組織を設け、潜心IからIII寮と呼ばれることとなった。なお、この際には潜心I寮は責善寮より、潜心II寮は富士・芙蓉の二寮より、そして潜心III寮は玉成寮を母体として、有志新一年生を募って構成された。この移動にあたっては、建て替え期間中に従前の木造寮が閉鎖され、一時的に寮監も含めて寮が閉鎖されていたため、従来の家族的な寮組織運営が引き継がれたかは不明である。

1970年に建設された梅花寮は、全室個室で一寮舎一寮組織で提供された。12人ごとに談話室が設けられ、そのユニットがフロア毎に2つ設けられ、4層ある。96名が居住できるつくりである。分棟型の建物で、エントランスホール、食堂といった空間は別棟である。食堂は100名近い人数で一組織として利用するものの、生活グループをユニット化し、少人数でのコミュニティ形成が可能となるようにした。複層的なコミュニティ組織を形成することで、寮組織としての大型化を図りつつも、小規模なコミュニティも形成できる方法をとっている。この空間構成は、その後泉山寮の建て替え後の寮舎、潜心寮の寮舎も同様の形態をとっている。なお、梅花寮は、居室が南面居室と北面居室とに分かれる。傾斜地に建てるためにやむを得ない設計であったのかもしれないが、居住環境に大きな違いがある。そのため運用面での工夫として定期的な部屋替えを行い、その際必ず南面室と北面室とで入れ替わるようにしていたと1981年の入居者から聞くことができた。

なお既述の通り長らく寮監がいる体制で寮を運営してきたが、その担当者の部屋については女中や管理人室とは別に学生の近くに配されていた。つまり創立期の小規模な寮舎であるときから、明桂寮のような大規模な寮舎であっても、学生と同じフロアに寮監室があった。しかし潜心寮からは1階にのみ寮監室が設けられ、RC造の泉山寮や梅花寮では、従業員室という名称で管理人や調理スタッフがいることのできる部屋が用意されている。学寮アドバイザーが勤務していた際には、潜心寮寮監室を利用していただ。

表2-1 寮舎に関わる学事報告事項

	概況
S41	三敬寮 生成生寮が取り壊され廃寮 楓寮（西生田 大学寮 RC造150名収容）が開寮
S45	梅花寮の開寮と5寮（桂華、豊明、桜、春秋、松柏）の廃寮
S48	7月 泉山寮 開寮（定員56名増）
S51	楓寮 附属高等学校寮化
S53	4月4日、自敬寮、晩香寮の廃止について、理事会が寮生委員長あてに、老朽化による廃止を伝えたが、寮生は白紙撤回を求め、4月21日に話し合い。老朽度の検査報告書を寮生に提示し、状況説明を行った結果、寮生は両寮廃止はやむを得ないことと了承した
H2	楓寮 高大共同利用（新学部開設に伴い） 2年制寮となる*（H2年入学者より）
H4	明桂寮老朽化で閉じられる
H5	近県からの入学者増により、多数の欠員。学寮連絡協議会で、空き部屋の使い方について検討を行い、暫定的に物置等として利用をした寮もあった
H6	定員減と新泉寮の休寮 泉山寮の2～4階の各1室ロッカールームに エアコンの設置について 平成7年より設置。梅花は個室狭いので、2室で1名利用とし、1室のみにエアコン設置 紫峰寮、精華寮も休寮
H8	定員割れ：梅花寮の1階半分は閉め、潜心は各フロアに勉強部屋
H10	潜心寮は二人部屋から個室
H11	昭和26年からの共同浴場を廃止することを決定。寮生より共同浴場新設の強い要望があり、潜心寮旧ボイラー室に共同浴場を設置することとなった
H13	梅花寮 休寮 百周年学内ネットの整備に伴い、1階学習室・食堂にノートパソコンと学内LANへの接続
H15	学寮給食、建物管理業務、学寮収支健全化のために業者委託に。これに伴い泉山寮の食堂が閉鎖され、渡り廊下で潜心寮と結ぶ。管理人が常駐 寮購買会の廃止。（1905年からの） 寮内のパソコンはトラブル多く、改善の要望
H22	警備会社変更し、夜間も警備員の見回り
H28	2018年度にリノベーションすることが決定
H31	人間社会学部の目白キャンパス移転に先行し楓寮閉寮
R1	リノベーションのため休寮。代替寮として外寮を提供
R3	泉山寮、潜心寮 全室個室にして再開。但し1フロアを新型コロナウイルス対応のために入寮者なしにて募集

* 2年制寮とは、2年生まで在学できる寮のこと

続いて昭和40年以降の学事報告に記載された寮舎への大学の対応を、学生や教職員の寮運営への関りの視点と、日本の住宅事情の変化との観点から考察を試みる。表2-1に寮舎の変化の概況を示す。

昭和40年代は、高度経済成長が始まり日本人の生活が敗戦から抜け出すような頃である。戦後のベビーブーム世代が大学生となり高等教育を受けることを希望する女子も増えてきていたのであろう。住宅政策面では、昭和41年～45年の第一次住宅建設五か年計画で、一世帯一住戸の実現が目標として掲げられ、昭和46年～50年の第二次住宅建設五か年計画では、一人一室の目標が掲げられた。



図2-5 梅花寮の個室断面モデルと個室の様子

昭和45年に開設された梅花寮は、全室個室を実現したもので、日本の住宅政策に先んじた形で提供の試みられた形式である。かなり無理をした個室であったため、図2-5に示す通り圧迫感のある居室、そして収納が少なく廊下に物があふれだす状況であったと入寮者は語る。潜心寮、泉山寮で既に導入されていたフロア毎にコミュニティを形成する個室と12名に一人か所設けられる談話室という生活ユニットを設け、全8ユニットで一つの寮を構成する形式が導入されている。時代を先駆けた居住形態の試みと、共同生活を営み自治の訓練の場としての寮であることが、このような寮を作り上げたと考えられる。

なお、梅花寮については、その後エアコンを導入する際に、その頃の入寮希望者が減っていたことを踏まえて2室を一人が利用できるようにすることで居住空間にゆとりを持たせ、且つエアコンの設置台数を絞るという方策がとられた。エアコンはかつては贅沢品とされていたが、特に都市部における温暖化等のもと普及率が高くなることに合わせて、本学でも導入されたのであろう。前年の平成5年には二人世帯以上のルームエアコン普及率（総務省：主要耐久消費財の普及率（二人以上の世帯））が72.3%となっていることや、寮舎が中廊下式であるために通風条件が悪く、一般の住居に比して住まう環境を悪くしないための対応であったろう。

また大学は運営の効率化も図っている。寮が大型化することに伴い、食事は大量調理を前提とするようになることや、食品衛生管理の運用が厳格化する状況で、専門業者への依頼と同時に、その効率化が求められる。入寮希望者減への対応も踏まえて平成15年には泉山寮と潜心寮の食事を一業者に依頼して済ませるために、渡り廊下が設けられた。平成11年に学生の要望により設けられていた共同浴場の使い勝手も改善されたこととなり、現在にもつながる効率的な寮舎の管理にも結びついている。

大学経営にもゆとりができ、且つ明治・大正期に建てられた木造寮舎が老朽化する中で、寮舎を建て替え、収容人数を増やすための大型化が試みられる。しかし同時にこの頃は、学生運動が盛んな時期でもあり、昭和53年に寮の廃止を決めた理事会に対して、寮生委員会が白紙撤回を求めた。突然の通知に驚いたことに加えて、学生運動で学生が自治の意識を強く持っていたことがその背景にあらう。しかし、学生側は老朽化の検査報告書の説明を受け納得をし、事態は収拾した。このような対話のプロセスは、まさに成瀬が目指していた教育が形として表れていると言えよう。専門家による報告を理解し、真摯に受け止め、適切に判断をする力が学生にもあることを示す。このようなプロセスを踏むこと自体が、教育の一端であったと言える。大学での教育が教室の中だけで行われるのではなく、寮舎でも、そして職員も含めた多くのスタッフとともに行われていた。

寮舎の変化を学内や住宅事情の状況等を参考に振り返ったが、寮舎は時代の変化とともにその形を変えていることが確認された。個室化、エアコンの設置、更には管理業務の効率化は、日本の住宅事情の流れを反映している。一方、変更についての決定方法については、かつて自治寮として学生が主体的に自らの住む環境に発言・意思表示していた状況から、次第に管理者である大学の意志で、決められていくという変化がみられる。これは、社会において市民意見を反映させる仕組みが整ったことと、社会が物質的に豊かになり社会体制に反発するような政治的な運動等が、一時期ほど活発に行われているわけではないこともあろう。社会では変化に対する市民の意思表示の場が法制度により整えられ、内容の反映は十分ではないという意見もあるものの、仕組みとしての意見聴取（パブリック・コメント）や、ワークショップ等での意見集約による計画策定が当たり前に行われることと比べると、学生が意見を言う場が十分であるとは言えない。学生連絡協議会で教員や事務担当者との意見交換の場はあっても、それが寮舎の修繕等への意見提示の場ではなく、またそれを求めるような学生の動きではない。

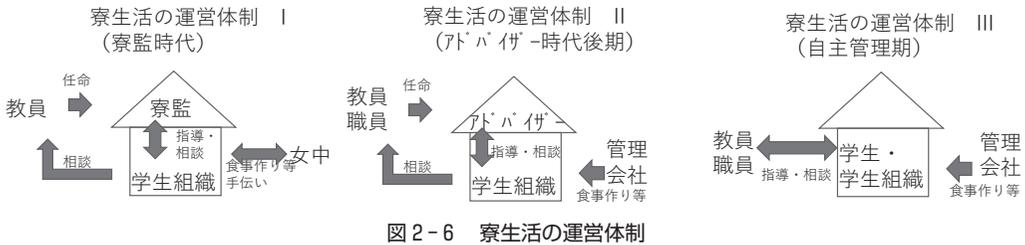
2-3. 寮組織と自治

本学の寮は、教育寮として位置付けられている寮ではあるものの、大きく3種類の体制で運営が行われてきていた。寮監という教育担当者が住み込んで教育をしてきていた時代、学寮アドバイザーという通いで支援者がいた時代、そして指導に当たる者が寮に在住しない時代とがある。各々本稿では寮監体制、学寮アドバイザー体制、自治体制と呼ぶこととする。

寮監の在・不在は、長い時代のうちに様々に変化をしてきた。寮監の配置は開学時からの取り組みで、精神的な面での成長を支えるのにふさわしい人物が選ばれていた。大学で教鞭をとる教員が当たることの多かった時代もあれば（特に戦前）、夫に先立たれる等で单身となった卒業生が、住み込むこともあった。寮監の役割については既に多くの研究がされてきたが、大学やその他の役割との関係も含めて整理したものが図2-6である。寮監がいたのは1901年から1969年であった。寮監がいることは、教育者とともに暮らすことであり、その自由度は寮監にもよったであろうが、見守られ、ある一定程度の管理された生活を学生が営んでいたと言えよう。特に戸建て風の小規模寮では、人数が少ない中での寮監の存在は、寮生活の雰囲気づくりに大きな影響を与えた。木造戸建て風住居で、1階と2階の中廊下型住居であったことから、建物内での移動を居住者同士が相互に把握しやすい作りである。特に玄関は1か所であったため、人の出入りの確認もしやすい。寮監との思い出の中に、学生の出入りの多い時間帯は、寮監が玄関先に立って、挨拶をしたり声をかけて体調を気遣うことがあったことが記録されている。

なお、この当時は、女中（1959年明桂しおりでは、「お手伝いの人」という呼称。どの時点で呼称に変化があったか不明であるが、同じ女性として立場は異なっているが女中という上下関係を明らかにするような呼び方をやめたものと推察される）として雇われている若い女性がいたようで、炊事等を行っていた。

表2-2に、記録に残る寮監の在職時期を整理した。20名のうち3名はその後学長となる人物である。卒業生で初めての学長となった井上秀、戦後の女子大学を率いた大橋広、そして図書館を創る等現在の大学を形作った上代タノである。またそれ以外にも10名が指導者や教授職として学生の教育にもあたった人物である。これは寮を単なる生活の場ではなく、教育の場であるとする設立当初の考え方にも基づく状況であろう。文献をもとに、寮生と寮監の関係性の推察を試みる。表2-3に小川政子、藤原千代、風間愛の3寮監について既述の抜粋を示す。躰等の指導を受けたこ



とのほか、各寮監の専門性を生かした指導が行われていた記述が確認できる。特に食事作りについては、日常的な生活を送る様々な場面で専門性を生かした指導を受けた記憶が語られており、共に暮らしているからこそその学びを得ている。また、寮監の熱心な仕事ぶりや優しさの指摘もある。

他大学同様、本学の寮の運営に大きな影響与えたことの一つに学生運動がある。表2-4は、学事報告に記載される昭和40年以降の学寮に関する記述から、その管理・運営に関するものを抜粋したものである。

その頃の学生との議論・混乱の状況が読み取れる。寮監制度が廃止される頃は、他にも寮費の値上げや、建物の建て替え等にあたって、かなりの頻度話し合いが開催され、特に理事長を含む経営に携わる教職員が、学生と直接話し合いをする寮舎委員会が発足し対話をしていた。その後バブル期の平成2年に、学費改定を機にという理由で、学寮アドバイザーを配することとなる。この背景には、学生の自治体制の維持の難しさがあったのであろう。曜日毎に異なる学寮アドバイザーが入ることで、様々な大人とのかかわりを持つことができるのと同時に、一人の価値観のみでの指導にならない体制が整えられる。平成9年には受験戦争を経て入学する学生へのメンタルヘルス等への支援や、その後はコミュニケーションスキルのためのワークショップを開催する等、共同生活運営に向けての教育が、積極的に行われていたことが確かめられる。

一方で、西生田の寮では、夏季休暇中に自主運営の期間を設ける等、一時的な完全自治の体制をとる期間を設け、そこに食事指導等も含めた、生活全体を見守るような対応を大学側が行っていたことが読み取れる。学生の自立的な生活を見守りながら、学生の特性に合わせた支援を行ってきたことがわかる。令和元年に行われていたリノベーションを経て、学寮アドバイザーのいない体制が設けられる。平成24年には、学寮アドバイザーにアドバイザー業務の範囲を確認した記録があることから、学寮アドバイザーという中間的な役割の方への、教育に対する考え方の共有が難しかったのであろう。直接職員や教員が学生への対応を行うという方法に変化した。

2-4. 生活を通じた自治の変化

生活を通じた自治の変化を振り返る。表2-5は、明桂寮を中心とした変化を示す。1927年に建設された頃は、一室4名で使う洋風寮で、寮監に加え寮監助手が1～2名、更に女中（お手伝いの人）が2～4名の体制で運営されていた。学生は、食事の下ごしらえ、食器洗いを当番制で行っていた。当時は食事の献立は寮毎に寮生と寮監とで考えていた。栄養のバランスだけでなく、会計管理も行い、また季節ごとの行事に合わせた献立を検討したようで、大学での学びを実践的に試みる場となっていた。1969年に寮監制度が廃止されると同時に女中（お手伝いの人）も廃止となり、栄養士が献立を考え、調理員が食事を作り、困りごとがあれば大学の学寮係に相談をする体制であっ

表2-2 主な寮監の在職時期

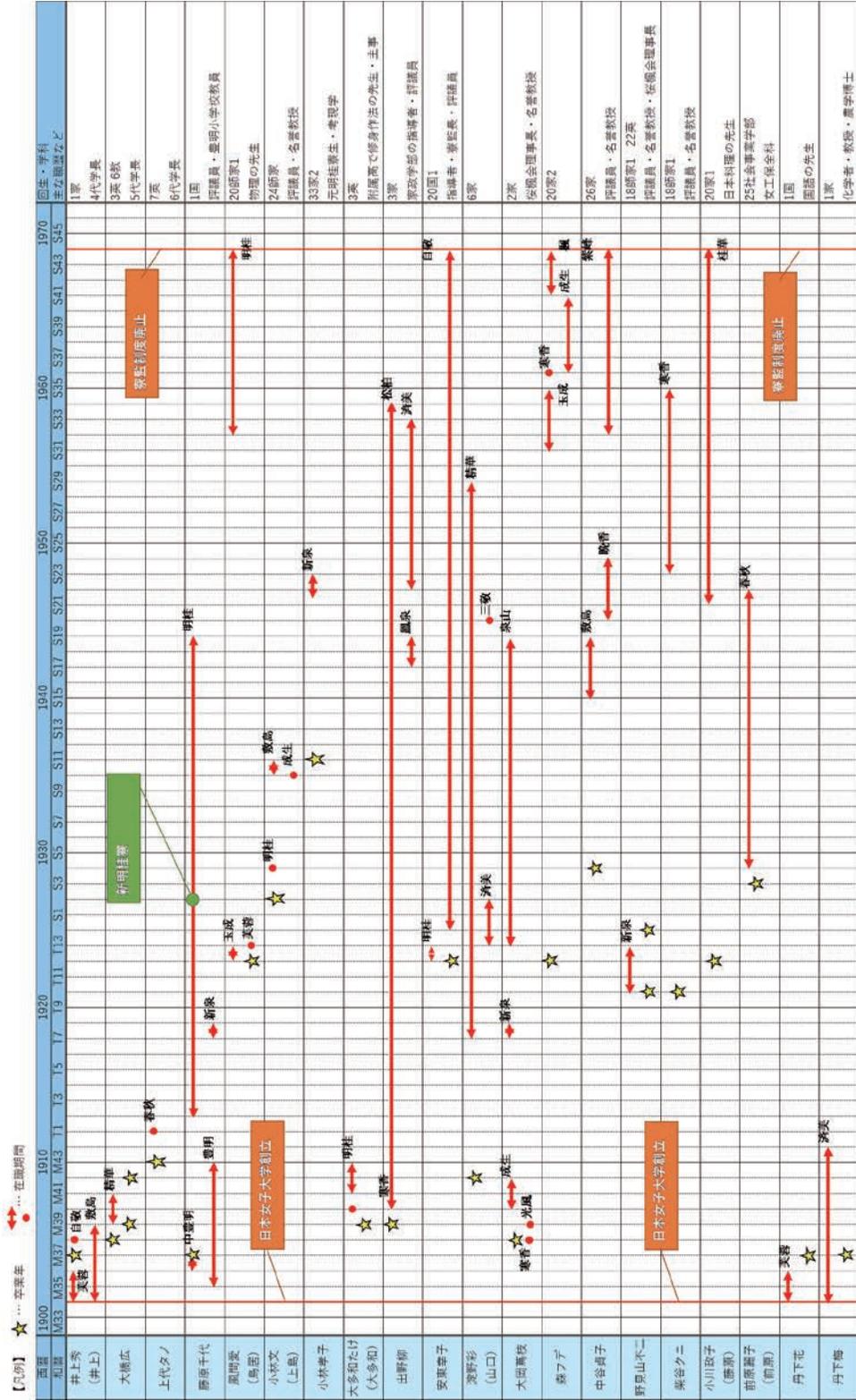


表 2-3 寮監と寮生の関り

<p>小川政子</p>	<p>20家1 料理の先生 桂華寮監 (1946~1969)</p>	<p>▼厳しいけど偉い方だった。(S) ▼生活の細かいことは言わないが、折に触れいろいろ教わった。小川先生は、学校でお料理を教えていたので、食事のこと、盛り付けのこと、クリスマス会などのフルコースの時も、食物科の人が勿論主体ですが、先生にも西洋料理の盛り付けはとか、和風の場合はとかを、先生が手伝いながらその中で教わった。偉そうにおっしゃるのではなく、生活を通してその中で学びました。(S) ▼日曜日の朝は西洋風の朝食を用意してくださった。クリスマスも今思えば豪華だったが、そういう何かの折に、ちょっと教わった。(K) ▼小川先生がいらっしゃるとう変なふうになつかう。先生がお食事にいらっしやると声もたてられない。ちょっと保守的。(S)</p>
<p>藤原千代</p>	<p>1国 (31歳で入学) (新) 明桂寮監 (1927~1944、57~74歳) 評議員、豊明小学校教諭など兼務</p>	<p>▼朝一鈴と二鈴が鳴って、一鈴が鳴ったら食堂に集まり、二鈴が鳴ったらご飯を食べる。助手の自分は一鈴が鳴ると、3階の自分の部屋から駆け降りて、先生がいらっしゃる前に机が曲がっていないか見る。一部違っていると先生から(直すように)言われる。(K) ▼暮れの31日に帰省せず残った寮生と、お手洗いの大掃除をした。(K) ▼昭和天皇皇后が視察に来ることになり、食堂に入って行く時白く埃が溜まっているように見えるところを、夜中の12時に油を(隅や角などに)塗っていた。(K) ▼お風呂場で裸になってから、竹のササラでお風呂場をこすって洗っていた。「これをしておかないと生徒が転んで怪我をすといけないから」と言って、助手の自分がすると言ってもさせてもらえなかった。(K) ▼火鉢の陰を掃除しなかったら、「見えようが見えまいが、そんなこと関係なく掃除するものだ」(K) ▼「考えの違う人に『私はこう思う』と言ってもそれはそうならない。じぶんで実現していかないことには、実現する方法があるんだ。」お腹の中まで見られているような。(S) ▼いつ突然卒業生が来てても家族のように、本当に自然に暖かく迎える、というのが成瀬先生の考えだったから、いつ寮に来てもいいのよ、というのをやってみてくださったのが藤原先生。(S) ▼実践倫理を速記でノートに書き、寮の仲間同士で読み合わせて空白を埋め、感想を書き添えて藤原先生に提出し、評をいただいた。(N) ▼卒業生送別会には、十八番のお歌「松竹梅」を聴かせていただいた。(N) ▼朝、昼の出入りが多い時はこの玄関傍に立って声をかけてくださることが多かった。寮生の体調のこと、服装のこと、言葉遣いなどもろもろの事を見抜いていられたかと思う。(N)</p>
<p>風間愛</p>	<p>20師範家政学部1部、 物理の先生 明桂寮監 (1957~1969年、57~69歳くらい) 卒業後(旧姓鳥居)一度寮監になり、のちに再び寮監となった。</p>	<p>▼細谷静枝先生が一時副寮監、あとは一人でやった。 出かける時「どこどこへ」「帰りました」「お帰りなさい」激務だった。ごちゃごちゃおっしゃらない。(T) ▼20万円くらい貯まったので、風間先生が「テレビでも買いませんか」とおっしゃったことに反発して、反対した。特に反対の理由は無かったのですが。(S) ▼物理の先生だったから、ヒューズを全部替えてくれた。(N) ▼高校(教師)に勤める時、お茶碗なんか揃えるの大変でしょうとって一式一応いろいろくださって、最後寮を出る時送ってくださった。亡くなるまで年賀状やりとりしてしていました。厳しいがすごくご親切でした。(N)</p>

表2-4 教育寮としての教職員の関り

	概況	教育（寮監・学寮アドバイザー）	自治
S40	連絡協議会発足（寮監会から3名と寮生委員会5名、曾木1名） 寮監会と寮生委員会の連絡協議のための機関	寮監会（毎週1回火曜日 pm7-10） 大学の教育理念にもとづく寮舎教育について、研究・懇談。	
S41	三敬寮 生成生寮が取り壊され廃寮 楓寮が開寮	寮舎委員会発足：寮生委員会から連絡協議会に提出される議題の内容が理事会の領域のものが多くなる傾向にあるため、寮舎委員会（毎月1回定例会：本部機構各部長、学生指導部長、学生委員（教授会代表）、寮生指導主任、（連絡協議会代表）、書記1名（啓9名）	
S42	拡大学寮委員会（14回） 学寮問題協議会（5回） （予備折衝 3回）	自治寮 一年目における寮の厚生補導は、教育体制（教授会責任）と管理運営体制（理事会責任）の両方面から行われた。	第1回寮生大会 任意参加
S45	梅花寮の開寮と5寮（桂華、豊明、桜、春秋、松柏）の廃寮	寮務課の事務内容の確認 設備・整備・修繕、警備、環境衛生、食事、保健、職員の人事管理、事務一切、入退寮、委員会及び寮問題協議会の事務処理、等	
S46	学寮委員会が入寮者の選考を学生生活部とともに実施。	学寮委員会の目的・機能確認：寮生の自主的活動を見守り、助育 他	
S48	泉山寮 開寮（定員56名増）		
S50	寮費改定（理事会）：在寮する寮生の寮費学は、理事会と寮生自治会との話し合いの結果決定。		
S51	楓寮 附属高等学校寮化 寮費算定根拠 基本部分・運営部分60%、 生活費部分 100%	入寮の集い 修了後（@成瀬講堂）、入寮生の父兄と学寮委員との懇談会（S52も実施）	
S53		4月4日、自敬寮、晩香寮の廃止について、理事会が寮生委員長あてに、老朽化による廃止を伝えたが、寮生は白紙撤回を求め、4月21日に話し合い。老朽度の検査報告書を寮生に提示し、状況説明を行った結果、寮生は両寮廃止はやむを得ないことと了承した。	
S54		大学の保健管理センターが寮の保健管理。	
S56	学生自治会執行部の方針で、学内の学生団体が合同の活動。理事会に対して、学生自治会と寮生自治会の連名で、説明会を要請。		
S57	学寮委員と寮生執行部との懇談会が潜心寮の食堂で食事とともに実施。		
H2	楓寮 高大共同利用（新学部開設に伴い） 2年制度（H2年入学者より）	学寮費改訂に伴い、学寮アドバイザー制度導入。目白地区に2名をおき、寮生活の側面からアドバイス。	
H4	明桂寮老朽化閉じられる。	学寮アドバイザー制度は試行錯誤を重ねながら年々定着しつつある。	楓寮は夏季休暇中の一部自主管理体制。

女子教育の場としての寮の在り方に関する研究

	概況	教育（寮監・学寮アドバイザー）	自治
H5	近県からの入学者増により、多数の欠員。学寮連絡協議会で、空き部屋の使い方検討。	西生田の夏季、冬季の自主管理体制を実施。栄養士の衛生指導から喫食時間を検討する等、生活面の改善を行った。	
H6	定員減と新泉寮の休寮 泉山寮の2～4階の各1室 ロッカールームに。	目白で、アシスタントアドバイザーを2名テストケースとして導入。アドバイザー制については問題もあり今後見直しの時期に来ている。次年度適当な人材が得られれば、学寮委員会では採用するとの意向。	
H7	防犯の意識を高めるために寮大門を綴じ、学生の提示を徹底。 本学の理想とする「教育寮」の実現をめざし、ソフト的な面の充実を図る。そのためには、食堂の集約化、浴場の見直し、購買会の見直しが急務である。また教育プログラムの開発が必要である。	泉山寮 アシスタントアドバイザーの部屋として1室充てることに。しかし採用できなかったので、学生に。	
H9		受験戦争を経て入る学生の悩みには、学生課、学寮アドバイザーだけでは対処せず、カウンセリングセンター及び保健管理センターと連携をとりながら対処しているが、現体制では対処しきれない部分がある。	
H10	潜心寮は二人部屋から個室 3年次以上も残寮可能に	学寮懇談会に保健管理センター、カウンセリングセンターの同席を依頼。	
H11	昭和26年からの共同浴場を廃止することを決定。寮生より共同浴場新設の強い要望があり、潜心寮旧ボイラー室に共同浴場を設置することとなった。	学寮懇談会に保健管理センター、カウンセリングセンター出席。	西生田 日女祭に寮生有志として初参加。
H14	朝の清掃で、生活が規則正しく。		
H15	学寮給食、建物管理業務、学寮収支健全化のために業者委託に。管理人が常駐。 寮購買会の廃止。		寮生執行部が1年間継続
H17		新たに3名採用し、6名の勤務体制。月曜から土曜日の午前、毎日宿直。定期的にバランスよく配置。管理人との連携も円滑に	
H19	体調管理、所在確認のために11月より毎晩点呼。	門限遅刻の回数多い学生に保護者へ通知。学寮委員が面談も。	

	概況	教育（寮監・学寮アドバイザー）	自治
H22	警備会社変更し、夜間も警備員の見回り	コミュニケーションスキルワークショップ	
H23	学寮懇談会復活（学生、学寮委員、学生生活）		
H24		自治寮における寮生サポートという立場を遵守していただくよう大学側が学寮アドバイザーに依頼。	
H25	門限遅刻10回のは退寮勧告となった。	学寮委員と学寮アドバイザーの会を5月と1月に開催	
H27		心理学科の協力で、「コミュニケーションスキルアップ」のワークショップ。学寮アドバイザーを講師として。 アルバイトの比重が高まり、行事への全員参加が困難。寮生のリーダー育成が課題。 学寮アドバイザー5名勤務、週5泊。	
H29		6名勤務で、週6泊。	
R1		学寮委員会は全学委員会となった。（それまでは目白と西生田で分かれていた）	新学寮プロジェクト開催。計14回開催。
R2	代替寮での運営	学寮アドバイザーのない体制。	
R3		寮生の相談窓口として、メール、フォーム、寮内ポストで受付、学生支援課で対応。問題のある寮生を報告し、学寮委員会が助言指導。 寮生より騒音問題があり、個別面談を実施。学寮委員が82名に対して行い、学生支援課が立ち会った。（10月）騒音問題、希望イベント、寮生活について。 学寮連絡協議会にて、寮生自治会と協議の上、生活マナーを作成し、「2022年度学寮のしおり」に掲載。	2021年度に門限を22時に変更していたが、寮生の要望を受け、緊急事態宣言解除に伴い、24時に戻した。

た。一斉に食事をする習慣は無くなると同時に配膳や食器洗いの当番は無くなり、各自が食器を洗うこととなった。寮監がいなくなることで、大学の学びの延長の場という性格は薄らいだ。

1990年には、学寮アドバイザーが配されるようになる。表2-6に学寮アドバイザー体制時の生活運営に関する事柄をまとめた。学寮アドバイザーは住み込みではなく、曜日で決められた担当者が泊まりに来て寮生活をサポートした。明桂寮はこの頃には全室2人で使用しており居住者も50名とコミュニティの規模は小さくなった。学生が献立作りや調理に係ることはなく、自由に食事をとっていた。

表 2-5 明桂寮での生活運営

■明桂寮				
年		寮の概要	炊事・食事	掃除
1901~	寮監制度開始	-	-	-
1927~	(開校と同時)	開寮時、4人部屋、100人規模 寮監1名、寮監助手1~2名、女中4~2名 主婦などの係や当番制で寮生活を行った 1950年頃、2.3人部屋、70人規模 1960年頃『明桂のしおり』『めいけい』	寮生の炊事当番（主に下拵え）は女中と炊事、給仕した 主婦と栄養係（主に食物学科）が献立を作った 行事の時は寮生が行事に合わせた食事を作った 寮生の洗い当番が食器を洗った 寮監と共に一斉食事をし、食前に讃美歌を歌った	毎朝寮監も一緒に掃除
1969~	寮監制度廃止 (不在)	(全寮)学寮委員会発足 主婦の主な仕事は受付係となる	寮監とともにお手伝いの人も廃止へ 栄養士が献立※住み込み/通いの調理員が作った 寮生は時間枠内で自由に食事した 洗い当番が洗う時期から各自で食器を洗うようになった	毎朝一斉清掃 ↓ 週一日夜一斉清掃
1990~	学寮アドバイザー	学寮アドバイザーが週何日か泊まって相談事に 乗った 全室ほぼ2人部屋、50人規模	住み込み調理員は不在、通いの調理員が作った 栄養士が献立を作った 寮生は時間枠内で自由に食事した 使った食器は各自で洗った	週一日夜一斉清掃
1993	-	明桂寮休寮	-	-

表 2-6 近年の学寮アドバイザー体制での生活運営

■泉山寮、潜心寮 ※現在の寮				
年		寮の概要	炊事・食事	掃除
1961~	寮監	1961年 潜心Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ寮竣工（2人部屋） 潜心Ⅰ寮（2階）、潜心Ⅱ寮（3階）、潜心Ⅲ寮（4階）にそれぞれ寮監がいた 100人規模	寮生の炊事当番（主に下拵え）は女中と炊事、給仕した 主婦と栄養係（主に食物学科）が献立を作った 行事の時は寮生が行事に合わせた食事を作った 寮生の洗い当番が食器を洗った 寮監と共に一斉食事をし、食前に讃美歌を歌った	毎朝一斉清掃
1969~	不在	1973年 新泉山寮竣工（個室） 100人規模	寮監とともにお手伝いの人も廃止へ 栄養士が献立※住み込み/通いの調理員が作った 寮生は時間枠内で自由に食事した 洗い当番が洗う時期から各自で食器を洗うようになった	毎朝または晩一斉清掃
1990~	学寮アドバイザー	-	住み込み調理員は不在、通いの調理員が作った 栄養士が献立を作った 寮生は時間枠内で自由に食事した 使った食器は各自で洗った	2003年 業務委託 ※掃除当番あり
2019	アドバイザー不在	リニューアルのため代替寮（民間） 新体制の検討	-	-
2020	-	コロナによる休寮	-	-
2021~	(不在)	寮再開（全寮個室、冷暖房設備）100人規模	業者委託	業者委託

寮内に設けられていた係からも確認をする。本学の寮には“主婦”という係があり、寮組織全体を取りまとめる役割を持っていたことは知られているが、その係の在り方も時代とともに変化した。寮監制度が廃止される頃には、係の名称はあるものの、電話の対応等も含めた受付係といった意味合いで運用された。現在は主婦という呼称は寮内では使われていないが、1993年の明桂寮閉寮までは、使われていた。

2-5. 日本女子大学寮の発展

寮を教育の場として捉え、そこでの学びを繋ごうという試みは本学内での寮生活の継承に留まらなかった。寮を運営することを生業とした卒業生もいた。その一人が本学第一期生の奥宮加寿子である。地方都市から東京の学校に通う少年が多くいた中で、生活管理が行き届かない寄宿舎が多いことを嘆き、家庭的な寄宿舎を設立した。当初小石川区大塚窪町に寮を建てたが、後に同区雑司が

谷町に移転し、日本少年寮として大学から徒歩5分の場所に500坪の規模の敷地に寮を開設した。

麻生校長も折に触れ奥宮の相談に乗っていたようで、卒業した大学に支えられながら、多くの男子を育てていた。敷地内には、図書室、音楽室、化学実験室、印刷室、写真室が設けられていた。情操教育にも熱心だったようで、同潤会女子アパートメントに居住していたことで知られるロシアにルーツを持つバイオリニスト小野アンナが訪ねてきて、彼女の指導を受けた音楽会も開催されたという。1921年の記事には、生物学実験室を新設して、ドイツから取り寄せた国内には無い装置を設けることが書かれており、単に寝泊りする場所ではなく、知的好奇心を自由に満たす場として機能しているこういった生活の場に学びがある、そして単に知識だけでなく精神性を高める教育をすることの重要性を重視する姿勢は、日本女子大学の寮に通じる考え方である。その後政情・経済が不安定となり規模縮小をしたが、卒寮生がいつでも帰ってこられる場として建設された日本少年寮記念の家と称された土地・建物を近家（購入名義は近桂一郎 早稲田大学名誉教授）が買い取り、奥宮を最後まで看取った^{注1)}。

このような本学寮での経験を、他の地域で展開しようという試みは幾つかあったようだ。特に女性の就職が困難であった時代、教室以外の場で人を育てる仕事に魅力を感じ、実践することができたのであろう。継続的な運営に結び付けられなかった点は、個人の経験のみに頼った運営の限界であったのかもしれないが、教育寮の一つの形として、今後類例の収集等も含め、検証することで、本学の寮の意味付けを多角的に行うことが可能であろう。

2-6. 自治寮への転換とコロナ禍

(1) 学寮アドバイザー廃止と自治寮体制に向けての学寮プロジェクト

2020年度の寮舎のリノベーションを機に、減少傾向であった入居率を高めるため、1～2年生のみの在籍を原則とする2年制寮をやめ、4年間更には大学院生であっても入寮できる、全学生性向けの寮とすることとなった。これは少子高齢化、そして大学の数が増えたこと、女子大学よりも共学の大学への志向性が高くなったこと等社会背景も踏まえ、経営状況が決して楽観できる状況ではない中で、寮を維持することの難しさも背景にある。

さらにリノベーションを行うことで入退館の管理体制等を変えられる状況になったことから、アドバイザー不在の自治寮とすることを決定した。学寮アドバイザー不在の自治寮とすることを決定し、学寮委員会が主導して「新学寮プロジェクト」を立ち上げることとし、図2-8のようなチラシを作製して学生を募集した。プロジェクトメンバーは14名の登録があったが、最大で8名、最小2名の参加で、4月1日～10月2日（8月、9月除く）のほぼ毎週、計14回開催した。毎回参加はかなりの負担だったと思われるものの、学寮プロジェクトには、すでに寮に居住している学生、入寮を検討している学生が参加し、寮生活について熱心に語り合った。新学寮プロジェクトは2023年4月から11月までの合計14回に、表2-7に示す内容の検討が行われた。

生活上の細かなルールだけでなく、例えば浴室の利用時間や門限、或いは食事のように管理人や警備会社といった外部に委託する事項も含み、リノベーションを経て変更される設備の改善を踏まえ、契約を更新する機会に検討をすることが可能であった。電話当番のように、携帯電話が普及したことにより不要となった係、実態として実施されなくなっていた朝の一斉清掃といった事項の廃止等の決定に加え、門限の設定、入浴時間などについても、現状よりも時間延長によるメリット、デメリットを学生課職員からの情報を踏まえて決めていった。学寮プロジェクトで学生が決めたこと、希望したことについては、全て学寮委員会でも認められ、運用する準備が整った。



奥宮も使用したとされるソファ・ベッド
図 2-7 日本少年寮記念の家内の様子

新学寮 プロジェクト
「寮の生活の新たなルールを一緒に考えませんか？」
日時：隔週水曜日 12時40分から13時10分
場所：501会議室（百年館高層棟5階）
次回は4月17日、5月8日の予定です。

現在、リノベーション工事中の大学の寮は、2020年度から、学生なら誰でも入寮できる「自治寮」になります。

新しい寮では大学1年生～大学院生まで、自宅が遠隔地でない学生も入寮できます。

入寮を考えている方、どのような寮運営になるのか気になる方、一緒に話し合いに参加しませんか？

気軽に参加して下さい！
途中参加もOK！
昼食持ち込みOK！
学年学科不問です。

行ってきます！

現在の生活ルールを見直し、新たなルールを検討するために、問題点や改善策のアイデアを募集しています。
以前、寮に住んでいた学生の声を聞かせて下さい！

Q 話し合う内容は？
A 集まった人で決められますが、今のところの予定は…現在の門限の時間について寮生以外の学生が、寮を訪れることについて

4月1日、第1回目のミーティング後に新しい寮のモデルルームを見学しました。

ナチュラルで居心地の良い部屋♪
便利な収納スペースが充実

昨年までの寮は門限が早くて困っていた人もいたとのこと。今回は門限をどうするか話し合います。

新学寮プロジェクト学生メンバー 作成

図 2-8 新学寮プロジェクト 募集のチラシ

秋には入寮希望者が集う場を設け、入寮の応募に向けての説明とともに、顔を合わせ、抽選方法や部屋の決め方などの確認を行った。この集いには約10名が参加し、現在の代替寮での生活経験などを踏まえた、意見交換が行われた。上級生がバランスよく各フロアに入居し、そのフロア内で部屋を決める等の方針を確認した。このような在学生同士の顔合わせ兼話し合いを経て、大学入試で新たな入居者を迎える準備が整った。

なお入寮は2年契約を基本としつつも、特に2020年度は1年契約と2年契約の学生を募集した。2021年度以降の入学者への部屋を確保するためである。結果は、2年契約を希望する学生のほうが多かった。4年間生活したいという希望に加え、一般的な学生向けの賃貸住宅契約が2年であることが多いこともその背景にある。

寮生活の運営に向けて、大学側がルールを与えるのではなく、学生の立場と寮の管理が必要となる大学側とが、良好な関係での話し合いを行い、新たな運営方法を形作ることができた。寮自治のあり方の新しい一歩であったと言える。

(2) 寮リノベーション期間の代替寮

代替寮は、大学からバス1本で通うことのできる要町にある民間企業の運営する場であった。本学専用のフロアを設定してもらうことで、従来の寮で自治を行っていた状況や、自然に友達ができ

表2-7 生活ルールの新学寮プロジェクトでの検討と決定事項

事項	2018年度(旧 目白学寮)	新学寮プロジェクトの提案	結果	備考
当番(点呼・防犯)	23:00(点呼は学生が行う。)管理人チェック後に夜間は係が廊下、談話室の戸締まり。	廃止	了承	集まっただの点呼実施は、旧寮では形骸化。
当番(電話)	22:00~23:00(受付で遅刻連絡の電話を受ける。)	廃止	了承	当日急な外泊はある。管理人が受電は可能か。
係設置・内容	経済、食事、文化、美化、安全	必要に応じて変更。	了承	プロジェクトで設置の有無を決めその運用で開寮し、開寮後すぐに自治会で寮生規約を協議、承認。
雑費管理(経済係)	経済係が雑費の収納を管理(学生課を経由して経済係は現金受取り。使用目的は各階キッチン洗剤、行事の費用に使用。)	継承	了承	新寮では大学は雑費は徴収しない。寮生自治で、お金の徴収・管理を希望するのかどうか。(2021年度はコロナ禍のため徴収せず。(行事なし、食器洗剤は大学負担)2022年度より徴収。
大浴場	17:30~22:30 土曜休み	毎日	了承	「日常の決まり」として、寮生自治の頁に記載されている。設備管理の問題でもあるので、時間は法人により変更になる可能性あり。
シャワー	泉山6:00~26:00、潜心5:00~26:00	24時間	了承	安全上の検討要。「日常の決まり」として、寮生自治の頁に記載されている。
朝食	7:30~9:30	7:30~9:30	7:00~9:30	西生田通学には間に合わないため
夕食	17:30~21:00取り置き 22:50まで可。	変更なし	了承	(夏季は21:50まで)
開門	建物開錠6:00	開門5:00	了承	
門限	22時45分まで。	24時	了承	24:00、特例は設けない。
遅刻の対応	門限後も管理人、学寮アドバイザーが対応し、帰寮。	遅刻はできない。	了承	門限の特例がないので、緊急時以外は遅刻は不可。ペナルティは日本女子大学学寮生活細則(学寮委員会)で決定。
部屋替え	年度末等に定期的に実施	空き室が出た場合に希望者を募集。		2020年度のみ事務が行う。
寮生以外の訪問、宿泊	訪問は女性の家族は1階ロビーまで。入寮時のみ女性家族は居室まで。宿泊不可。	本学学生、女性の保護者が、日中の訪問可。	了承	訪問は用紙で届け出。
自転車の持ち込み		ルールを検討したい。	不可	自転車置き場の設営の費用は?(100台はできない、公平さをどうするか)、敷地内は急坂
ゴミの集積場所への	学生が行う。	学生が行う。生ゴミは当番制。	了承	生ゴミ以外一般ゴミ、リサイクルゴミは各自が集積場所へ持って行く。
朝掃除	月・水・金 7:30~全員で行う。	時間を決めた学生による共有場所清掃は行わない。	了承	

安心してコミュニケーションをとることのできる場を設ける工夫を大学側が行った。他のフロアには男性も含めた他大学の学生も生活する建物であったが、ある程度の安心できる空間を確保することができた。

共同利用のできるキッチン空間が各フロアにあったが、本学の寮に比すればかなり小さく、複数の人が共同で利用できるような場ではなかった。そのため日常生活で学生同士の交流が活発になったわけではなかったために、有志の学生がLINEを使ったコミュニケーションをとることを提案し、各室のドアに連絡をとりあうためのメモを貼る等したコミュニケーションが始まった。時間を決めて、1階の食堂で集うなどした交流が行われた。

こういった動きは、学生が学生課職員・学寮委員などからの声掛けで始まった。様々な考え方の学生がいる状況において、学生の声掛けを起こすには、少し背中を押す行動が必要であろう。代替寮としてまとまりをもった運営をできたことは、学内での寮組織で行われていたような強制的な係の分担などが無くとも、コミュニティ形成されたことを示している。

(3) コロナ禍における学寮の運営

2020年3月は、人類の歴史の中でも稀に見る特殊な事柄が起きた。2019年12月に始まった新型コロナウイルスの流行が、日本国内でも広がりを見せ、3月2日から学校を臨時休校にするよう、2月27日に国からの突然の要請があり、多くの学校や会社は慌てた。そのような状態が長く続くかどうか不明かにならないまま、期末試験、入学試験、そして卒業式を実施することができず、3月下旬になっても4月に入学式や、授業を開始することができるのかの見通しが立たない状況であった。

そのような中、本学でも入学式は開催されず、授業もオンラインで約1か月遅れて開始する状況となり、リノベーションされた寮は使用されないことが確定した。その頃は、コロナ禍体制がよもや3年間も続くとは一般の人は思えず、後期には大学での対面授業ができるかもしれないといった期待を持つ面もあったことは否めない。

リノベーションされた寮は、全部個室で、泉山寮45室、潜心寮58室のうち、各々31室と32室の入居が決まっていた。しかし入寮は実現せず、実際に入寮できたのは2021年春からであった。2021年4月時点では、コロナ禍は収束していたわけではないが、感染予防の方法の目途がつき、感染を全く防ぐことは難しくても、感染しにくい環境を整えることが社会で定着してきた。学寮では1フロアを感染者が発生した場合の隔離フロアとして確保し、朝・夕食を提供する食堂は黙食、各フロアに用意されている談話室での飲食を禁止、相互の個室訪問禁止という厳しいルールでスタートした。コロナ禍で多くの人に会うことを切望していた学生が多かったことや、ワンルームマンションでの一人暮らしの若者が一人で生活していて亡くなるような報告例もあったこと等が背景があると推察されるが、多くの学生が入居を希望し、満室でスタートした。入寮希望者数は115名、実際に入寮できた学生数は85名であった。

(4) 与えられた自治における学生の自治体制の形成

ともに生活をして学生を見守る存在が無くなったのは、以前、寮監制度が廃止された頃にさかのぼる。しかしこの時は、学生が望み、大学とも多くの対話を重ね、かつ上級生からの継続的な自治組織が設けられた上での取り組みだった。しかし今回は、2年制寮から、リノベーションのために継続入居を希望する2年生と一部の3年生のみが代替寮に移動し、更にその後のコロナ禍を経て、

自治組織の文化を継続することはできなかった。

リノベーション後の再スタート初年度となった2021年度の入寮式は、成瀬記念講堂で一言ずつ名前と簡単な自己紹介を全員に向けて行う程度で終了した。係等をフロア毎に決める必要があったことから、LINE グループをつくり LINE のくじを使って決めたフロア、談話室に集まり決めたフロアなど様々であった。学寮委員会や学生課から、フロア毎の交流についての細かい指導はなく、自主性に任された結果、フロア毎に交流には大きな差ができた。

入寮者へのヒアリング調査からは、大きく3種類のコミュニティの存在を確認できた。コミュニティ形成のリーダーシップをとる学生の存在があることで、談話室に集ってイベントを開催するような取り組みのある積極的交流コミュニティ、トラブルが起きたことでその解決に向けて交流が始まった問題解決コミュニティ、そしてあまり積極的な交流を行わないコミュニティである。一年目は特に談話室の生ごみの捨て方や食器の洗い方等、生活の中で気になることを学生同士で解決するフロアもあった。

アンケート調査から、入居者同士でのコミュニケーション状況を確認する。表2-8に示すように談話室の利用状況と入寮理由を確認したところ、入寮理由としてはキャンパスへの近さが最も多いが、それらの学生は交流目的での談話室利用頻度が高い。また自立志向の学生は勉強する時にも談話室を使っている状況が見られる。自立した生活を目指すための足掛かりが多く、特にその意思の強い学生は、表2-9にあるように自炊をできるだけ行うといった姿勢がある。

また、交流のために談話室に滞在していた学生は、成長したという自覚が高い傾向が見られる(表2-10)。友達との交流を通して、自ら成長することや、自己評価を高めるという傾向があると言える。共に暮らす仲間を意識し、交流を促すことが教育寮として、学生の成長を促し、それを自覚できる状況を作るのであろう。

しかし一方で、トラブルも多く、初年度には、騒音問題をきっかけに、表2-4に示したように学寮委員が分担をして全入居者と面談をする機会を持った。個別の面談という対応をとることで、学生の状況を直に把握することができ、対応を行うことができたものの、かつてであれば寮監が行っていたであろう仕事を、普段一緒に生活するわけではなく、特にコミュニティ形成の専門家ではない教員が担うこととなった。当然学寮担当の職員も数多くの学生との個別相談にのることとなり、職員の学生への相談相手としての職能が期待されることとなる。アンケート調査の回答の中には、コミュニティ形成の難しさが退寮の背景にあったと思われる記述も見える。飲食等を共にすることを推奨できないコロナ禍という状況での、自治組織の形成の困難さが見える形となった。

アンケートの中には、談話室のテレビ等を使い続ける学生がいるために、他の学生が使用しづらさを感じている旨の回答があった。こういった事柄も、時間をかけても学生同士がコミュニケーションをとって解決をすべき課題であろう。こういった眩きに対して、どのように支援をすることでコミュニティ形成が可能となるのかの模索をし続けることとなる。

なお、騒音問題は、特に賑やかな活動を行うグループがあったことに起因していたが、居室間の壁の防音性能が悪いために、オンライン授業等を行う隣室の音が聞こえてくるという点について、学生は日常的に不満を感じている。かつては共同で部屋を使っていたような状況に比すればプライバシー性の高い空間ではあるもの、時代と共に変化する生活と学びの形に合うように、建物の改修を一層進める必要があることも示唆される。

表2-8 談話室の利用状況（複数回答）と入寮の目的

	回答者数	食事をつくる時のみ使用した	交流するためによく滞在していた	一人でくつろぐためによく滞在していた	勉強するためによく滞在していた	集まりが煩わしく参加しなかった
キャンパスに近いから	8	5	5	2	1	
一人暮らしや、他の民間寮よりも安いから	4	2	3		1	
自立して自分を高めたいから	2	1	1	2	2	
食事がついていてるため	1					1
親等からの勧め	4	3	2		2	
他の人と交流・活動したいから	3	1	1		1	
東京の一人暮らしを心配されたから	1	1				
総計	23	13	12	4	7	1

表2-9 自炊の頻度と入寮の理由

	キャンパスへの近さ	経済性	自立	交流	食事ある	親等からの勧め	東京の一人暮らしを心配されたから	総計
頻繁にしている。			1					1
時々している。	3	2	1	2		4	1	13
殆どしない。	5	2		1	1			9
総計	8	4	2	3	1	4	1	23

表2-10 談話室の利用頻度と自らの成長の実感

	感じない	感じる	強く感じる	総計
食事をつくる時のみ使用した	4	6	3	13
交流するためによく滞在していた	1	7	4	12
一人でくつろぐためによく滞在していた		1	3	4
勉強するためによく滞在していた	1	3	3	7
集まりが煩わしく参加しなかった	1			1

2-7. まとめ

本学での寮組織と寮舎との関係は、少しずつ変化し続けている。その背景には、社会全体の住宅政策のありようが影響していると思われる。特に戸建て住宅的寮から、集合住宅的寮への転換は、組織の在り方をも大きく変えるものであった。

寮での自治体制は開学の時からの教育的配慮のもとで行われてきた。長い期間、寮監という指導者的立場の人に見守られてきていたが、1967年に学生は独自のコミュニティ運営の選択をしたのである。その後もアドバイザーを置くこと等、様々な学生支援体制が形成されていることで、寮が教育寮としての価値を発揮している。

参考文献

- 1) 日本女子大学女子教育研究所編「日本女子大学寮の思い出—座談会を中心に—」(日本女子大学女子教育研究所、1994年)
- 2) 日本女子大学学寮100年研究会編『女子高等教育における学寮—日本女子大学学寮の100年』(ドメス出版、2007年)
- 3) 中野夏貴「佐藤功一による寮建築の研究—日本女子大学の明桂寮を対象として—」日本女子大学家政学部卒業論文、私家版、2015年
- 4) 杉崎友美「資料紹介 日本少年寮関係資料について」日本女子大学成瀬記念館『成瀬記念館 No37』、2022年7月
- 5) 「よみうり婦人欄 寄宿舎として理想的な少年寮 15周年」読売新聞、1922年11月14日

注釈

注1) 近桂一郎氏への2021年8月23日ヒアリングより。

第3章 明桂寮の生活と自治

藪下 美雪・浅見 美穂

3-1. 明桂寮の空間利用法

3-1-1. はじめに

明桂寮は1927（昭和2）年より休寮となる1993（平成5）年までの66年間、寮生により住み継がれてきた。寮生活は時代によって変化したが、基本的には開寮時の空間構成を活かして暮らしてきた。同じ建物の中でそれらを包括してきたことは、建物自体が大きな意義を示していると考えられる。

本稿は明桂寮の空間利用方法について、実際に明桂寮で生活をした様々な世代の元寮生を対象にヒアリング調査を行い、生活の場面ごとの様子の声を集めた。それぞれの時代の生活の変化に応じて、住まい方や空間の使い方がどのように変化してきたのかを明らかにする。

3-1-2. 調査概要

明桂寮に居住していた元寮生にヒアリング調査を行った。調査概要を表3-1に示す。

調査方法として、現地視察では明桂寮の現状を視察しながら在寮当時の各部屋の使われ方や住まい方、家具の配置などを思い起こしてもらい、その後大学において座談会方式でその内容を再確認した。対面での調査後、電話やメールにより補完したものも含まれる。

表3-1 調査概要

対象者数	在寮期間	回生	調査日	方法
3人	1955(昭和30)～1959(昭和34)	新9	2022.12.13	現地視察後、座談会
1人	1964(昭和39)～1968(昭和43)	新18	2019.12.3	ヒアリング
1人	1976(昭和51)～1980(昭和55)	新30	2022.12.19	ヒアリング
2人	1981(昭和56)～1983(昭和58)	新35	2023.3.3	現地視察後、座談会
1人	1986(昭和61)～1990(平成2)	新40	2022.3.2	現地視察後、ヒアリング
1人	1987(昭和62)～1988(昭和63)	新41	2023.2.15	ヒアリング
5人	1989(平成1)～1993(平成5)	新43、44	2023.5.13	現地視察後、座談会

3-1-3. 空間の使われ方

ヒアリング調査の結果を部屋ごとにまとめ、使われ方の変遷を検証した。ヒアリング調査では調査対象者自身の記憶違いや、対象者間で齟齬が生じている内容も確認されたため、他の文献資料と整合させて補っている。1階の共用空間の使われ方を図3-1に示す。各室の家具の配置は1981年頃の記憶に基づいている。

(1) 玄関

明桂寮には玄関が3か所ある。本玄関は北端側に位置し、寮地区内道路に面した最も格式の高い来客用玄関である。石段を三段上がったところに入口ドアがある。内壁に小口型タイルで縁取りの

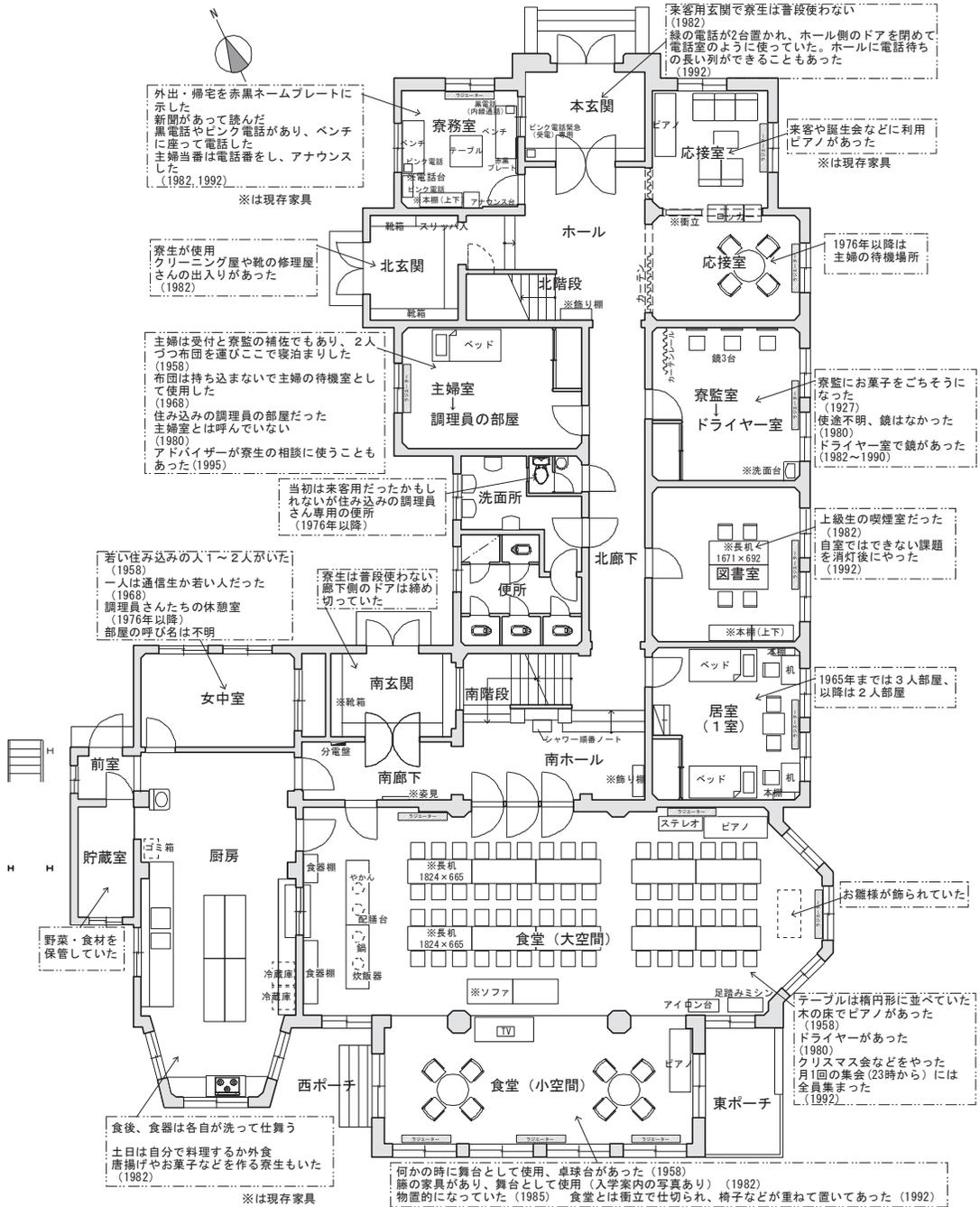


図3-1 1階共用空間の使われ方

装飾があり、靴箱のある北玄関や南玄関とは別格の造りになっている。1928年に皇后陛下^{注1)}、1929年にタゴール^{注2)}などの訪問を受けた際にはこの玄関を使用したと推測される。また竣工当時は家族や親族を含めて訪問者も多く、本玄関から中に通されたと考えられる。来訪者数は次第に少なくなり、本玄関にはピンク電話や緑色の公衆電話が置かれ、ホールとの間のドアを閉めて電話室としても使われるようになる。

北玄関は寮地区内道路より明桂寮敷地内に少し入ったところに位置し、地面から一段上がった高さには出入口がある。1955年以降1993年休寮時まで、寮生全員の玄関として使われていたことが分かったが、1954年以前については確認できていない。玄関の両脇の壁に全員分の靴箱が置かれている。靴箱には一人当たり2足程度しか入らないため、それ以外の靴は自室のベッドの下などに箱に入れて置いていた。北玄関には1981年頃までは靴の修理屋の御用聞きが来ていた。その他、郵便配達、宅配便、出前などの出入りも殆どが北玄関を利用していった。1989年頃、新入生のために新しい靴箱に造り替えられている。

南玄関は北玄関より更に南奥の明桂寮敷地内に入ったところに位置している。北玄関と同等に寮生用の玄関の造りになっており、北玄関に1980年頃にあった靴箱と同様の靴箱が現存し、中に靴が相当数残存している。しかし使用時期は不明で、1955年頃に南玄関は使われていないことが確認されたことから、南玄関が使われていたのは1954年以前であると考えられる。1945年頃までは寮室は主に4人部屋で、寮生100人余りが生活していた^{注3)}ことから、北玄関だけでは狭く靴箱も足りないため、北玄関と南玄関の二箇所に分けて使われていたと推測される。1989年頃は廊下との間のドアが施錠されており、荷物等の出し入れ等の利用はあったかもしれないが、寮生が南玄関を使用することはなかった。

(2) 寮務室

寮務室は北玄関に隣接しており、寮生が頻繁に立ち寄っていた部屋である。本玄関との境界壁には受付カウンターと小窓が設置されているが、寮生によって利用されていたかは確認できていない。寮生は外出から帰寮の際には最初に必ず寮務室に寄り、在寮か不在かを示す赤黒ネームプレートを裏返し、自分の郵便物を受け取り、主婦が伝言など預かっている場合はそれを聞いていた。寮務室は設計図上の名称であるが、寮生からの呼称は特になく部屋である。1955年頃は、部屋の中央に新聞を置くテーブルがあり、アナウンス機器とチャイム、所在を示す赤黒の名札の掲示板、お知らせ用の掲示板、郵便物を置く台、着信専用の黒電話が一台あった。1980年頃には本棚（上下）やベンチのような箱の家具2台も置かれていた。

時代により変化が顕著なのは電話器の増設で、1955年頃は黒電話1台だったが、1976年頃は寮務室に公衆電話であるピンク電話2台、黒電話1台、赤電話1台が本玄関に置かれていた。1989年頃は寮務室の電話は同じだがピンク電話は着信専用となり、本玄関に緑色のテレホンカード用の公衆電話が2台設置され、夜間は電話の順番待ちをする寮生の長い列が玄関ホールにできることもあった。お互いの電話の話し声が筒抜けであったが、それでも電話は寮生にとって必需品であった。その他、寮地区内道路の明桂寮の向かい側の植え込みである屋外にも公衆電話が1台設置されていた。

(3) 応接間

応接間は来客用である本玄関の東側に隣接し、南北2部屋続きになっている。どちらもホールと

部屋を仕切る建具はなく、梁の下にカーテンが取り付けられ、応接セットが置かれていた。電話等が普及する以前の昭和初期から中頃（1960年代）までは寮生の親族など来訪者が多く、寮監や主婦が取り次ぎを行い、寮室には通せないが応接間では面会が可能であった。1976年頃には食堂にもピアノがあったが、更にピアノが1台追加され応接間に置かれていた。1981年には『共同奉仕』の額縁、応接セットの椅子があったことが確認されている。応接室の設えとして、寮室とは異なる繊維壁の仕上や応接セットなどの家具が置かれていたが、来訪者は次第に減少し、寮生同士の打ち合わせや団樂の場所として使用される頻度が増えていった。個別に数名で誕生日会などを行える場所でもあった。

南側の応接間も北側の応接間と同様に使われていた。応接セットの椅子とテーブルがあり、北側の応接間とロッカーなどの家具や衝立で仕切られていた。1976年頃以降は、北玄関に近く電話の呼び出し音も聞こえることから、主婦の待機場所として利用された。

（4）寮監室（→ドライヤー室）

寮監室は1969年までは寮監が使用し、室内の様子は不明であるが、入口近くの左側の天井にカーテンレールの痕跡がある。また部屋の南東角に造作の洗面台が現存している。『日本女子大学寮の思い出』の中に、「寮監室を訪れた寮生はまずここで手を洗えばお菓子をいただける」という記述があり^{注4)}、その洗面台の存在が確認できた。

寮監制度廃止後、1976年頃はまだ鏡は設置しておらず、当室の用途は不明である。1982年頃は北側壁面に3枚の鏡と専用コンセントが設置され、寮生のドライヤー用の部屋として使用された。それ以前は、寮生は自室の机の前でドライヤーを使用していたが、以降、各自が自分のドライヤーを当室に持参して使用した。

（5）主婦室（→住み込み調理員の部屋→学寮アドバイザーの待機室）

主婦室は寮生の玄関である北玄関の南側にあり、廊下を挟んで寮監室の向かいに位置している。主婦の主な仕事は来訪者の取り次ぎであり、また寮監を補佐する上でも寮監室にも近い位置にある必要性があったと推測する。1955年頃は、主婦が2名ずつ交代で1週間くらい（諸説ある）寝具や身の回りの物を運び、主婦室に泊まっていた。1965年頃は、寝具は運ばず泊まり込みはしないが、主婦の待機室として使用された。1976年頃は、主婦室は住み込みの調理員の居室となり、主婦の待機場所は応接間に移動している。調理員は1988年頃まで住み込んで寮生の食事を作っていた。学寮アドバイザー制度が始まる1990年頃は、学寮アドバイザーが使用する部屋となった。学寮アドバイザーは週に2、3日泊まり、寮生の相談に使うこともあった。

（6）図書室

図書室には壁側に本棚（上下）が置かれ、部屋の中央には長机2つと椅子が置かれていた。両隣の部屋にはある物入は当室にはない。1955年頃は夜11時の消灯後も勉強したい人はこの部屋で電気を点けて勉強することができた。その後も、深夜まで課題をしたり友人と話をしたい人が使用していた。図書室と呼ばれているが本の貸し出しはしておらず、多数の本が置かれていたことは寮生にあまり知られていない。芥川龍之介全集や源氏物語、世界文豪代表作全集などが残存している。

(7) 居間（1室）

1階にはさまざまな共用空間があるが、寮室である居室の1号室（通称1室）があることは、部屋替えて当室に居住したことがある人以外はあまり認識されていない。1929年頃の寮監助手は、居室は24室あったと述べている^{注5)}ことから、当時は1階に寮室は存在していないと思われる。2、3階の北東に少し小さい寮監室という居室があり、寮監助手は3階にいたとの記述^{注4)}があることから、寮監助手はそれらの部屋に居住していたと推測する。

1976年頃以降は1室が1階にあったことが確認できた。それ以前は、『めいけい』^{注6)}の中の部屋の紹介記事と、『明桂のしおり』^{注7)}に掲載されている当番表が27に分かれている（表3-3）ことや、2階と3階の寮室の合計が26寮室であることから、1959年頃には1寮室が1階にあったと推測できる。広さは2、3階の3人部屋と同じであるが、廊下から食堂に繋がる階段の位置との関係で、他では中央にある入口ドアが北側端に寄っている。そのため3人分の家具の配置が困難であり、1965年以降は2人部屋として使用している。一方で、同時期に居住していた寮生で、1室と言われる方が図書室、図書室と言われる方が応接室でピアノがあった、また和室がどこかにあったという話もあり不明点もある。

(8) 食堂（大空間）

食堂は朝昼夕の食事をとる場所であるが、行事やミーティングなどの際に寮生全員を収容できる唯一の大空間である。南に開ける傾斜地を利用して、床を1階北廊下より3段分下げることで食堂部分の階高を高く確保し、天井高が3メートル近くある。また大きな柱と装飾的なハンチのある梁やベイウインドウなど、明桂寮の特徴的なデザインが見られる場所である。開寮当初は貴賓との歓談、また日常的には新入生歓迎会、ホームカミングデー、卒業生送別会をはじめ多くの行事を、食堂（小空間）と合わせて使って開催された。

1955年頃は朝夕の食事は一斉に摂っており、テーブルは皆の顔が見えるように大きな楕円形になるよう並べていた。三連のスイングドアの前のテーブルの直線部分の中央に、寮監と両脇に主婦が座り、食事の会を取り仕切っていた。寮監の座席周りのテーブルをメインテーブルと呼んだ。また北東の壁前にピアノが置かれていた。

1976年頃は寮監廃止後であり、食事は一斉に摂ることはなくなり、食事のテーブルも直線に二列になった。その他、テレビ、アイロン、ミシン、スタンド式ドライヤーの通称“おかま”があった。1981年頃は、テレビ、アイロン、ミシン、ステレオがあった。食堂の厨房側には両面ハッチがあり、その両脇に食器棚があった。配膳台が置かれ、食事の際には炊飯器や鍋、やかんなどが置かれ、各自がよそっていた。

1977年頃、2階か3階の廊下の物入にお雛様セットが仕舞われているのが見つかると、東側の出窓の前付近に3月に飾るのが恒例になり、卒業生送別会に華を添えた。その習慣は休寮時まで続いた。月1回のミーティングは、1990年頃は平日の夜23時から開催されていた。大学からの連絡事項や寮内の決まり事などを話し合った。集金もあるため寮生全員が集まっていた。

(9) 食堂（小空間）

食堂（大空間）の南側には床が60mm程度上がり、大空間との境目にある2本の八角形の柱により空間的に区切られている小空間があり、ベランダとも呼ばれている。半円形窓が上部にある大きな窓が三面に計6枚あり、大変明るく、明桂寮の最も特徴的で主要な空間である。1934年頃は、南



図3-2 食堂で寛ぐ寮生（『1981年日本女子大学大学案内』p.45）

東角側にお雛様を飾っていた。1976年頃は、柱の間にテーブルがありテレビが1台置かれ、大空間側にソファがあり座ってテレビを視ることができた。食堂のテーブルとソファも現存している。

1955年頃は、行事やパーティーの際に出し物の舞台として使っていた。普段は卓球台が置いてあり、窓は摺りガラスで外は見えなかった。1967年頃のホームカミングデーでは、催し物の寸劇を舞台にして行った。1976年頃はピアノも置かれ、舞台のようではあったが、実際に舞台としては使用していない。籐製の洒落た応接セットがあった。1982年頃、いずみ祭で明桂寮の出し物としてコーラスを行い、ピアノもあったので舞台として使用している。記念撮影場所として使われたこともあったようである（図3-2）。

その後、舞台としては殆ど使用されず、また大空間のとの間は衝立や家具などで仕切られ、寮生は立ち入りにくい空間となっていく。休寮間際には、ピアノやステレオなどがあった記憶はあるものの寮生の中には入れず、西側の掃き出し窓から庭に入出入りすることも知られておらず、小空間の窓や空間を楽しむことはできない状況であった。

(10) 厨房（調理室）

厨房は寮生が頻繁に入出入りする場所であった。厨房の真ん中には大きな配膳台があり、1955年頃は炊事当番が食材の下ごしらえや盛り付けをした。また稀にプライベートでお弁当などを作る人もいた。1976年頃まで朝のお洗い、夜のお洗いが当番制であったが、1981年頃お洗いが当番制でなくなっても、自分の使った食器は各自で洗うため、流し台の前には食べ終わった人が洗う順番待ちをしていた。土日は各自が自分で料理をするか、外食であった。唐揚げやお菓子などを作る寮生もいた。全ての年代の寮生の記憶として、食堂との境目の壁面に両面ハッチがあり、そこに用意された盛り付けられたおかずのお皿を食堂側で取り出し、食事をしている。また、夕食後の余ったおかずや残りごはんを握ったおにぎりを両面ハッチに入れ、誰でも食えることができた。

(11) 女中室

1955年頃はお手伝いさんと呼ばれる20歳代くらいの若い女性が1～2名住み込んでおり、年配の通いの調理員1名と共に寮生の朝昼晩の食事を作っていた。1964年頃は若い女性は“通信の人”と言われていた。1976年頃は、住み込みの調理員と年配の通いの調理員が1名ずつおり、当室は調理員の休憩室となっていた。1981年頃も同様であった。1989年頃は住み込みの調理員はいなくなった

が、通いの調理員2名の休憩室として使われていた。女中室は設計図上の名称であり、女中という呼び名の人がいた時期があるかは不明である。お手伝いの人も、本学の通信教育課程の学生か他の学校に通っていた人かは不明である。通いの調理員や住み込み調理員とも混同している部分もあり、明確ではない。

(12) 貯蔵室

貯蔵室は設計図上の名称であり、厨房で扱う食料や調味料を保管する部屋である。寮生は立ち入らない部屋と思われ、部屋名や室内の様子についてわかる人はいなかった。

(13) 南廊下（南ホール）

食堂に入る手前のホールで、1階北廊下から3段下り突き当りを右折したところに少しゆったりとした空間がある。左側は食堂に入る3連のスイングドア、右側は地下1階へ下る階段と北玄関のホールへのドアがあり、天井高が約3mある。南階段を降りたところでもあり、全ての寮生が1日に何度も行き交う場所である。1955年頃は夕方、体操をするスペースでもあった。地階にシャワー室ができて以降は、階段に挟まれたところの家具の前にテーブルがあり、シャワーの順番待ちを記入するノートが置かれていた。

(14) 洗面所・便所

洗面所と便所は1、2、3階とも同じ位置にあり、1階のみ廊下から直接入れる手洗いと便所がある。ここは当初は来客用と思われ、この便器のみ洋式である。1976年以降は調理員専用で使用されていた。各階の洗面所と便所は、部分的な改修はあるが開寮時に近い状態と推測され、1955年頃の元寮生も現存の姿と変わらないと確認している。休寮時まで棚やタオル掛けは使われていた。また一貫して洗面所に給湯設備はなかった。

便所は当初からすべて水洗であったが、1955年当時は水圧が低く水洗ができず、地下の洗濯場からバケツで水を運び、甕に溜めて柄杓で汲んで流していた。1981年頃は高架水槽設置により水圧が改善され、不便は解消された。

1階の食堂側の南階段を降りると、地階に浴室と脱衣室がある。さらに廊下の突き当りの南面には洗濯場がある。地階の共用空間の使われ方を図3-3に示す。各室の家具の配置は1981年頃の記憶に基づいている。

(15) 浴場・脱衣室

浴室は開寮時から1945年頃までは使われていたようである^{注8)}が、戦時下の1946年に燃料不足で使用禁止になって以降は使用されておらず、入浴は1950年にできた寮地区の共同浴場を使用していた。地階の浴室は1955年以前に閉じられ、1955年頃以降の寮生はその存在を知らない。1989年頃に脱衣室を楽器の練習などで使用した寮生は、浴場のドアは施錠されて中は見るができなかったとのことである。1955年以降、歌（オペラ）の練習や、ハーブ、フルート、バイオリンの練習、油絵を描いていた人や占いを楽しんでいた人が見られた。元は脱衣室だったとは知らずに使用していたと思われ、音がよく響き隔離されている空間であるため、他の寮生への迷惑がかからないように配慮して当室を使ったと推測される。

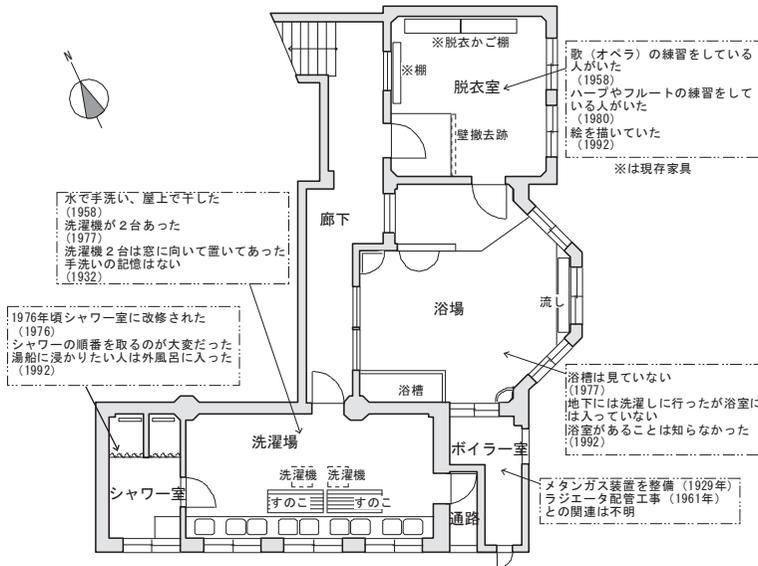


図 3-3 地階の共用空間の使われ方

(16) 洗濯場

洗濯場は地階ではあるが南側の日当たりの良い場所にあり、明桂寮の家事空間に重きを置く特色がわかる。南の窓側一面に水切りの付いた人研ぎ流しがあり、1955年頃までは寮生は皆、水で手洗いをし、洗濯したものは屋上に干していた。床面が広いのは、盥に水を汲んで床に置き、足踏み洗いやしゃがんで手洗いをするためと推測する。上の階は水圧が低く便所の水が流れにくいいため、ここから水をバケツで運んでいた。また、寮室で使う火鉢の炭は洗濯場に取りに来たとのことだが、東側の出入口の外に石炭室があることから、燃料関係はこの付近に置かれ、木炭も当室から運んだ可能性がある。1976年頃には洗濯機が2台あり、流し台との間に簀の子が敷かれていた。1989年頃にも洗濯機があり、瞬間湯沸かし器が設置され、寮生の洗濯は楽になった。洗濯機の位置は南側に移動している。

1976年頃、洗濯場の西端を仕切ってシャワー室2室が作られ、寮敷地内の共同浴場と併用して使用できるようになった。1階食堂前の階段横にノートがあり、シャワーの順番待ちの名前を書き、自分の番が終わると次の人を呼びに行くという方法が休寮時まで続いた。当時約70人の寮生にシャワーは2室しかないため、順番が回ってくるのは夜中になることもあったようである。1985年頃、シャワー室の壁や床の改修工事が行われ、さらに快適になった。夜中は呼び出しの放送を使えないため、休んでいる同室の人の迷惑にならぬよう、足音を忍ばせ小声で次の人を呼びに行っていたとのことである。

(17) 屋上

屋上はバルコニーとも呼ばれ、開寮当初は外国人をもてなしたり、朝の集いなどを催し瞑想が行われていたとの記録がある^{注9)}。1955年頃は、屋上で一斉に集って行う行事や習慣はなかった。各年代を通して洗濯物や布団干し場として使われた。雪の日に雪だるまを作ったという人もいる。富士山を望む四方が見渡せる眺望の開ける場所のため、寮生同士でおしゃべりをしたり、中には喫煙

場所としてなど、寮生にとって息抜きやリフレッシュできる場所であったと思われる。

(18) 寮室（居室）

明桂寮の寮室は、開寮時は24室で全室が4人部屋として使われていたが、1955年頃以降には27室で3人部屋と2人部屋で構成されていた。寮室内の家具としては学習机、椅子、本棚、ベッドが各人に用意され、ガラス棚を上置きした箆筒が1部屋につき2セット程度ずつ共用として置かれていた。それらの家具は元寮生によって、現存しているものと一致することが確認できた。1955年頃は寮内に暖房はなく、炬燵といって火鉢にやぐらを乗せて布団をかけたもので暖を採っていた。炬燵は部屋の中央に置かれ、各自の椅子を学習机のところから持ち運び、炬燵や火鉢を囲んで団欒をしていた。火鉢でおもちなど温めて食べたこともあった。1961年に温水暖房工事が行われ、以降はラジエーターで暖房がなされた。1階はよく効き熱いくらいだったが上の階はあまり温まらず、寮生は皆、冬季は半纏を着ていた。1976年頃には、部屋の中央に炬燵の代わりに団欒用テーブルが置かれ、ママと呼ばれる年長者は電気ポットやオーブントースター、部屋の人数分のケーキ皿やティーカップ、スプーンやフォークを自前で揃え、積極的に部屋でお茶会を催していた。

ベッドは1932年頃は鉄製の折り畳み式で、ギシギシとコイルが音を立て、朝起きたら畳んで物入に片付けていた。鉄製のベッドは現存しておらず写真などでも確認できていない。戦時中の金属供出のため姿を消したのではないかと思われる。1955年頃は籐や竹製のベッドで、折り畳めない型であったため、いつでも寝られて良いという利点があった。藤や竹製ベッドは現存しておらず寸法も不明であるが、後のスチールパイプ製ベッドより小型であったと思われる。

1976年頃はスチールパイプ製のベッドで、折り畳むことが可能な型だったが、その重さから容易ではなく、籐や竹製のベッドと同様に置いたまま使用されていた。藁製の厚さ10センチくらいのマットが乗っており、その上に各自が用意した布団を敷いて寝ていた。スチールパイプ製ベッドは休寮時まで使用された。

既報^{注10)}以外の寮室内の家具の配置例を図3-4～3-6に示す。

寮室にはすべて物入が敷設されている。物入は1955年頃、既に中段の右半分は切り取られたように改修されハンガーパイプがついており、丈の長いワンピースやコートが掛けられるようになっていた。物入の内部は主に年長者が自分用として使っていた。

部屋は原則として異学年によって構成され、部屋替えは一年に三回行われていた。室内の家具の配置は、ママと呼ばれる年長者が主導して決めており、3人部屋・2人部屋の時期になってからは、壁沿いにそれぞれのベッドと学習机を配し、自分の領域を確保した。ママは概ね箆筒によって入口

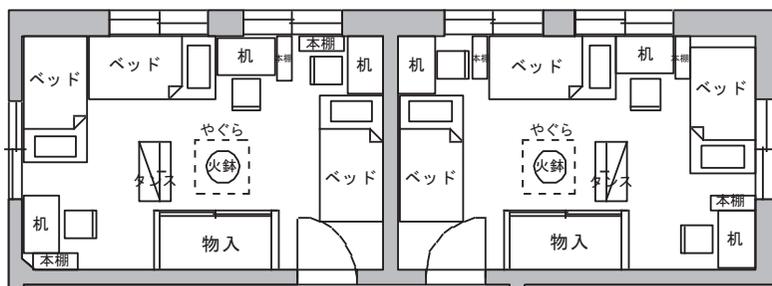


図3-4 1955年頃の北階段側の3人部屋例

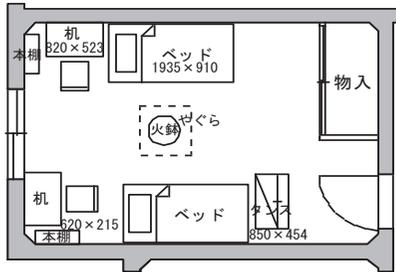


図 3-5 1955年頃の2人部屋例

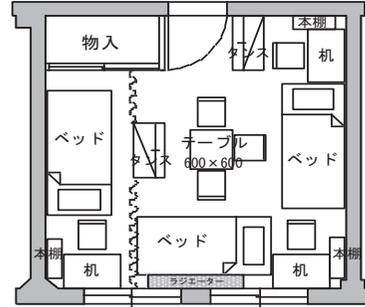


図 3-6 1960年以降の3人部屋例

ドアから見えにくい右奥を選んだ。1965年頃から簾筒の左右にもカーテンをするようになり、緩やかにプライバシーを確保した。ママがカーテンを閉めている時は下級生は静かにしなくてはと感じるなど、個人のプライバシー確保は難しい空間の中で、状況や気配により人との距離感を押し測っていた。

3-1-4. 寮舎の改修履歴

寮舎は竣工後、生活の変化に応じて必要な改修や、老朽化への対応とした修繕を行ってきた。明桂寮のこれまでの資料や調査からわかった改修履歴と生活の変遷を表3-2に示す。

設備工事の経緯や時期については不明な点が多いが、寮生が安全かつ快適に住み続けるために必要な改修工事がなされている。工事は春休みや夏休み期間に行われ、寮生活に影響が及ばないように配慮されたため、工事がされたことに気づかないで生活していた寮生も多い。また寮生は数年で入れ替わるため、以前の状態を語り継ぐこともあまりなく、記憶に残るものは少ない。

寮には当初、冷暖房がなく、冬は火鉢やこたつを使っていたが、1961年の温水暖房工事により、ラジエーターが居室や食堂に設置された。1971年の厨房設備の改修は、最も必要な工事のひとつだが、寮生は新しい設備への変更にはあまり関心がなかったようである。

1976年に窓改修工事が行われ、木製サッシがアルミサッシに取り替えられ、窓の上にあった庇や窓の棧が撤去され、外観の趣が変わってしまっている。

1980年以降は毎年のように改修が行われ、電化製品への対応や老朽化対策が行われている。1982年のアルミサッシに網戸が新設されたことにより、夏に窓を開けて風を入れられるようになった。各部屋での照明工事及び電源コンセント増設、食堂のテレビ端子や電源コンセント、ドライヤー室の鏡及び専用コンセント設置など、多くの電気工事などがその都度行われている。また冷蔵庫や洗濯機の出現は昭和初期には想定がなく、洗濯機のため給水、排水の長いホース、専用コンセントの増設がされ、瞬間湯沸かし器も設置された。

3-1-5. 周辺環境

寮地区内の明桂寮周辺には、寮生にとっていつも目にする建物や風景があった。図3-7に1955年頃の東側外観写真を示す。窓が改修される前の寮舎と東側の庭の状況である。

女子教育の場としての寮の在り方に関する研究

表 3-2 明桂寮の寮舎履歴・寮全体と明桂寮の生活の変遷

年	調査対象者の在寮期間	寮監・制度	明桂寮の寮舎	寮地区全体の寮舎・暮らし	明桂寮の生活・自治
1927 1929 1940 1941 1942 1943 1944 1945 1946 1947 1948 1949 1950		寮監制度 藤原千代 石村きく子	□明桂寮竣工 □明桂寮メタンガス装置を整備 ●寮生だけで交替で自治生活をする(紫峰寮・明桂寮) ●1940～50年まで寮費の徴集はなし (自治寮)	●燃料不足で各寮の風呂使用不可、銭湯利用 ●朝食は雑炊・すいとん、昼食はふかし芋、夕食は芋ご飯・豆ごはん 6:00起床、6:30掃除 □寮舎新築共同浴場竣工	・4人部屋 100人規模 ・寮監1名、寮監助手1～2名、手伝い4～2名 ・年間10数の行事を寮内で行う。 ・1950年頃 2～3人部屋 70人規模
1951 1952 1953 1954 1955 1956 1957 1958 1959 1960		細谷静枝	□明桂寮温水暖房工事(ラジエータ・配管工事)	●電話は門入口の守衛室に一台 ●寮費500～700円、食雑費4500円 ●入浴は全寮とも共同浴場を使用	・火鉢で暖をとっていた。 ・主婦は主婦室に寝具を運び、泊まった。 ・寮生は食事当番があり、お手伝いの人と一緒に下ごしらえから洗いもやった。 ・食事係(主に食物学科の寮生)が献立を作った。 ・行事に合わせた献立を作った。 ・食事は寮生一斉に行い、食前に賛美歌を歌った。 ・毎朝、寮監も一緒に掃除した。
1961 1962 1963 1964 1965 1966 1967 1968		風間愛	●寮費500～2000円、食雑費5000円 ●電話がピンク電話に代わり、脱水機も代わる	●主婦は主婦室に泊まらず、待機室として使用した。	
1969 1970		寮監制度廃止(自治寮となる)	◇内部配線改修 ◇暖房設備改修 ◇屋根防水工事 ◇高架水槽設置し、水量水圧を高める。紫峰寮よりの給水は廃止 □寮舎跡地にテニスコート2面新設 □明桂寮窓改修工事 ・シャワー室改修 ●鉄骨階段取替 暖房費2500円	●全寮合同で「入寮の集い」開催 ●購買会に栄養士を採用、各寮に献立と材料配布 ●寮費500～3000円、食雑費6000円 ●寮費:洋室13200～16000円 食雑費15300円	・(全寮)学寮委員会発足、主婦(係)の実態は受付係となる。 ・寮監ともにお手伝いの人も廃止へ。 ・栄養士が献立を立てる。住み込み、または通いの調理員が調理をする。 ・寮生による夕食の炊事当番はなくなる。 ・寮生は時間枠内に自由に食事をし、食器の片付けはお洗いの人がいた。 ・毎朝一斉掃除から週1回夜の一斉掃除と変化する。 ・共同浴場と寮内のシャワーと好きな方を選ぶようになる。
1971 1972 1973 1974 1975 1976 1977 1978 1979 1980		学寮連絡協議会設置	◇厨房機器増設に伴う給排水、ガス、床改修工事他、鉄骨階段取替 ◇アルミサッシ網戸新設、内部壁亀裂補修 ◇内部塗装・屋上物干鉄部塗装 ◇避難口誘導灯取付、寮室出入口建具補修、寮室内レジスター取付 ◇寮室塗装、シャワー室内装、学生玄関庇防水 ◇食堂Pタイル貼替、各室内照明改善 ◇応接室天井改修、非常階段塗装、厨房給湯設備改善、食堂照明設備改善、揚水ポンプ制御線改修 ◇厨房塗装工事 ◇東側外壁漏水補修(2階8室の窓回りより漏水) 地階通路塗装、1階図書室改修、シャワー室壁面張替え	●網戸新設により、夏に窓を開けて風を入れられるようになる。 ・寮生は時間枠内に自由に食事をし、自分の食器のみを洗う。 ・週1回夜の一斉掃除する。	
1981 1982 1983 1984 1985 1986 1987 1988 1989		学寮懇談会 日本女子大学寮生自治規約制定	◇天井新設、屋上選択物干し場新設、食堂・屋上鉄部塗装 ◇2階居室天井貼り、3階床貼替え、談話室カーテン取付 ●各寮、食堂にクーラー設置(明桂ではなし) ●寮費:24817～25500円 食雑費24600円、暖房費3200円(11～2月) ◇シャワー室配管改修工事	・ほとんど部屋が2人部屋、50人規模 ・住み込み調理員の部屋に学寮アドバイザーが週日か泊り、寮生の相談に乗った。 ・住み込み調理員は不在となり、通いの調理員が調理をする。 ・栄養士が献立をたてる。 ・寮生は時間枠内に自由に食事をし、自分の食器のみを洗う。 ■明桂寮閉館の集い開催	
1990 1991 1992 1993		学寮アドバイザー制度 明桂寮閉寮	・2003年 調理は業務委託 掃除当番あり		
2019		学寮アドバイザー不在	・リニューアルのための代替寮(民間) ・新体制の検討		
2020 2021			・寮生委員と学寮委員会(教員)で学寮のルールを検討して決定。 ・寮地区入口に警備員の配置と寮建物に管理人が住込み常駐。 ・調理、掃除等は業務委託 ●寮費再開 ●寮費年額1,056,000円(光熱水費込)		

□:日本女子大学学寮の100年略年表寮舎事項 ■:日本女子大学学寮の100年略年表主な事項
●:日本女子大学学寮の100年略年表住生活事項 ◇:日本女子大学 財務部施設課資料 ◆:成瀬記念館資料



図 3-7 1955年頃の東側外観（元寮生蔵）

（1） 共同浴場

明桂寮の東側の坂の下に共同浴場がある。1950年頃の和風寮内には浴室はあったが燃料不足により湯を沸かすのは困難で、沸かした湯でタオルを絞って身体を拭いていた^{注11)}。共同浴場は1950年に竣工し、移行期間を経て1959年に全寮生使用となった。1955年頃の明桂寮生は既に共同浴場を使っていたことが確認された。入浴時間は13:00～19:00は寮生、それ以降は寮監、と決められていた。浴場へはきれいな庭の横を通ったと記憶されている。

浴場はいつも混んでいたが、洗い場に蛇口はたくさんあり、入れ替わり譲り合って使用していた。1977年頃、明桂寮建物内に洗濯室の西端にシャワー室が2室設置され、順番待ちはあったが外に出ずに済み、日曜祝日や朝から使用することができ、時間枠内（15:00～21:00）で自由に入れる共同浴場と、都合に合わせて利用することができた。1989年頃には共同浴場を使う人は徐々に減少したようである。2023年現在、建物は現存している。

（2） 家庭管理実習家屋

明桂寮の東隣にある木造平屋建ての建物は、家庭科の教員免許取得に向けて実習を行う場所で、1962年に目白キャンパス内から移設された^{注12)}。教員志望の4年生が1週間合宿生活を行っていた。教職を目指す学生以外の寮生の多くには、何の建物か知られていなかった。2023年現在、建物は現存している。

（3） 庭園

明桂寮の東隣に造園家の龍居松之助設計の庭があり、かつて明桂寮庭園と呼ばれていた^{注13)}。龍居は本校国文学部において日本文化史の教授であった。庭は1927年の開寮時に作られ、その後も良く整備されていたと考えられる。1955年頃に「きれいな庭の横を歩いて共同浴場に行った」と言われているのは、この庭園のことだと思われる。この庭の西側に家庭管理実習家屋が建てられた。

3-1-6. まとめと考察

以上の調査の結果、明桂寮の寮生の生活の変化により、空間の使われ方も変化してきたことを確認することができた。

1) 部屋の使用目的の変化

- ・寮監室は、寮監制度廃止後は空室となり、後にドライヤー室として使用した。
- ・主婦室は主婦当番が交代で寝泊りした時期から待機のみ部屋となり、その後は住み込み調理員の部屋となり、1990年頃より学寮アドバイザーの宿泊・待機室となった。
- ・女中室は炊事の従事者の変化により、お手伝いの人の部屋から通いの調理員の休憩室となった。

2) 使用目的が明確でなく、経年により変化

- ・来客用玄関は年月を経て来訪者が減り、寮生用の西玄関もすぐ近くにあることから、玄関としての役割は殆どなくなり、普段は施錠するようになった。一方で、公衆電話の増設が必要となり、玄関に置かれ、電話室として使用されるようになった。
- ・食堂の小空間部分は、4人部屋100人規模の時代は食堂の一部として使われ、また貴賓をもたなす明桂寮の特徴的な場所だったが、催物の舞台として使われた後は特に使われず、置かれた家具類がそのままになった。
- ・図書室は、名称は引き継がれたが、寮生が室内の本を読むことはなく、自習や歓談、個人のくつろぎの場として使用された。

時代ごとの寮生の暮らしの変化に応じて、快適な生活を実現して行きながら、明桂寮という建築物を保持してきた。使う側の工夫と必要な改修工事を施すことにより、70年近くに渡り住み続けることが可能になったことが確認できた。建物は共用スペースである玄関、食堂、厨房、洗濯場、シャワー室などが1階と地下1階にまとまっており、それらの共用スペースの音が気になることはなく、寮室内においては静かで快適であった。また、頑丈な構造の中で共用空間はゆったりと広く、漆喰壁と板張りの床、同系色の建具や家具類で設えたモダンでお洒落な洋館に住むことを当初の寮生は誇らしく感じ、それに相応しくありたいと感じたことと思われ、明桂寮で過ごした寮生に与えた心理的影響は大きいと推測する。現在、寮舎は年月を経て古くはなっても、明るく落ち着いた内部空間は変わらず保たれており、今後の利活用の方法を模索していくことが望まれる。

3-2. 明桂寮での生活と自治の変遷

3-2-1. はじめに

1932(昭和7)年に紫峰寮と明桂寮で、寮生だけで交替で自治生活をする自治寮が組織された。寮監も女中もなく、自ら定めた規則に従って充実した生活を試みた^{注14)}。詳細は不明であるが、この本来の自治寮の姿は数年で解消し、他の寮と同様の仕組みとなったという経緯がある。それ以降の寮監制度下の寮生活、さらに寮監制度廃止以降、休寮間際の寮生活の実態から、学寮における自治のあり方はどういうものか、明桂寮の寮生活の自治の形成や生活の変化について明らかにする。

3-2-2. 研究方法

3-1と同様のヒアリング調査に加えて文献調査を行い、寮の自治に関する内容を照合した。参考とした主な資料は『明桂のしおり』と『めいけい』である。

『明桂のしおり(志お里)』は制作の経緯は不明であるが、1959年頃に寮生自治規約を基にできたとされる。生活のきまり、任務・仕事として寮生委員や主婦、当番の仕事、係として経済係や栄養係などの仕事の内容、お手伝いの人の役目、組織図、年間行事、届出の書類の書式、寮生活のエチ

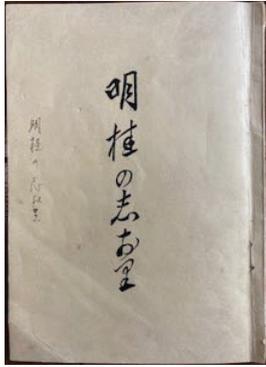


図3-8 『明桂のしおり』
の表紙（藪下蔵）

ケット、について書かれている。

『めいけい』は有志による寮内誌で、1号は1965（昭和40）年7月、2号は1965（昭和40）年12月、3号は1966（昭和41）年7月、5号は1967（昭和42）年2月に発行され、以降の発行のついては不明である。寮生の自己紹介、アンケート調査、日々の生活や行事の感想、係の仕事の紹介、詩や随筆、寮監の話、などが綴られている。図3-8に『明桂のしおり』の表紙、図3-9に『めいけい』の表紙を示す。

明桂寮の寮舎履歴・寮全体と明桂寮の生活の変遷を表3-3に示している。日本女子大学学寮の100年略年表や資料の抜粋を付記している。

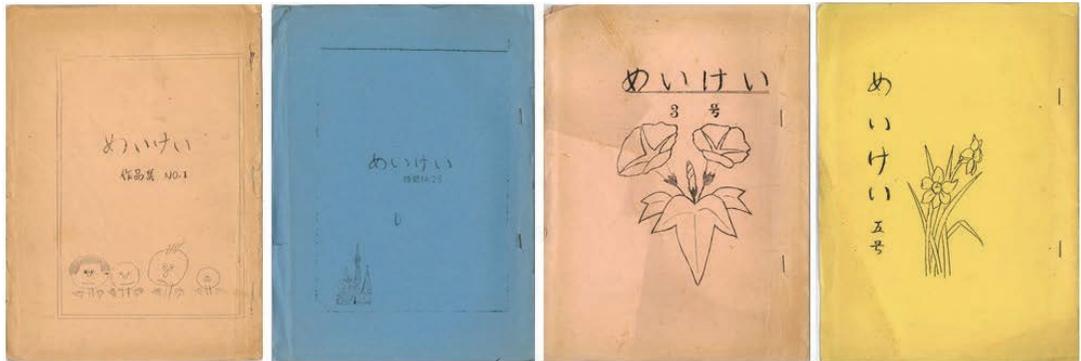


図3-9 『めいけい』の表紙（成瀬記念館蔵）

3-2-3. 寮生委員、主婦、当番、係

委員や係は開寮当初から、寮生の自己教育機関として設けられていた。1905（明治38）年頃には、係として主婦、趣味係、体育係、整理係、栄養係、交際係、園芸係、文芸係があり^{注15)}、1941年には主婦、趣味係、体育係、整理係、栄養係、経済係となり^{注16)}、1960年代頃とほぼ同じである。また、寮規の中に「寮生は長幼の差別なく凡て各自相当の家事を分担せしむべし」とあり^{注17)}、生活に必要な掃除や炊事の当番を設けていた。重要な役割は適任者や上級生から順に任務に就いたり、分担して割り当てるなど、その時々で必要に応じて適正に組織を変革してきたと推測する。

『明桂のしおり』に1959年頃の組織図が示されている（図3-10）。委員や当番、係はそれぞれ異なるローテーションで行われ、寮生委員と学年委員は退寮するまでが任期であった。主婦は2人ずつ週の前半と後半、炊事当番は2人ずつ、清掃当番は部屋単位で1週間交代、係は全員に割り振られて1年間、寮生全員が必ず当番や係の任務に就くこととされている。委員や係、当番の役割については、寮生は詳細に切り分けて記憶されていないようであるが、ヒアリング調査の対象者は『明桂のしおり』にある規則を引き継ぎ、変革、発展させて寮生活を行った世代であるため、これらの資料の記述に沿って内容を検証する。

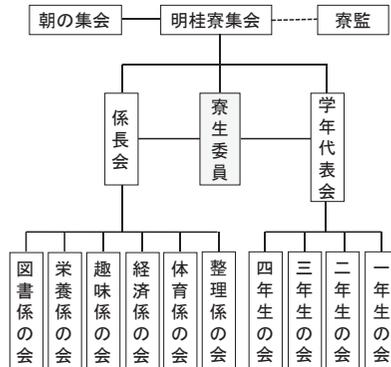


図3-10 組織図（『明桂のしおり』 p.17）

（1）寮生委員

『明桂のしおり』によると、寮生委員は「寮の自治活動を健全明朗に運営する義務を有する。」「明桂寮生集会に於いて選出され、任期及び任務は日本女子大学寮生自治規約に従う。」とある。

『めいけい』に寄稿したある寮生委員の文章からは、寮の規則や生活して感じたことの意見を出し合っ、時代にあった寮のあり方を常に考えていこうとする姿勢がわかる。寮監がいた時代であったが、明桂寮の代表として自分たちで寮生活を作っていく強い意志を持ち、発信していく力を感じられる。寮生委員に就いた寮生でなければその任務の大変さはわからずに、寮生活を送っていた。1981年頃は、寮生委員は選挙ではなく先輩の寮生委員から指名されて任務に就いたようであったため、その選出方法も仕事の内容も、広く知られていなかった。ヒアリング調査では、寮生委員の具体的な仕事内容は確認できていない。

（2）学年委員

学年委員は『明桂のしおり』には学年代表とあるが、1976年以降、学年委員は部屋替えのくじ引きを作る仕事があったことが確認できた。1981年頃の学年委員は係決めと同時のくじ引きで決められていた。学年委員は部屋替えのくじ引き作りのほか、月一回のミーティングを主催していた。1989年頃は、学年委員は上級生から指名され、複数人で担当することもできた。その後、他の係がなくなり、食雑費の集金の仕事も学年委員の仕事になっている。

（3）主婦

1905年では、主婦は係のひとつであり、「一寮の経済から献立の事を掌り、家族全体の仕事、即ち整理、衛生、体育、風儀、交際に至るまで総監する。」とある^{註15}。また『明桂のしおり』によると、1959（昭和34）年頃は「寮内の生活全般にわたって総括的立場にあって、常に寮監並みに寮生委員及び各係と連絡しつつ寮生活を円滑に推進する。」とある。

1955年頃は、主婦は係ではなく、独立した当番として寮生に回っている。任務の大変さから、係のように長期ではなく短期で公平に担当した方が良かったと推測する。主婦の仕事は来訪者の取り次ぎが主であったが、寮監を補佐し任務中は明桂寮内の責務を負う大事な役目であり、上級生からその任務に就いたともいわれる。主婦が2名ずつ交代で、1週間くらい（諸説ある）寝具や身のまわりのものを自分の部屋から主婦室に運び泊まっていた。起床時は、朝6時半になるとチリン

チリンとハンドベルを鳴らすおじさん（小遣いの方か）がおり、また寮生もハンドベルを鳴らす当番があり、寮地区の坂の上から下まで走って鳴らし起床時間を各寮に知らせていた。また明桂寮の中でも鳴らして歩いたとされ、その当番は主婦であった可能性がある。

1965年頃は、主婦室に寝泊まりせず、朝から消灯までの主婦の待機室であった。『めいけい』によると、主婦日誌があり、日々の出来事や感想が綴られている。1976年頃は、電話番と受付が主婦の主な仕事だった。応接間が主婦の待機室となり、部屋ごとに1週間単位で、朝の9時から、時間割のような表に部屋内で割り振り名前を入れていた。やりくりがつかない場合は代わりにやれる人を探すという形態になり、その後もその状況が続いていた。

（4）炊事当番・お洗い当番・メインテーブル

『明桂のしおり』によると、1959年頃は炊事を“お手伝いの人”に主にやってもらう以外は、備品の補充から凡その家事は寮生で分担されていた。日々欠かせない炊事と片付け、清掃を当番制にしてこなし、生活を充実させるための係を設けている。この頃の「炊事当番」とは、夕食の炊事のこととされており、独立した当番制となっている。寮生が2名ずつ、夕方4時半から夕食の下ごしらえをやっていた。栄養係を主に食物学科の学生が担い、寮ごとに集めた経費の中から寮監が食費として出した費用で献立を考えるというもので、寮監制度廃止までこの仕組みは続いた。炊事の主な担い手は住み込みのお手伝いの人2名で、朝食と昼食はその人たちに任せ、夕食のみ寮生2名が当番で野菜を切ったりする下ごしらえに加わった。食事関係の当番の中の「メインテーブル」は、『明桂のしおり』によると1959年頃は朝夕の食事の配膳から片付け、起床から消灯までの区切りの時間にチャイムを鳴らす、とある。全員の食事や日常生活が滞りなく運ぶように支える、主婦に次ぐ重要な当番である。

1976年頃は寮を統括していた栄養士が献立を考えていたと推測する。住み込み調理員1名の他に通いの調理員1名がいて食事を作り、寮生は調理に加わらなくなった。この頃の「メインテーブル」は、朝は「朝のお炊事」当番と共に早起きし、一緒にお味噌汁を大鍋から小鍋に分け、ごはんをお櫃に移して各テーブルに配置し、「食事の用意ができました」と寮内にアナウンス放送をする。夕食の準備も同様にお味噌汁の鍋の小分けやごはんをお櫃に移して配置し、アナウンス放送をする。夕食後は「夜のお洗い」の当番の人たちと共に片付けをし、夕食の時間（22：00くらいまで）の後に余ったごはんを焼きおにぎりを作りアナウンス放送をする、そこまでがメインテーブルの仕事であった。この頃は下ごしらえをする夕食の「お炊事」当番はなくなっていたため、「メインテーブル」が夕食の小鍋やお櫃の配置をするのが主な仕事であるが、大人数の寮での食事の支度に必要な役目であり、食事に関して一日監督するような仕事であった。「朝のお洗い」と「夜のお洗い」はアナウンス放送によりほぼ同時に食事をした人たちが食べ終えた食器を「お洗い」当番が洗い、洗った食器を入れた籠を乾燥機に入れるまでが仕事であった。夜の残りごはんで作るおにぎりは人気があり、焼きおにぎりのバターと醤油のいい匂いに釣られて寮生が集まってくる、といった光景は記憶に残り、休寮まであったようである。

1981年頃も住み込み調理員と通いの調理員と共に炊事を担っていたようであるが、当番の仕事だったのかは不明である。お洗いの当番はおらず、自分の使った食器は自分で洗っていた。1989年頃も同様に炊事、洗いの当番はないが、調理員の手伝いをした記憶があり、主婦が夜の残りごはんでおにぎりを作ったという記憶もある。

(5) 清掃当番

『明桂のしおり』には毎朝の清掃として、整理係が作成したとされる清掃箇所の円盤表の順序が掲載されている(表3-3)。清掃箇所は27に区分されており、寮室は27部屋あることから、部屋ごとに回っていたと推測できる。清掃箇所は寮内の共用部分が振り分けられている。この中にはメインテーブル、朝のお炊事、朝のお洗い、夜のお洗いが入っており、清掃ではなく食事関係の当番が含まれている。これらの当番は輪番制であり、円盤状の紙に部屋番号のものと分担場所のものとなり、真ん中を画鋏で留めて回転させて今週の当番を示している。

清掃は『明桂のしおり』には毎朝7時頃から行うとあるが、1976年頃には朝の清掃が怠りがちだったため、明桂寮内で検討され、夜の清掃となった。さらに1981年頃以降は週1日の一斉清掃と、気が付いた人がやる、という程度になっていった。

(6) 係

『明桂のしおり』によると、係には整理係、体育係、経済係、趣味係、栄養係、図書係がある。生活上不可欠な係(集金をする経済係、献立を考える栄養係など)と、寮生活を快適に豊かにするための係がある。前者は仕事内容も皆が知っていたが、後者は仕事内容があまりはつきりせず記憶に残っていないものが多く、ヒアリング調査からは確認できなかった。しかし、寮内の図書室には古典や世界的名作集など寄贈されたものも含め多数の本が残存し、貸出用シールのようなものも貼られている。またレコードもクラシックからジャズ、流行歌まで幅広い種類のものが山積みされ残されており、寮内で豊かな時間を過ごすために係がこれらを管理、運営していたと推測する。寮生活を整える行為は目立たず、また催物を誰が準備しているかも知らずに寮生は参加し、それが当たり前の日常生活となっていたと思われる。

1955年頃、栄養係は一週間の明桂寮の献立を作った。体育係はあった。整理係は人気がなかったそうである。1976年頃は、経済係は食雑費の集金をしていた。1981年頃は、係決めはあったが、自分の仕事以外はよくわからなかった。栄養係が来月の食事が要か不要かを○×で記入するカレンダーの表を作り、各自が記入したものを基に、経済係が食雑費を算出し集金をしていた。1989年頃は、それまであった係はなくなり、食雑費の集金は学年委員が担当した。

3-2-4. 寮生活を身近に支える人

寮生の日常生活を主に支えてきた人々には寮監、学寮アドバイザー、お手伝いの人、調理員などがある。その人々の役割や寮生との関わりの変化を確認する。その他には、小遣いの人、ボイラーを管理する人、守衛、栄養士、等のお世話になっていることが寮生に認識されているが、詳細については明らかになっていない。

表3-3 清掃の円盤表の順序
(明桂のしおり p.10より作成)

メインテーブル
本日休業
一階北廊下
三階手洗い・洗面所
食堂東ポーチ
一階南廊下・南玄関
表庭
本日休業
応接間・寮務室
地下室・地下廊下
二階北廊下
夜のお洗い
食堂西ポーチ
朝のお洗い
本玄関・北玄関
東庭
二階南廊下
二階手洗い・洗面所
朝のお炊事
本日休業
三階北廊下
夜のお洗い
図書室
朝のお洗い
三階南廊下
洗濯場
一階手洗い・洗面所

(1) 寮監

『女子教育』の中の「寄宿舎論」として「家族的寄宿舎」「装飾、礼儀作法、挨拶、言語に至る迄、悉く之を善良なる家族に模して実行せしむべし」とされ、各寮は「大体の寮規に従って、経済、炊事、整理等から寮風に至る迄全く各寮の自由とし、自律、自動の精神を具体化した」とある^{注18)}。寮監は成瀬仁蔵の寮の構想を実現するために厳選された教育者の中から就任した。また、各寮は寮監のもと独立採算制で運営され、経費の中からお手伝いの人も雇われていた。

明桂寮においては、1908（明治41）年に前身の和風寮が開寮したが、1927（昭和2）年に洋風寮が開寮してから4名の寮監が寮生活を支えている^{注19)}。藤原千代は1927年から1944（昭和19）年まで長期にわたり寮監を務め、成瀬の教えを崇拜し、自らの信念をもって指導したとされる^{注20)}。1933年頃の寮生は、藤原は掃除に厳しく、床の磨き方にうるさかったといわれた。1936年の卒業生の持ち物として黒塗りの文箱があり、蓋の裏に明桂寮の卒業記念として「ちよ子」の名と和歌が添えられており、藤原が送ったものではないかと推察する^{注21)}。任務を終えた後も、寮の行事の際は黒紋付を着て度々訪れたと記憶されている^{注22)}。1945年頃より、石村きく子が寮監を務めた。

1953年頃から細谷静枝が務めたが、通信教育の先生として忙しく、寮生には特に干渉せず、ミーティングでも口を出さなかったということである。

1957年頃より寮監制度廃止の1969年まで、風間愛が務めた。物理の先生だったことから、ヒューズを全部交換してくれたと記憶され^{注23)}、厳しいがとても親切で、新入寮生の通知のはがきに、歓迎のことばと用意する物の細やかな書き込みがあった。

明桂寮では大所帯だったため、寮監に加えて寮監助手が1、2名おり、2、3階の寮監室に住み、寮監を支えていた^{注4)}。寮監と個人的に親しくなった寮生もいたが、多くはそうではなかったようで、程よい緊張感があったと推測する。学生運動が盛んになり始めた頃は、寮監の方も寮生との接し方に苦慮したようである。求められる寮監の資質は、寮生の自主性を尊重し対等な関係性を作れる人であり、寮生を見守り続けていた。

(2) 学寮アドバイザー

1987年頃には住み込みの調理員はいなくなり、旧主婦室は数年間空室になった。1990年から学寮アドバイザー制度が始まり、学寮アドバイザーが週に1、2日宿泊して、寮生の相談事に応じるために旧主婦室に待機するようになった。寮生の心身の健康相談や生活面の指導にあたるという目的であった。ある学寮アドバイザーは、アドバイスするまでが私の役目だと述べている^{注24)}。学寮アドバイザーは、寮生からはどう接していいかわからない存在だったとも言われ、それは学寮アドバイザーからも同様だったと推測する。学寮アドバイザーが汚れが気になった廊下を掃除していると、見ていた寮生が掃除を始め寮全体がきれいになったことがあり^{注25)}、お互いに近づく努力をしていたことが窺える。

(3) お手伝いの人（女中）、調理員

1901年開校と同時に最初の寮舎が建築されたが、その時から「1名の寮監、20名の寮生、1名の女中から成る1家族を形成する」とあり^{注18)}、女中は寮の大事な一員であった。また、これら女中のために桜楓会が夜間学校を主催し、寮で働きながら通うことができたこととされる^{注26)}。1955年頃は住み込みのお手伝いの人2名いたが、寮生からもお互い積極的な交流はなかった。食事は寮生用に作ったものと同じ朝昼夕食3食を食べ、一階の便所や洗面所を使い、寮敷地内の共同浴場も使っ

ていたようである。

『明桂のしおり』によると、1959年頃は“お手伝いの人”の仕事が明記されている。「調理、台所の整理整頓、寮生不在時の仕事の代行」となっており、仕事を明確化し、寮の生活上不可欠な人員であると考えられている。

1965年頃、『めいけい』では各寮に「お手伝いさん」が1または2名いたとある。通いの調理員が毎日の食事の準備に台所で働いていた、少ない食材で工夫して食事を作ったという記述がある。1976年頃からは、住み込みの調理員がいたが、お手伝いの人と同じ立場かは不明である。

3-2-5. 寮生の生活

寮生の日常生活の実態を、生活時間や食事、行事など共同生活の決まりや自治などの点から確認する。

(1) 生活時間

『明桂のしおり』には、1959年以降の一日の生活時間が示されている(図3-11)。**【前期】**と**【後期、休祭日、日曜】**に分けて起床から消灯までの時間が示されて、当時は規則正しい生活がされていたことが窺える。

1955年頃の起床時間は6:30であった。外でベルが鳴り、寮内のチャイムが鳴る。掃除当番などをして、7:20から朝食をとり大学へ向かう。朝昼夕食は一斉の食事なので、特に朝は大勢での行動となり、慌ただしい。門限は19:00だったが届け出をすれば21:00まで延長できた。朝食と夕食の時間が決まっており、夜は自習時間が19:00~22:00と定められている。消灯は23:00に決められており、それ以後勉強したい人は図書室を使うことは許されたが、消灯は文字通り寮室の照明を消すきまりになっていた。

1976年頃は、門限は22:45であった。以降休寮時までその時間である。1981年頃は、起床時間は決められておらず、朝の清掃当番もなく、7:30~9:00に朝食をとれば良い、という幅のある時間のきまりであった。自習時間も特になく、各自のペースで過ごすことができた。統制された生活から、徐々に自主性に任された緩やかな決まりになってきたことがわかる。

(2) 食事

食事風景は寮監制度下と廃止以降で変化が見られる。寮監のいた1955年頃は、朝昼夕の食事が土、日曜日にも提供され、主婦の指示のもと寮監と共に一斉に食事をした。食前には讃美歌を歌い、食後は連絡事項の申し送りがあった。昼食は各自の時間で食べていた。自分の箸で食事をし、箸は自分で洗い、食器はお洗(当番)が洗った。食器は陶器だった。朝食はごはん、みそ汁、納豆、佃煮。昼食は残り物の納豆、みそ汁、パン、バターであった。夕食は豪華な献立で、寮生も夜のお炊事の当番があり、指示されたように野菜を切り、下ごしらえを手伝った、などと記憶されている。献立は食物学科の人が担う栄養係が考えていた。『めいけい』5号、1967年頃は経済係が集めた食雑費

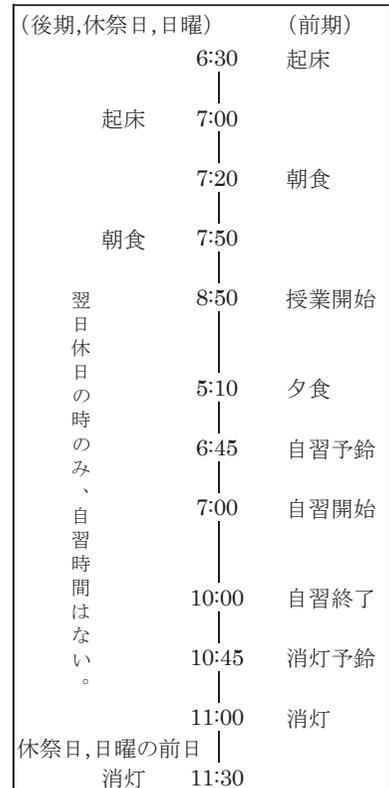


図3-11 一日の生活時間

の収支決算をしている、と書かれており、食費についても寮生が管理していたことがわかる。

1969年の寮監制度廃止以降は、全員による一斉の食事はなくなったと推察される。1976年頃以降は全寮統括している栄養士がいたため、献立は全寮同じであったと思われる、食費は3食で400円と安かったが、美味しいものを作っていた、という印象があったようである。平日と土曜日は朝昼夕の3食が提供され、日曜日は調理員の休養日のため朝食のみ、メインテーブル当番が用意した食材でゆで卵、ウインナーソーセージ炒めなどを簡単に調理し、菓子パンを食べていた。当時は炊事の当番はなかったが、朝と夜のお洗いの当番はあり、一斉に皆の食器を洗い籠に入れ、乾燥機に入れるまでがお洗い当番の仕事であった。

1987年頃、日曜日は食事が出なかったが、土曜日は食材が配られて自分で調理していた。食器はプラスチック製だった。1989年頃は、木曜の朝は納豆、昼は麺類、金曜の朝はパン食、昼はチャーハンなど味付けごはんはと決まっていたなど、献立の規則性があったようである。

(3) 行事

1940年頃は寮舎の年間行事として、新入生歓迎親睦会、開校記念日、母の日、2か月ごとの誕生日を祝う会など、十数の行事が挙げられている^{註27)}。また、『明桂のしおり』に1959年頃では、新入生歓迎会、母の日、寮生大会（いずみ祭）、ホームカミングデー、クリスマスパーティー、節分豆まき、卒業生送別会等が挙げられている。

1955年頃、新入生歓迎会として高尾山や砦公園におにぎりを持参して行った。クリスマス、ホームカミングデーは食物学科の人が中心に食事を作った、1964年頃は新入生歓迎会で全員での遠足、節分で豆まきをしたことなどが記憶されている。

1976年頃は、いずみ祭で提灯行列をやった、ホームカミングデーでフルーツポンチやサンドイッチを作った、ノリタケ製などの良い食器があったことが記憶されている。また避難訓練で、泉山寮の屋上からはしご車で降りてくる訓練をしたこともあった。この頃、廊下の押入から雛人形が発見されている。包装された新聞は昭和20年代のものであったことから、戦後に仕舞われてから発見されるまでの約30年間は存在を忘れられていた可能性がある。お雛様は卒業生の送別会まで飾られ、雛祭りは以降休寮まで継続されている。

1981年入寮式の日、食堂に1年生と部屋の年長者（ママ）が集まり、その後ママに連れられてこれから生活が始まる部屋に入った、先に送った荷物の段ボール箱や布団袋が自分の使うベッドの上に乗せられていて、ママが用意してくれた和菓子を一緒にいただいたとの記憶もある。母親も部屋に通してもらい、一緒にお茶をいただいた人もいる。

1982年は、いずみ祭で流行の歌のコーラスを食堂を舞台にして行った、夜は寮の敷地内で花火大会を行っている。1987年頃はいずみ祭はスポーツ大会として行い、1年生は参加するよう促された。1989年頃は新入生歓迎会、カラオケ大会、ホームカミングデー、クリスマス会、卒業生送別会を行い、卒業生にプレゼント贈呈をしたことなどが記憶されている。各行事は、中心となる係または上級生などから指名された人が、手伝いや協力者を募って企画を考え実施した。またその時の食べ物、調理員の手を借りずに寮生が料理していた。この時は特別な日として賑やかに楽しくご馳走やデザートを作った様子が窺える。

行事は寮監がいた時代は寮全員が熱心に取り組んだが、寮監が不在になる頃は学生の寮外の活動の幅も広がり、参加者を確保するのが難しくなり消滅する行事もでてきた。しかし卒業生送別会など一部の行事は大切に守られていたことがわかる。

(4) 部屋替え

部屋替えの様子は開寮時からの4人部屋時代は不明であるが、1955年頃の2、3人部屋時代以降は年3回、学期の終わりに部屋替えのくじ引きが行われ、適宜荷物移動をして次の学期に備えていた。4年生は部屋替えせず固定していた年もあったようだが、おおむね全員の部屋替えであり、年間を通じての一大イベントでもあった。

「部屋は原則として異学年によって構成され、部屋替えは1年に3回行う。」と『明桂のしおり』に明記されているとおり、異学年によって部屋を構成することで、自ずと立場を自覚し役割を果たすようになっていた。ママ、アンコ、スエッコという呼び名も、それぞれの役割をもって部屋単位を一家のように意識し円滑にまとめる作用があったと思われる、明桂寮運営の基本として長く受け継がれてきた。これほど頻繁に部屋替えをする寮は他になく、部屋替えに伴う引っ越しは面倒ではあったが、いろいろな人と同室になれるのは半分楽しみでもあり、また部屋替えがちょうどよい頃合いで行われ、人間関係の面においても良い潤滑油となっていたことは、寮生の多くが感じていたようである。

(5) トラブル

寮生活全体を通して、寮生以外の大人が関与するような大きなトラブルはなく、問題の解決は寮生の話し合いに任せられていた。掃除が徹底できなかった時には、1979年頃に、明桂寮の独自の話し合いで、掃除の時間を朝から夜に変更するように呼び掛けた。1976年頃は各寮室の鍵は閉めておらず、物が盗まれるという心配はなかったようである。当時、他の部屋を訪ねる時は2回ノック、自室に入る時は1回ノックするというルールがあった。

1982年頃に盗難事件があり、部屋に鍵をかけるようになったが、数年でまた施錠しない生活に戻っている。

盗難事件は1989年頃にもあり、その解決のために学寮アドバイザーが寮内のミーティングにも出席するようになり、一時的に宿泊もしている。寮全体の風紀が悪かったわけではなく、個人の問題として、学寮アドバイザーも寮生も落ち着いて経過を見守ったとのことである。そのような際にはアドバイザーが主導しトラブルの解決にあたったが、寮生の側にも、大学や学寮アドバイザーに頼らずに解決したいという強い思いがあったようである。他に不審者の侵入などのトラブルが何度かあったようであるが、詳細は不明で大事には至っていない。

(6) ミーティング

寮では寮生による話し合いで物事が決められ、定期的にミーティングが行われていた。月に1、2回、平日の夜に開催されている。部屋替えのくじ引き、集金や大学からのお知らせの通知が定期的に行われ、トラブル発生の際には臨時のミーティングも開かれた。他の議題については記憶に残るものはあまりなかったようである。ミーティングは寮生全員の顔が見える限られた機会であり、全員が積極的に参加した。

3-2-6. まとめと考察

1959年頃は『明桂のしおり』によると、家事は寮生で当番により分担し、係を設けて生活を充実させている。毎朝の伝達事項や毎月のミーティングにより、寮生全員が寮全体を理解し把握できるようになっていた。寮室内に象徴される学年の上下関係を家族的なあたたかさの中で学び、当番や

係の責任感を持ち、寮の一員としての意識を強く持って生活をするようになっていた。寮監の目が行き届く中、寮生が自分たちの力で寮生活を実現する過程を経験できたことは有意義であったと思われる。寮監がいた時代は、たくさんの行事が引き継がれてきたが、行事を通して寮生同士が協力し合うことを体験できた。そしてその一部は寮生の先輩から後輩へ引き継がれた。また、共同生活においては寮内の整理整頓、清掃は重要な仕事であることは寮監によって示唆された。まず各自が普通に自分のことを自分でできる大切さを知り、規律や責務は上級生が自分を律して下級生を指導する。寮監は後ろで見守る大きな存在である。そういった流れが寮生を心強く支えていた。1932年頃の自治寮では、生活のすべてを運営するには寮生の負担が大きく、寮監やお手伝いの人がいることで安定した生活が得られたと思われる。『明桂のしおり』については、ヒアリング調査からも冊子そのものを知る人はおらず、他の文献にも見当たらない。示されている決まり事はやや緻密すぎる面もあるが、円滑な運営のために必要なことの殆どが書かれており、時代と共にその都度必要な内容は選択され、変化をしつつ引き継がれており、『明桂のしおり』の影響力の大きさがわかる。

寮監制度廃止以降は仕組みが変わり、炊事が寮生の手から離れ、清掃も自主性に任され、それらに割かれていた時間は寮生のもとなった。寮生の手で自治を作れるかが問われる時期となったが、それまでに築いてきた寮の決まり事や上級生から伝えられてきた生活の形が確固としたものだったからこそ、少々失われていく部分があったとしても、寮生活の自治は維持継続してきたと考えられる。寮監が不在になってからも、すべてが寮生で運営されたわけではなく、食事を作る人をはじめ、多くの人に支えられて自治寮が成り立っている。寮生の意識には個人差があるが、自分たちの力で寮生活を穏やかに運営し、大人たちの手や知恵を借りずとも自治を形成してきたという自負があったと感じられる。自治寮であることをあまり意識していなかった寮生もあり、役割分担などの決まりごとが自然に機能している中で、おのずと各自の責任感が育っていたと思われる。

個人のプライバシーが重視され個室寮が主である現代では、明桂寮の暮らしのように相部屋はあまり好まれないが、背景の異なる他人との共同生活の経験から、他者への想像力や協調性、思いやる心などが養われたに違いない。学年や所属学科、出身地域の異なる人との密な交流から得られる経験は、現代ではむしろ得難い貴重なものである。寮生活で培われた力は、その後の生活に向けた良いトレーニングにもなり、就労の場や家庭においても十分発揮される原動力になっていったことがすべての調査対象者から伝わった。

またその力が育まれた背景には、明桂寮の建物や周辺寮地区の樹木や草花に囲まれた静かな物理的環境の要因も大きいことが確認できた。

謝辞

ヒアリング調査にご協力いただき、在寮当時の貴重な写真等の提供をいただきました元寮生の皆様に感謝申し上げます。

注釈

注1)『家庭週報』第933号(昭和3年4月20日)によると、創立25周年記念式と兼ねた総合大学豫科高等学部開校式、大典記念女性文化展覧会開校式に皇后陛下が御来校され、明桂寮の各階と屋上を御一覽されたとある。

注2)『家庭週報』第978号(昭和4年4月5日)によると、インドの詩人、思想家であるラビンドラナード・

タゴール氏が明桂寮で講演を行ったとある。

注3) 『家庭週報』第904号(昭和2年9月16日)によると、全部で24室、4人が起居する、とある。

注4) 参考文献2) p.183による。

注5) 参考文献2) p.185による。

注6) 『めいけい』は明桂寮内の寮内誌で1965年から1967年まで発行され現在は成瀬記念館に所蔵されている。

注7) 『明桂のしおり』は1959年ころできたとされ、生活のきまり、当番、係の仕事などについて書かれており、成瀬記念館および本学図書館に所蔵されている。

注8) 参考文献2) p.22による。

注9) 『家庭週報』第985号(昭和4年5月24日)では、米国人記者団を招き屋上で歓迎会を催した。英、仏、露、支、蘭など内外婦人も交じり100余名の盛会だったとある。

注10) 参考文献7) p.130、p.132による。

注11) 新2回生の元済美寮生の方の別途ヒアリング調査結果による。

注12) 参考文献3) p.157による。

注13) 参考文献5) p.67による。

注14) 参考文献1) p.436、437、438による。

注15) 参考文献1) p.427、428による。

注16) 参考文献1) p.455、456による。

注17) 参考文献1) p.457による。

注18) 参考文献1) p.426による。

注19) 参考文献2) p.189による。

注20) 参考文献3) p.267による。

注21) 参考文献8) p.086-1による。

注22) 参考文献2) p.133による。

注23) 参考文献9) p.214による。

注24) 参考文献2) p.170による。

注25) 参考文献2) p.50による。

注26) 参考文献1) p.458、459による。

注27) 参考文献1) p.453、454による。

参考文献

- 1) 中村政雄編『日本女子大学校四拾年史』(日本女子大学校、1941年)
- 2) 日本女子大学女子教育研究所編『日本女子大学寮の思い出—座談会を中心に—』(日本女子大学女子教育研究所、1994年)
- 3) 日本女子大学編『日本女子大学学園事典—創立100年の軌跡』(日本女子大学、2001年)
- 4) 日本女子大学学寮100年研究会編『女子高等教育における学寮—日本女子大学学寮の100年』(ドメス出版、2007年)
- 5) 関村啓太、葉袋奈美子「日本女子大学校における庭園とその教育の変遷」、日本都市計画学会『都市計画報告集』21巻1号、2022年6月、p.64-68
- 6) 鈴木賢次、水井七奈子「日本女子大学における佐藤功一設計の建築に関する考察—その3・明桂寮—」『日本女子大学紀要家政学部』第55号、2008年3月、p.125-134
- 7) 藪下美雪、関村啓太、藤井美羽、葉袋奈美子「1980年代初頭の家具と住生活—明桂寮における家具調査報告(2)—」『日本女子大学紀要家政学部』第70号、2023年3月、p.129-138
- 8) 小林孝子「考現学から見たる一家庭」日本女子大学家政学科卒業論文、1938年
- 9) 中野夏貴『佐藤功一による寮建築の研究—日本女子大学の明桂寮を対象として—』日本女子大学家政学部卒業論文、私家版、2015年

第4章 明桂寮のアーカイブおよび寮地区の家具

関村 啓太・薬袋奈美子・薮下 美雪・片山 伸也・磯田 大輔

4-1. 設計図書と建物

4-1-1. 明桂寮の設計図書

明桂寮に関する建築資料は、これまで行われた調査から、本学施設課と成瀬記念館に設計図書等が残されている。また、今後も成瀬記念館や施設課倉庫から、関係資料が発見される可能性がある。総合研究所研究課題「日本女子大学に於ける歴史的建造物の調査・研究」においては、2013（平成25）年6月時点の建築アーカイブを調査している。その結果、建設前後の明桂寮に関するアーカイブは、61点が確認出来ている^{注1)}。

上述のうち、本学成瀬記念館において、所蔵先整理番号が「研171～190」（表4-1）とされている20枚が、意匠図、構造図が過不足なくまとまった設計図書であり、内容が資料中最も整っているもので、佐藤功一事務所の作図になる。敷地配置図1枚、意匠図9枚、構造図10枚という構成となっている。この一群が1925（大正14）年12月の基本設計完了時の設計図書と考えることができる。なお、20枚目の「鉄骨階段」は、倒壊の危険から1979（昭和54）年に取り換えられている^{注2)}ので、現状とは大幅に異なるものである。これから、さらに複写や書き込みを加えたものが、所蔵先整理番号「成瀬記念館48～74」と考えられる。これらは上述の一群から複写したものと考えられ、平面

表4-1 研171～190の構成

表題	縮尺	内容	※
1 配置図	1/600	寮地区の建物配置図、既存建物坪数表	463
2 平面図	1/100	1階平面図、地階平面図	464
3 平面図	1/100	2階平面図、3階平面図	465
4 建図	1/100	立面図4面「北側正面図」「東側側面図」「南側側面図」「西側側面図」	466
5 断面、展開図	1/100 1/50	「横断面図」「縦断面図」「脱衣室展開」「洗濯場展開」「浴室展開図」	467
6 展開図	1/50	「正面玄関展開」「立面ホール図」「応接室展開」「各階居間展開」「各階洗面所展開」「各階便所展開」「西側玄関展開」（西側玄関展開には上部の階段断面図を含む。）	468
7 展開図	1/50	「食堂展開」「ヘランダ-展開」「厨房展開」	469
8 展開図	1/50	「階段室展開」「ホール展開」「北側玄関展開」	470
9 矩計図	1/20	「正面玄関詳細図」	471
10 詳細図	1/20	食堂、洗濯場の詳細	472
11 構造図 基礎	1/100	「基礎配筋図」、「基礎伏図」	473
12 構造図 基礎	1/200 1/20	「基礎梁之表」「基礎之表」「基礎梁配置図」	474
13 構造図 梁伏図1	1/100	「式階床梁配置図」（2階床伏図）、「壹階床梁配置図」（1階床伏図）	475
14 構造図 梁伏図2	1/100	「屋根梁配置図」（R階床伏図）、「参階床梁配置図」（3階床伏図）	476
15 構造図 床版	1/200 1/20	「柱配置図」「参屋根(ママ)床版配置図」「式階屋根床版配置図」「壹階屋根床版配置図」「S1配筋詳細図(1/20)」「床版之表」	477
16 構造図 壁体	1/200 1/100	「(a-a)壁体断面図配筋図」「(b-b)壁体断面図配筋図」「壁之表」「式・参階壁配置」「壹階壁配置」「地下室壁配置」	478
17 構造図 柱表	1/20	柱部材表	479
18 構造図 梁表	1/20	梁部材表。「壹階床梁壁梁断面表」「式階床梁壁梁断面表」「参階床梁壁梁断面表」「屋根床梁壁梁断面表」	480
19 構造図 架構	1/20	「柱①②③④架構詳細図」	481
20 構造図	1/20 1/50	「鉄骨非常階段図」「鉄筋混凝土階段配筋詳細図」	482

※「歴史的建造物資料リスト」（『日本女子大学総合研究所紀要』第16号）での整理番号

図などに重複があるので27点からなる。また、それらには部分的な相違があり、設計変更などと思われる書き込みも見られる。これらの資料は、およそA1判の規格となっており、現状では成瀬記念館にて、ポリエステルフィルムで養生されて保管されている。また、整理番号「成瀬記念館84～89」として保管されているものは6点あり、1点が透視図であり、5点がキッチンメーカーである「鈴木商行」が建築図とは別に作成したもので、当時のキッチンセットを具体的に知るうえで史料的な価値がある。

4-1-2. 竣工当時の内装

表4-2は上述の設計図書の特記から仕上げを抜き出したものである。ここからは、床面の水がかかる部分はコンクリートにモルタル塗りとなっており、現在の左官工事に近いものである。一方、居室の床は建築申請書の記載事項(表4-4)や、現状調査からベイマツである可能性が高く、耐久性を勘案して選んだものと考えられる。巾木の高さも5寸(15cm)もあり、通常よりも高い。居室の壁は、コンクリートの躯体に対して漆喰で調整を行い、仕上げの漆喰の上に塗料を塗ったものとみられる。また、図面上では居室の廊下側に床上換気口(片引き、幅1尺、高さ5寸)があり、窓側には換気口(現存)が2つある。これは、蒸し暑いと考えられていたコンクリート建築の居室の通風に考慮していたと考えることが出来る。しかし、現在は床上換気の痕跡が確認できないので、当初の理想形かもしれない。居室は、予算書、『家庭週報』(904号、昭和2年9月16日付)など各種資料から当初は4人部屋で計画されていたことがわかり、面積は、15×14.5尺で計画されたものが多く、当時の感覚では、「12畳敷、洋式板の間」(『家庭週報』904号)という認識であった。また、

表4-2 内装仕上表(設計図書(表4-1)より抜粋)

	室名	床	壁	天井	雑物
地下	洗濯場	「モルタル塗」「五寸下り」	「モルタル塗」	「モルタル塗」	
地下	燃料入				
地下	浴室	「五寸下り」	高さ5尺まで:「セメントタイル」 上部:「モルタル」	「モルタル」	「浴槽」「湯」「水」「洗面」
地下	脱衣室		モルタル塗	「白漆喰」	「スクリーン(別工事)」
1階	貯蔵室	「モルタル」			
1階	厨房	「モルタル」	「モルタル塗」 (木拵下地フキルト敷 メタルラス貼りモルタル仕上げ) 「色シツク仕上げ」 柱:「壁紙」、一部「壁紙貼り」、高さ8尺の ところに見切り		
1階	食堂	巾木	「色シツク仕上げ」、見切り		
1階	ベランダ				
1階	女中室	「タタミ敷」「横上り」			「押入」
1階	北側玄関				「下駄箱」×2
1階	廊下	巾木	5尺まで「水ベンキ」		
1階	ホール				
1階	便所	「巾木 タイル三段」	4.5尺まで「水ベンキ」		和式便器×5、洋式便器×1、「スクリーン」
1階	洗面所	「巾木 米松 ステイン」	4.5尺まで「水ベンキ」		
1階	居間(2室)	巾木高さ5寸	「中塗砂シツクキ 水ベンキ塗」 「見切■ステイン仕上げ」		換気孔径3寸×2、掃出×2(詳細図あり)
1階	寮監室				
1階	主婦室				
1階	応接		「壁紙」		「換気孔径3寸」×6 「下駄箱(別工事)」×2
1階	西側玄関	巾木			
1階	正面玄関ホール	巾木	「水ベンキ」 「ステンシル」		
1階	玄関	「暖石仕上げ」 縁「小口タイル」「ポーター五寸角タイル貼 り」 幅木「五寸角タイル」	「モルタル塗り水ベンキ仕上げ」 「小口型タイル」		(電灯)「ブラケット」
2階	居間(12室)	巾木高さ5寸	「中塗砂シツクキ 水ベンキ塗」 「見切■ステイン仕上げ」		換気孔径3寸×2、掃出×2(詳細図あり)
2階	廊下	巾木	「水ベンキ」 「ステンシル」		押入×2
2階	便所	「巾木 タイル三段」	4.5尺まで「水ベンキ」		和式便器4、スクリーン
2階	洗面所	「巾木 米松 ステイン」	4.5尺まで「水ベンキ」		流し
2階	寮監室				
3階	居間(12室)	巾木高さ5寸	「中塗砂シツクキ 水ベンキ塗」 「見切■ステイン仕上げ」		換気孔径3寸×2、掃出×2(詳細図あり)
3階	廊下		「水ベンキ」 「ステンシル」		押入×2
3階	便所	「巾木 タイル三段」	4.5尺まで「水ベンキ」		和式便器4、スクリーン
3階	洗面所	「巾木 米松 ステイン」	4.5尺まで「水ベンキ」		流し
3階	寮監室				
	階段室	巾木	「水ベンキ」 見切り「ステンシル」		1階部分サッシ「はめごころ窓 スダレガラス 銅骨」

実測を行った結果、居室の現状（2020年10月）は、図4-1のようになっている。特に押入れの中のコンクリートの打ち放し仕上げと居室の漆喰で仕上げた壁の厚みの差が14mmあることなど、入り口の枠などに改造があることが分かった。

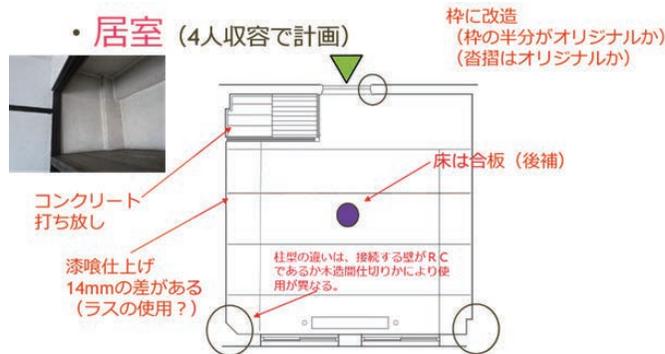


図4-1 居室内部の現状（2020年10月実測）

寮の中で、最も中心的であった食堂とベランダは各種の写真にみられるように装飾的である。壁は「色漆喰仕上げ」であり、八角形の柱は特に装飾的な壁紙が使われ、高さ8尺のところには見切りがあることが認められる。壁紙については、『家庭週報』第904号によれば、「ホールの壁紙の濃緑色の黒つぼいの」、食堂は「壁紙のくすんだピンクと淡黄色と灰色の模様」、「テレース風の大きな窓には、静かな黄色がかつたカーテンがかかっている」ようである。天井は、天井板を張らず、コンクリートに漆喰塗りであったと考えられる。佐藤功一の特徴的なデザインを示すところとしては、北側の玄関があげられる。建具の枠のまわりと「小口タイル」で玄関の淵、それに中央部をタイルで並べ、さらに巾木として「五寸角タイル」を使用している。これは、内部廊下の巾木の高さ五寸の巾木と対応している。なお、玄関は、1976（昭和51）年の開口部の取り換えで大きく意匠を損なっており、復原が望まれる。

次に、内部の特筆すべき点を挙げる。1階から地下に向かう個所に銅骨を用いたはめ殺し窓（図4-2「胴骨すだれガラス」の記載）がある。地階への採光窓であるが、細い銅骨に、細かな筋が入った型枠ガラスから構成されておりモダニズム的な要素が見られる。



図4-2 地階への階段に設置された嵌め殺し窓

1階トイレに取り付けられている手洗器(図4-3)には、”THE NAGOYA SEITOSHO LTD”と書かれたマークがあり、名古屋製陶所で製作されたものである。この会社は、1911(明治44)年に名古屋で開業し、1969(昭和44)年に解散(衛生陶器部門は1943(昭和18)年に廃止)した陶器メーカーであり、食器や衛生陶器で知られていた。特に、図4-3に示すロゴは、昭和の中期になると使用されていないもので、明桂寮開寮時のものである可能性が高い。一般に衛生陶器の残存は極めて低いものであるので、その点で貴重である。佐藤功一による明桂寮は、例えば予算書^{注3)}からわかるように衛生設備が充実していた。当時最新のラジエーターも設置されていたという証言もあるように、衛生設備によって、住環境の向上を図っているということが指摘できよう。

なお、その他の設備については、鈴木賢次・本学名誉教授が、2005(平成17)年に調査した時には、北玄関の天井に直付けで、屋内灯として図4-4に示すランプシェードが設置されており、現在は、取り外されて施設課で保管されている。



図4-3 名古屋製陶所の衛生陶器(左、全体像。右、ロゴ。)



図4-4 ランプシェード(本学施設課保管)

4-1-3. 竣工当時の外装

表4-1の設計図書より外装仕上げを取り出し、表4-3に整理をした。屋上スラブについては、設計図書によるとメタルラスなどを使用した防水層にセメント仕上げとしている。さらに、ベランダの上部、2階バルコニーなどの歩行部となる場合は、さらに一尺角(30cm)のセメントタイルを敷いており、これは古写真からも確認できる。外壁は、平滑なコンクリートに色付きのモルタルを使用しており、意匠を左右する当初の色彩の痕跡の発見が望まれる。腰壁や蛇腹は擬石の洗い出

して現在でも確認できる。居室の開口部は、上部に通風用の回転窓が設置されており、その下に引き違い窓がついていた。これらは木製建具であり、1976（昭和51）年に、現状のアルミサッシに変更された。この窓の上には、意匠的に特徴をなす庇がついていたが、開口部の取り換えに10cm程度の^{はっ}りが必要であり、この時に撤去されたと考えるのが合理的である。また、そのサッシ取り換えの痕跡は現地でははっきり確認できる。一方で、食堂開口部は建設当時の状態をよく保っている。

表4-3 外装仕上表（設計図書より）

外部仕上	軒蛇腹	「疑石仕上ゲ」	
	庇	「防水モルタル」「疑石仕上」	
	屋根	「メタルラス」「モルタル」	
	正面玄関・西側玄関上部	「防水層」「モルタル仕上」	
	ベランダー上部	「陸屋根」「防水層を施し「セメントタイル」一尺角敷」 「防水層 モルタル ラス下地」「セメントタイル敷」	
	水切	「水切鉄板」	
	外壁	「色付ケモルタル」	
	正面玄関外壁	「ギ石仕上」	
	西側玄関外壁	「疑石洗出シ」	
	腰壁	「疑石」「腰高サ2.0尺」	
	雑物	「換気孔直径3寸」	
	外構その他	玄関前ポーチ階段	「硬石小叩キ」
		北側玄関ポーチ	床「緑石擬石」「人造擬石」
通風口		「錬鉄製アミ貼り」	
外部階段		「手すり」「鉄」、床「コンクリート」	
塔屋		「塔屋二■■■■掛ケ金物ヲ附ス」	
雑物		「竪樋」(正面玄関右手)	

なお、4-2-2で説明する建築申請書による建築仕様は表4-4のようになっている。

表4-4 建築申請書による仕様（抜粋）

外壁	腰蛇腹：擬石洗出シ仕上ゲ、平壁：色付モルタル塗り
内部	壁、天井、各居室：漆喰仕上ゲ、床：米松椽子板張り
屋根	陸屋根 勾配：五拾分ノ一 屋根葺材料：防水層上セメントタイル敷キ
基礎	図面ニヨリ根切りヲナシ割栗石搦堅メ、鉄筋混凝土ノフーチングヲ置ク
軸組	柱、柱壁、梁間：鉄筋混凝土造
鉄筋工事	市街地建築物法施工(ママ)規則第八十九条第九十条各項第九十一条ニ依リ施工ス
混凝土工事	市街地建築物法施工(ママ)規則第八十八条各項第九十三条ニ依リ施工ス
床構造	一階：一部木造、他土間コンクリート叩キモルタル仕上ゲ、其他：各階鉄筋コンクリート造ノ上、米松椽子板張り
天井	スラブ下端：漆喰仕上ゲ
一階床高・天井高	居室ノ木造床高ハ総テ地盤面ヨリ壹尺五寸以上 居室ノ天井高ハ総テ八尺五寸以上
便所	「便所ハ水洗式トシ追願トス」
排水工事	図面通り土■■ニヨリ導キ各湯掛(コンクリート造厚五寸内部防水モルタル塗鑄鉄蓋付キ)ヲ経テ公共下水ニ放流ス
	電灯、瓦斯、水道ヲ設備ス

(注) 適宜、句読点などを挿入した。

4-1-4. 構造図

一般に鉄筋コンクリート建築においては、1947（昭和22）年に建設された都営高輪共同住宅までは、ラーメン構造で設計されていると考えられている。しかし、この構造図をみると、事実上の壁式構造あるいは柱型を出来るだけ見せない構造となっており、「柱図」においては、矩形ではない「柱」を幾種類も提示し、ラーメン構造に近似して構造設計をしていると考えられる。佐藤功一の設計した反町邸（1927年）の設計図書にも明柱寮と同じような図的表現があり、このような構法と

類似した構造だと考えられる。また、同年に作られた佐藤自邸は鎮ブロックが使われていた。これらは、新しい構造技術に対する彼の姿勢を示すものである。また、同時期には、壁式構造の内藤多伸邸（1926年）、柱型をほとんど見せない堀口捨巳の吉川邸、徳川邸（1930年）があり^{注4)}、これらと並んで壁式構造に向かう構造形式の萌芽的傾向を持っており、構造技術史的に重要であるといえる。

4-1-5. まとめ

以上、設計図書の仕様から、竣工当時の様子について検討してきた。鈴木真歩ほか^{注5)}によれば、廊下配置などの建築計画について、佐藤功一は各種の事例を援用しながら計画を行ってきたとするが、仕様や細部、あるいはこの特殊な構造には、佐藤功一に特有の建築設計に関する姿勢が強く表れているといえる。

4-2. 本学所在の明桂寮資料

4-2-1. 資料来歴

設計者である佐藤功一は1925（大正14）年4月に本学家政学部における「住居学」を担当する教授に就任した。当時の状況に鑑みると、その前後から本学に関わっており、大学令による大学昇格を見越した建築物の設計に関わったと考えられる^{注6)}。『家庭週報』（816号、大正14年11月30日付）には、麻生正蔵校長が「女子総合大学の開設に就て」という記事を載せており、総合大学の建築計画について発表している。そこでは、佐藤功一に大学の校舎を設計させ、大正14年度から「予科教場及び寮舎」を第1期工事として、「創立3年目」から「文理科大学の校舎」を2期工事として着手する予定であったことがわかり、総合的な大学の営繕計画の一部として明桂寮が計画されていた。上述の青焼きに書き込まれている日付は1925（大正14）年12月17日となっており、この段階をもって建築許可を取る手続きをしようとしている。佐藤功一が逝去後にまとめられた作品集である『佐藤功一博士』に掲載されている作品一覧^{注7)}の記述を見ると、1925（大正14）年9月に基本設計がまとまったと考えるのが穏当であろう。その後、明桂寮の建築資料は、本学に保存され、現在に至ったと考えられる。

4-2-2. 施設課所蔵資料

本学施設課にて、建築申請届、建築許可証、委任状、構造計算書、家具見積書、残工事一覧を関村と藪下が2020（令和2）年1月に発見した。これらは、本学施設課の管理する倉庫に保存されているもので、封筒の中にまとめて保管されている（図4-5）。建築許可証、委任状、建築申請届はこの順番で重ねられており、クリップで挟み込まれていた状態であった。これらは、茶封筒の中にまとめて保管されていた。家具見積書や残工事一覧に関しては「日本女子大学校」の印が押された長封筒に入れられていた。どちらも竣工当時のものがそのまま伝えられているものであると考えられる（図4-5）。

建築許可証（図4-6）からは、警視庁建築課より1927（昭和2）年2月12日付で建築許可を受けていることがわかる。「竣工届ヲナスノ外基礎及各階配筋ニ着手シタルトキハ届出検査ヲ受クヘシ」とあり、現在の間接検査に相当することが行われていたことがわかる。

委任状（図4-7）は、その前年の1926（大正15）年12月24日付で作成されており、日本女子大学校長である麻生正蔵が、佐藤功一に建築申請手続きに関する工事を委任することを証するもので



図 4-5 建築申請書等保存状況 (2020年1月)



図 4-6 建築許可証



図 4-7 委任状

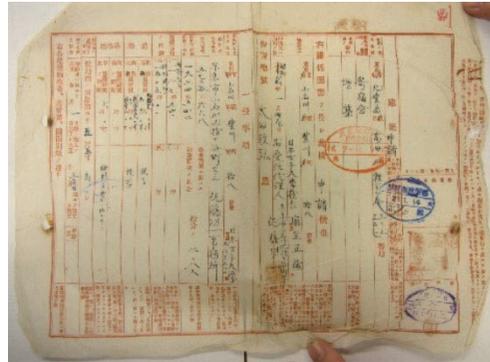


図 4-8 建築申請書

ある。

建築申請書 (図 4-8) は、年を跨いだ1927 (昭和2) 年1月12日付で作成され、高田警察署 (現在の目白警察署) が1月14日に受付したものの写しである。書類中には、「300日以内に竣工」するようにとあり、実際には、これよりも60日程度早く工事が終了している。

建築申請書は現在の建築確認書を簡略化したような構成となっている。この申請書に記載された仕様は上述した表 4-4 のとおりである。

4-2-3. 構造計算書

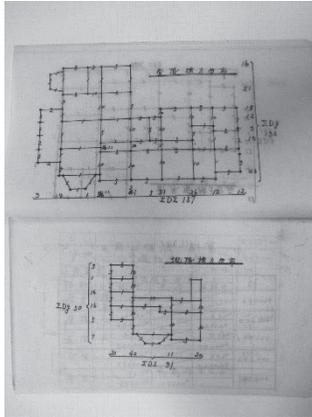
「日本女子大学寄宿舍増築工事構造計算書」は「大正一五年一二月^{アキ}日調製」とあり、用紙には佐藤功一事務所のクレジットがある。内容構成は表 4-5 の通りである。計算方法は、現在の計算方法につながるものであると言える。計算書の中に出現する単位について述べると、単位は長さについては、尺貫法を使用しており、荷重についてはポンドを使用している。応力度の単位は「#/□」と表記されているが、荷重についてはポンドを使用していると思われるので、lb/(尺)²を指すと見られる。

表 4-5 構造計算書の項目

壹. 一般条件	I. 荷重の仮定	1. 床荷重 2. 壁荷重
	II. 各材料許容応力	1. 混凝土応圧力度 2. 鉄筋、鉄骨応圧力度 3. 鉄筋、鉄骨応張力度 4. 鋼鈹応圧断力 5. 鋼鈹応剪断力 6. 鉄筋混凝土附着 7. 鉄筋混凝土剪断力 8. 弾性比
	III. 地震々度係数及風圧	1. 地震々度係数 (※1/10と設定している) 2. 風圧 (直圧面)
	IV. 地耐力及杭耐力	
	(図版)	貳、参階横力分布 壹階横力分布 地階横力分布
貳. 地震ノ計算	I. 建物ノ重サ及横力	1. 床荷重 2. 壁体荷重 3. 建物ノ重サ及横力
	II. 地震横力ニヲケル架構	1. 架構、配置並ニ横力分布係数 (別図ノ通り) 2. 架構ニ働ク単位剪力 3. 各架構ニ起ル剪力、曲能率 4. 横力ニ拠ル直圧
参 床版	I. 各階床版	1. 各床版、荷重及BM 2. 各床版、厚サ及鉄筋量 階段 (①「カンチレバートシテ計算」、②スラブ、計算)
四 床梁	I. 各階床梁曲能率	1. 壹階床梁 2. 貳階床 3. 参階床 4. 屋根梁
	II. 各階床梁断面	1. 壹階床梁断面 2. 貳階 3. 参階床梁断面 4. 屋根梁断面
	III 壁梁ノ荷重及曲能率	1. 壹階壁梁 2. 貳階壁梁 3. 参階壁梁 4. 屋根壁梁
	IV 各壁梁断面	1. 壹階床際 2. 貳階床際 3. 参階床際壁梁 4. 屋根床際壁梁
五 柱、計算	I. 柱、荷重	
	II. 柱、断面	
六 基礎	I. 柱荷重	
	II. 基礎面積	
	III 基礎々版、計算	1. 各礎版、荷重、曲能率、剪力 2. 各礎版ノ厚サ及鉄筋量
	IV 基礎繫梁	1. 繫梁ノ荷重及剪力、曲能率 2. 繫梁断面



構造計算書表紙



「横力分布」の図

階別	種別	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6
5F	耐力	452	138	228			
	自重		7800	7800			
	曲げモーメント	2240					
4F	耐力	312	424	370	361	422	312
	自重	18500	24700	18500	18500	24700	18500
	曲げモーメント	15200	20200	15200	15200	20200	15200
3F	耐力	2600	675	716	612	716	418
	自重	27700	44800	27700	27700	44800	27700
	曲げモーメント	9200	12300	9200	9200	12300	9200
2F	耐力	1520	299	330	299	330	1520
	自重	16300	21800	16300	16300	21800	16300
	曲げモーメント	7720	10100	7720	7720	10100	7720

階別	種別	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6
5F	耐力	2930					
	自重	21200	21200	21200	21200	21200	21200
	曲げモーメント	11000					
4F	耐力	2000	1120	1120	1120	1120	2000
	自重	22300	22300	22300	22300	22300	22300
	曲げモーメント	8100	10700	8100	8100	10700	8100
3F	耐力	1410	3700	2200	1420	2000	3720
	自重	12800	12800	12800	12800	12800	12800
	曲げモーメント	4100	5400	4100	4100	5400	4100
2F	耐力	710	3330	3330	3330	3330	710
	自重	11200	11200	11200	11200	11200	11200
	曲げモーメント	3600	4600	3600	3600	4600	3600

柱の構造算定

図 4-9 構造計算書（施設課所蔵）

4-2-4. 残工事報告書ほか

(1) 1927 (昭和 2) 年 9 月 30 日付で便箋 2 枚に手書きで残工事の内容を記したものと、(2) 施工者の清水組から施主である大学側へ引き渡すものが書かれている。(1) からは、1927 (昭和 2) 年 9 月の開寮を過ぎても、残工事が続いていたことが具体的にわかる。入居する寮監や寮生が職方と触れていたこととなり、「電灯屋さん、しきりに電気の傘の工合をなほしてゐます。そこらを大工さんのやうな人が忙しさうに行つたり来たりしてゐます。新学期から開寮になったのですが、まだ方々に手を入れるところが沢山あると見えます。」という『家庭週報』(第 904 号、昭和 2 年 9 月 16 日付 5 面)の記事と一致する。未完成工事として挙げられているのは、電気工事、衛生工事、塗装工事(「ペンキ」と表現)、左官工事などであり、電気工事は「東京電工■施工ノモノ」、衛生工事は「清水組施工ノモノ」とある。なお、当時牛込区山吹町 146 には東京電工社という電気設備設計および施工請負の会社があり、顧問が山本正興(早稲田大学電気電子学科教授、工学博士)であった。彼の家は「電気の家」として知られている住宅で、設計者は、あめりか屋主任技師であるといこの山本拙郎である。佐藤功一との関係でこの「東京電工社」である可能性を指摘しておくたい。

4-2-5. 家具見積

1927(昭和 2)年 8~9 月にかけて発行された家具の見積書が 4 通確認できた。うち一通には「藤原寮監決定ノモノ」とあり寮監である藤原千代が決定したことを示すものが含まれる。内容は洗面器台、帽子掛、衝立、食堂用椅子などであり、発行は「二葉屋小蘭江商店」^{注 8)}である。家具調査^{注 9)}で拾い上げた情報と照らし合わせて精査する必要がある。

4-2-6. その他

その他、施設課の所有する青焼き図面の中には、1 階平面図の青焼きに赤字と修正の薄紙(図 4-10)を張ったものがある。「地階ノ一部分設計変更/支障ナシト認ム/昭和式年六月三日/■■■方面」と書き込みがあり、南東のボイラー室の設計変更が、警視庁から認められたものである。竣工当時の写真もこの通りに施工されている。

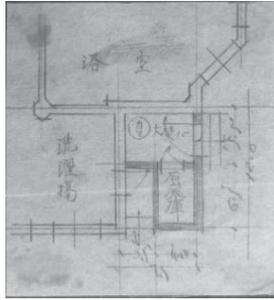
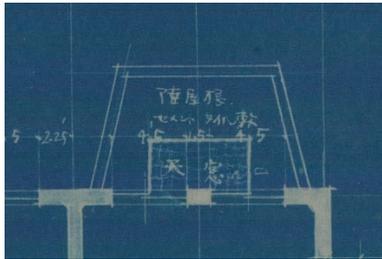


図 4-10 変更部分を示す薄紙 (ボイラー室部分)



2階平面図。「天窗」が書き加えられている。(成瀬記念館所蔵図面部分)



昭和3年の台所。上部に天窗らしきものがみられる。(成瀬記念館所蔵写真に改編)



現在の厨房。上部に天窗を塞いだ跡が確認できる。(2023年3月、関村撮影)

図 4-11 厨房の天窗

また、成瀬記念館所蔵の青焼きに、厨房上部を天窗にする設計変更が同様の形式でなされており、現状ではフラットスラブになっている厨房は、古写真からも天窗であったようで、現地を確認すると、それを塞いだあとがある (図 4-11)。厨房に対する採光や通風に関する環境を重視した設計変更であると言える。

4-2-7. まとめ

以上、アーカイブから読み取れる工事の経緯は表 4-6 の通りとなる。1925 (大正14) 年 9 月に

表 4-6 工事の経緯

1925年9月	基本設計完了か
1925年12月	構造計算書作成
1926年12月17日	実施設計図作成完了
1926年12月24日	麻生正蔵から佐藤功一への委任状発行
1927年1月12日	建築申請書作成
1927年1月14日	建築申請書受付 (高田署)
1927年2月12日	建築許可書交付
1927年6月3日	ボイラー室設計変更認可
	天窗の設計変更?
1927年9月1日	開寮
1927年9月30日	残工事報告書発行

基本設計が完了し、開寮を見たのは1927（昭和2）年9月である。建築生産の期間としては2年程度となり、建築の施工期間としては、240日程度である。これらの資料を精査することによって、昭和初期における同等の規模の鉄筋コンクリート建築の建築生産や法手続きの理解が進む資料と評価できる。

4-3. 3次元測量調査

4-3-1. 実施概要

本研究課題の一環として、明桂寮の現在の状態、すなわち平面や高さあるいは細部形状などの詳しい情報を得るために、3次元測量調査を行った。今回の調査では、内部が2021年12月1日、12月14日、外部と屋上が2022年2月24日、3月10日に、明桂寮内外の191スキャンか所から3D実測調査を行った。機材は、トライポッド型3Dレーザースキャナ FARO Focus S 350を用いた（実施：クモノス・コーポレーション株式会社）。このスキャンにより図4-12に示すような点群データとして明桂寮のスキャンデータが作成された。なお、什器等が大量の置かれていた居室や間仕切りが多いトイレなどでは、欠測箇所がいくらか見られる。現状（2023年7月時点）においては、その測量結果から、1/100の平面図等を作成するとどまっている（作図：合同会社3 dims）。実測データは薬袋研究室で保管している。活用にあたっては、適切なデータ管理と加工が必要である。データの活用としては、現時点では、建造物の把握、構造的な解析の基礎資料として使用することができる。また、将来的には、VRなど各種のプレゼンテーションや、建築保存を行う際、各種の検討に使用されることが期待できる。しかし、3次元測量調査は、形状の記録には優れているとされている一方で、素材や経年等の変化を記録することが難しいので、建造物を記録するいくつかの方法の中の一つとして位置づけ、従来の手実測など様々な調査手法と併せて検証できるようにする必要がある。

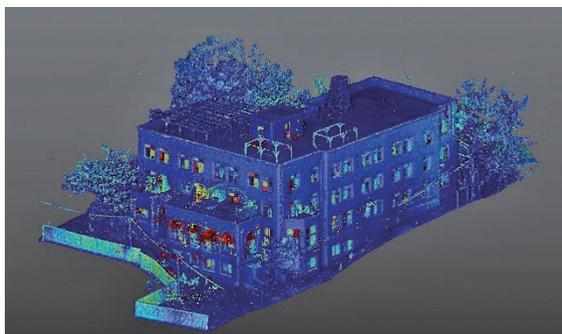


図4-12 明桂寮の点群データ

4-3-2. 作図の概要

明桂寮の設計図書は上述したように、1925（大正14）年に作成された青焼きとその複製があるのみで、さらに意匠図と構造図の別に表現されているため、仕上面の形状の全貌を把握するのが困難であった。したがって、今回の実測結果を踏まえ、欠測箇所を補うことによって、特殊な鉄筋コンクリート構造を理解することが期待できる。断面図においては、居室中央に断面を設定して作図した。これによって、廊下に断面線を設定し立面の表現を主眼とした佐藤功一事務所の断面図では理解が難しかった架構が可視化された。また、建物全体がねじれていることが図面上からおおよそ理

量に現存している。これらの家具類は、同じものを異なる業者から納入されたと推測されるので、基本寸法は同じでありながらも、貫の取り付け方や、金具が異なる等、細部で異なる部分が見受けられる。これは家具・什器の「同等品文化」と新井竜治氏が定義するもので、今日まで続く慣習となっており、多くの家具を発注するとき、均質な環境をつくるために、おおよその仕様・形状を指定することにより、均質な製品をつくるための工夫である^{注10)}。この点について、本学の家具も同様の傾向が確認された。しかし、一方で一点ものの家具もあり、特に棚の類で、なかには寄贈者名、利用者名と思われる名前が記されたものもみられる。戦後の量産品家具についても、すでに現存数は減っているものがあり、史料的な価値も出てきていると考えられる。特筆すべきものとして、株式会社コトブキがかつて生産したもので、そのアーカイブで確認できていないものもあった。また、明桂寮の古写真や文献においては、初期のころに使われていた籐製の椅子や折り畳みベッドがあったことが知られ、広範に使われていたようであるが、確認は出来なかった。

b) 梅花寮・紫峰寮・精華寮・新泉寮

梅花寮・紫峰寮・精華寮・新泉寮については、表4-8のような調査票を用いた。

表4-8 梅花寮・紫峰寮・精華寮・新泉寮における家具調査票

項目	内容		
品名	机1		
所在地・数量	梅花寮1Fボイラー室・1個		
製作者(所)			
寸法	基本寸法	H: 723	W: 813
単位: mm	椅子類	SH:	SW:
構造・機能	釘留め、ほぞ継ぎ		
材料	木材: 天板・幕板・幕板つなぎ・抽斗・抽斗受け棧摺り棧・脚・貫・トンボ貫		
塗装・仕上げ			
家具金物	取手(梅花モチーフ)		
歴史			
特記事項	<ul style="list-style-type: none"> ・明桂寮リスト desk10 と同じもの ・平机 ・下の縫う木に板が2枚打ち付けられている。天板の下にも前後に2枚打ち付けられている ・右引き出し上面「十三室 衣? 五十一」の文字 ・梅花モチーフの取手 		
写真			
 <p style="text-align: center;">パース</p>		 <p style="text-align: center;">側面</p>	
		 <p style="text-align: center;">取手</p>	
		 <p style="text-align: center;">引き出し書き込み</p>	
 <p style="text-align: center;">正面</p>		 <p style="text-align: center;">裏面</p>	

H:高さ, W:幅, D:奥行
SH:座面高さ, SW:座面幅, SD:座面奥行き

梅花寮、紫峰寮・精華寮・新泉寮の調査方法は手作業での実測を行い、写真撮影によって形態を記録した。また、この時、寸法を検証するために標尺を添えて撮影した。この調査においては、表4-9、4-10に示した家具のデータを収集した^{注11)}。

紫峰寮・精華寮・新泉寮は同じ建築物の中に入居しており、階ごとに独立しながら寮を営んでいた。これらの寮では、個室内のベッドや机は作り付けの造作となっているため、主として談話室周辺などのコモンスペースに家具が置かれていた。前身建物で用いられていたと思われる家具も各寮で置かれていた。

梅花寮においても、個室は作り付け家具であるため、椅子以外の家具はないが、各談話室には少しずつ異なる木製家具が配置されていた。

この調査においては、梅花寮の家具数は、41種類135個、紫峰寮・精華寮・新泉寮の家具数は、39種類86個であった。参考までに、これらの寮の置かれていた家具の数量を表4-8、4-9に示す。また、いずれの寮も大量生産品の家具と非大量生産品である昭和初期の木製家具が混在している。

表4-9 梅花寮の家具

種類	個数	品名（製造元）
イス	46	ソファ1(ホウトク)
	17	回転椅子1(コクヨ)
	11	ソファ2(ホウトク)
	4	ソファ4(ホウトク),パイプ椅子5(ホウトク)
	3	パイプ椅子1(ウチダ),パイプ椅子3(ホウトク)
	2	パイプ椅子2(ホウトク)
	1	スツール1(秋田木工),スツール2,ソファ3(ホウトク),パイプ椅子4(コトブキ),パイプ椅子6(ホウトク)
テーブル	17	テーブル2(ホウトク)
	16	テーブル1(ホウトク)
	2	机1
棚	1	テーブルワゴン1(ヨシムラ),机2,机3,文台1
	4	ラック1
棚	2	飾り棚2,書棚9
	1	書棚1,2,3,4,5,6,7,8,10,11,12,13,13,14,15,飾り棚1,地図ケース1
鏡	7	鏡1
	1	鏡2
合計	135	41(種)

表4-10 紫峰寮・精華寮・新泉寮

種類	個数	品名（製造元）
イス	4	ソファA
	2	パイプ椅子A(コトブキ)
	1	スツールA
テーブル	9	机B
	3	机A,C,テーブルB
	2	テーブルE(DECOLA),テーブルF
	1	テーブルA,C,D,机D,書記机A,脇机A,花台A,B
棚	60	書棚C
	2	靴箱B
	1	レコードケースA,B,C,D,靴箱A,C,棚A,B,書棚A,B,D,E,F,G,H,書類棚A,食器棚A
鏡	1	鏡A,B,C
合計	86	39(種)

4-4-2. 寮地区に残されている家具の特質

以上より、上記5つの寮の家具を総合して考えると、下記のことが指摘できる。寮地区の複数の寮において、家具が必要によって移動されていることが、家具の名札などからわかる。明桂寮においては、特に残された家具が多く、年代が追える可能性があり、学部紀要^{注9)}に示したように、寮内の学習机、筆筒、ガラス棚、長机には、1920年代の本学における「同等品文化」が示唆される。例えば、明桂寮と隣接した泉山寮（1924年建設、1973年取り壊し）では共通した家具が使われていたことが、『家庭週報』などからわかる^{注9)}。このような事例から、本学のいくつかの寮で共通した規格が存在したという可能性が考えられ、当時の家具の生産と消費について示唆が与えられるものである。そして、明桂寮におけるクロノロジカルに存在する古写真を根拠にすると、学習机、筆筒、ガラス棚、長机などは、1927（昭和2）年の開寮時から使われていた家具である可能性が大きい。そして、これらは大正期の生活改善運動と関係のあるものであることが推測できる。また、戦後の家具についても寮内の生活を知る一端とすることができる点で、その使用方法や配置についても、

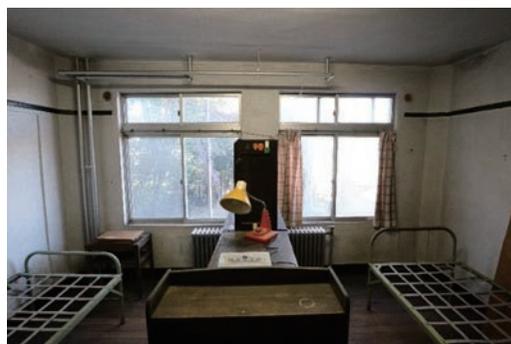
記録することが望まれる。

4-4-3. 居室の復原配置

上述のような視点から、実際に残る家具を使用し、実際に1980年代に居住していた著者である薮下の指導^{注12)}のもと、3階居室において、3人部屋の使用状況を、実体験として考察するために家具を配置し復原を行った(図4-13)。その結果、従来から聞き取り調査などで得られていた結果と合致する家具配置が可能であることがわかり、12畳ほどの限られた空間でいねいな暮らしを行っていたということを確認することができた。また、今後のヒアリングの回想を促し、寮生活の実態、さらには寮の生活史を可視化する点で非常に有益な試みとなっている。



a) 3人部屋の例 (1970~80年代) 3階



b) 2人部屋の例 (1990年代) 1階

図4-13 寮内の家具を用いた復原居室

4-4-4. まとめ

今回の調査で見出されたものは、あまりに日常的に使用するもので、その意義や価値などについて深く考えることは少ない。また、一般的に消費財ととらえられることも多く、一般的な家具は放棄されることが多い。しかし、寮制度によって、長らく家具が人から人に伝えられて使われていくということに、寮の特徴の一端が垣間見られる。また、寮地区のような一つの場所に各年代の多様な家具や什器が遺されていることは、家具史や生活史を知る上で貴重である。大学の保有する財産として、適切な管理を行い持続可能な社会に向けて、家具の利活用などを考える時代が到来しているのではないだろうか。

注釈

注1) 鈴木賢次ほか「日本女子大学における歴史的建造物の調査・研究」(総合研究所研究課題46)『日本女子大学総合研究所紀要』第16号、2013年11月、pp.1-107

注2) 成瀬記念館所蔵資料の中に、1979年に取り換えた際の図面や見積が残っている。(片山伸也「データベース資料の概要」『日本女子大学総合研究所紀要』第16号、2013年、p.33も参照)

注3) 本学成瀬記念館所蔵資料 D2147

注4) 藤岡洋保「日本の建築家が鉄筋コンクリート造に見た可能性一形と技術のインターラクシオン」『材料・生産の近代』(シリーズ都市・建築・近代9)所収、2005年、pp.17-68

注5) 鈴木真歩、早川静、関村啓太、葉袋奈美子「建築家・佐藤功一による学生寮の建築技術に関する研究：住み継ぎに求められる長寿命性の検証」『住総研研究論文集・実践研究報告集』第47号、2021年、p.27

- 注6) 関村啓太、葉袋奈美子「日本女子大学校における佐藤功一のキャンパス計画」日本建築学会大会学術講演梗概集・建築デザイン発表梗概集』(F-1分冊)、2021年、pp.705-706
- 注7) 佐藤功一を顕彰した『佐藤功一博士』(田辺泰、猪野勇一編、彰国社、1953年)の作品一覧の1925(大正14)年の項に「日本女子大学寄宿舎(9月)東京都文京区高田豊川町、鉄筋コンクリート造、3階建、延坪388.08坪。」(p.66)とあり、面積と階数が一致しているので、これが明桂寮などの計画を示していると考えられる。
- 注8) この業者の住所は、本郷区湯島一丁目三番地(神田明神坂)となっており、販売品目は洋式家具、室内装飾、敷物請負であるとしている。なお、『東京市商工年鑑』(昭和8年版)には、「二葉屋小藺江勝之進商店」とあり、湯島四ノ二二(渡辺女学校正門前)に移転しているようである。
- 注9) 本稿4-4および藤井美羽、関村啓太、薮下美雪、葉袋奈美子「日本女子大学の寮地区に残されている家具について—明桂寮における家具調査報告(1)」『日本女子大学紀要(家政学部)』第70号、2022年3月、pp.121-128など参照のこと
- 注10) 新井竜治、三島美佐子、吉田茂二郎「九州大学歴史的木製家具コレクションにみる同等品文化」『デザイン学研究』第65号、2018年3月、pp.40-41
- 注11) 詳細は、下記を参照のこと。石井優希「日本女子大学の学寮における家具・什器一覧化と考察—梅花寮、紫峰寮・精華寮・新泉寮を対象として」(本学家政学部住居学科卒業論文)、2023年、私家版
- 注12) 当時の住生活の実態は下記を参照のこと。薮下美雪、関村啓太、藤井美羽、葉袋奈美子「1980年代初頭の家具と住生活—明桂寮家具調査報告(2)」『日本女子大学紀要(家政学部)』第70号、2023年3月、pp.131-140

(謝辞) 調査にあたっては、資料閲覧については、本学成瀬記念館、同施設課、三次元点群測量について、クモノスコポーレーション株式会社、実測図作図について、合同会社3 dimsに多大なるご尽力をいただいたことを付記する。また、寮内の家具什器並びに清掃にあたった学生諸氏にも感謝を申し上げます。

第5章 これからの日本女子大学寮の検討

葉袋奈美子・宮崎あかね・関村 啓太

5-1. 学生の学びの場としての展開：社会が今求めているもの

大学での学びには、専門的な知識の習得と同時に、各専門分野からの社会の出来事を捉える考え方を学ぶという面が大事であることは、中央教育審議会も語っている。「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」（平成30年 中央教育審議会）では、2040年の教育に求められる時代背景には以下の3点があると示している。①テクノロジーが急速かつ継続的に変化しており、これを使いこなすためには、一回修得すれば終わりというのではなく、変化への適応力が必要になること、②社会は個人間の相互依存を深めつつ、より複雑化・個別化していることから、自らとは異なる文化等を持った他者との接触が増大すること、③グローバリズムは新しい形の相互依存を創出しており、人間の行動は、個人の属する地域や国をはるかに越え、例えば経済競争や環境問題に左右されることがあるとされている。」

特に2点目の自らとは異なる文化等を持った他者との接触することが増えることに対する教育に求められることの一つは寮で解決しやすいのではないだろうか。家庭ごとに異なる考え方、生活スタイルで過ごしてきた学生にとって、新たな生活感との出会いの場が寮である。比較的若いうちに、異なる人との暮らしを経験することは、価値観の多様性を体で理解することに繋がる。こういった機会は、寮以外でも当然培われる場面はあろうが、特に寮生活では、他者との接点が多いため、多様性を受け入れられるコンピテンシーの形成に繋がる。

こういった動きを意識しているのか、従来の学生寮、あるいは社員寮といった場とは異なる共同の居住空間への関心が高まっている。例えば、シェアハウスもその一つである。西欧諸国で戸建て住宅を共同で借りるシェアハウスとは全く異なる、独立した居住空間を持たない集合住宅が提供され、シェアハウスと呼ばれている。家賃が安くなることも多いが、それ以上に共通の趣味・関心事を持つ仲間との豊かな暮らし、異業種交流を兼ねた人の繋がり、更に東日本大震災以降はコミュニティの中にある安心感を求めて入居する人もいる。居住する空間に付加価値を求めた形としての共同居住である。

「月島荘」は、乾汽船が運営する、異なる企業の社員が共に暮らす寮である。企業が申し込みをして借りることのできる寮で、各社50名までの制約がある。異業種交流を兼ねることを目的としていることから豊かなコモン空間があり、共に食事をつくり食べられるキッチン、研修の行える会議室のほか、スタディ空間、映画等も上映できるオーディオルーム、共同浴室等も用意されている（図5-1）。「矜持、自主、挨拶」という理念を掲げ、入居する人が守る考え方を共有している。居室部分は35室が1ユニットとなり、キッチンが用意されている。社員研修を兼ねる場として関心が高い。自分を高める場として積極的に入居する社員のいる会社もあるという。このような空間を提供した会社ばかりでなく、多くの会社が社員が生活を通して高めることを奨励し、また社員自身もその意義を感じていることにより、需要のある寮である。

固定したキャンパスを持たないことで知られるミネルヴァ大学も、寮の意味を重視している。授業はすべてオンラインで行われるにも関わらず、全寮制で、4年間の間に7都市を移動しながら学ぶ。様々な都市空間に身を置きながら、同じ仲間と4年間生活をする。それは対面での交流と創発の機



ラウンジ (左)



中庭 (右)

図5-1 月島荘のコモンスペース

会を創り出そうとしているものであり、授業と同時に様々な都市での寮生活自体に学びの重要性があると考えている。

世界的なトップ校であるオックスフォード大学やケンブリッジ大学では、カレッジと呼ばれる寮を核とした組織体に所属することで大学への入学が可能となる教育を行っていることは知られているが、知識を得る授業や実験等も行う研究とは別に、社会の見方・考え方を共有する場を交流を通して身に着ける場としての寮空間を大切にしている。本学の伝統ある協定校であるウェルズリー・カレッジでも寮生活が重視されているが、やはり生活をともにすることで学ぶことが多いと考えているのだろう。

このように世界的には、社会のリーダーを育てる、社会にイノベーションを起こすことのできる人を育てるために寮が活用されている。120年前、或いはそれ以前の大学キャンパスとは、実社会とは切り離された空間・思索を可能とする場として、寮を教育の場として尊重してきた。今それは、新たなステージに入りながらも、生活を通して学ぶ場であることは折に触れ、確認が必要である。

5-2. 総合大学としての女子教育の場として リビングラボラトリとして

本学は女子のみの教育を行い、寮を教育の場として重視してきたが、家政学部を開学当初から設けているように、生活を改善するための研究・教育を行うためにも寮生活は重視されてきた。近年、キャンパス計画では、大学キャンパスを社会の縮図のように捉え、そのキャンパス内で実社会を模した実験を行うようなことを、リビングラボラトリとして積極的にキャンパス計画の中で展開してきた。

また、コロナ禍を経てキャンパスという空間で、共に学ぶことによる学びあいの重要性が認識された。学生同士が声を掛け合ったり、周りの人が行ったり作業を垣間見ることで、どのように自らが勉強すべきなのかを身に付けて行く、刺激しあっていくのであることに気が付いた。2020年度に対面授業がほとんどなかったことにより、特に住居学科一年生は、製図の力のつけ方が、従来の学年とは異なった。2年生で対面授業が開始したことで、短期間でそれは補われたが、学びあうことの重要性を認識した。空間の存在効用と言えよう。

世界には様々なキャンパスがあるが、カリフォルニア大学バークレー校は優秀な人材を育てることでも知られる大学であるが、そのキャンパスの中で印象的なのは屋外に座る空間が多いことだ。他の友達と出会う機会を増やすような通り沿いに置かれている。また、BBQ コーナーで学年を超えた繋がりを生む食事が定期的に行われる等、人の出会いが多い (図5-2)。更に、互いの作業の様



友達の作業が外から見える建物（左）と庇の下に広場を向いておかれたベンチ（右）

図5-2 カリフォルニア大学 バークレー校のキャンパス

子を垣間見られる空間構成でもある。

5-3. 日本女子大学の歴史を引き継ぐ場として

(1) 建物活用の提案

日本女子大学の教育の象徴の一つとしての寮であったものが、今は全学生のうち特に希望する約百名のみの利用する小さな規模の教育の場となってしまっている。そのために休寮中の建物が3棟ある。これらの建物について、そのつくりのモデルを作成して整理を行ったものが図5-3である。

梅花寮は、食堂等のコモンがある空間と居室のある空間が2棟に分かれていて、スキップフロアのように階段を介して繋がっている。居室等には階段のある中央部付近をコモン空間が用意されている。コモンと居室とが明快に分かれていることで、空間の使い分けがしやすい構造である。一方で、バリアフリーの観点からは、エレベーターの設置・利用が容易ではなく、現代社会での公共的な利用のためには、特別な工夫が必要となる。

明桂寮は斜面地を生かした南側に明るい地下室のある建物で、地下及び1階がコモンとして利用されてきた。1階は来客用玄関のほかに学生用の玄関が2か所、更に食堂へも屋外から直接入ることができるようになっており、多様なアクセスを可能とするつくりである。エレベーターの設置は、建物の端部に設置する等することで、地下から屋上までをバリアフリーにすることが可能である。明桂寮は戦前の建築物で、法的な解釈が難しい建築物である。しかし、外階段などの活用による避難経路の確保、登録有形文化財制度の利用や「その他条例」の制定の働きかけにより、ライトに保存活用が出来る道を用意することが可能になるのではないだろうか。なお、当該建物は屋上に物干し場等が設けられており、かつては来賓にお茶を提供したり、瞑想会を行ったりするなど、生活空間として活用されてきた。

紫峰・精華・新泉寮は、地下にボイラー室を持つ他は、3層が同じような空間構成となっている。南向きの居室空間と東西方向に開口部を持つコモン空間から構成されていたが、途中増築を行い、東向きの部屋が設けられ、1フロア（1寮）の人数が途中で増えた経緯のある建物だ。特に増築部分の居室の日照・通風に難がある建物である。その部分を減築すれば、居室は全室南向きで、片廊下型のつくりであるため、快適な居住空間が構成されよう。

古い建物の利活用による、コミュニティ形成の場の成功例は数多くある。例えば、『旧山口萬吉

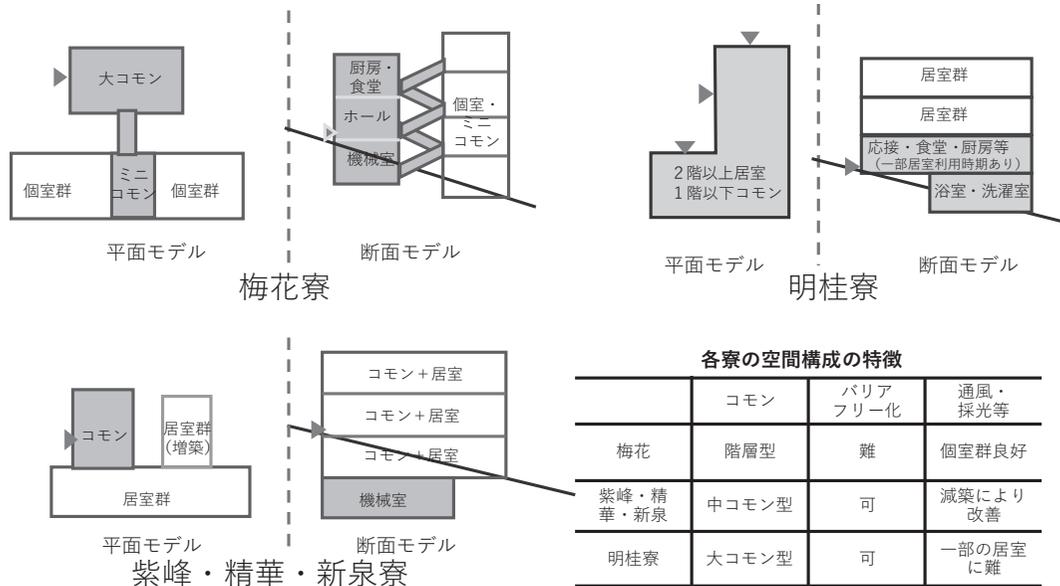


図5-3 寮舎の形態モデル

邸』をリノベーションした「九段ハウス」は、歴史的な空間を活用した会員性のクラブハウスで、空間の質の高さから、高価格帯の会員性の空間を提供できている。空間の質を徹底的に生かすことを目指すことで、実現できた運営組織である。

自由学園明日館は、フランク・ロイド・ライトが設計した木造建築物であるが、学園の教育の場の移転に伴い廃墟となっていた。しかし卒業生の建物に対する愛着が大きな原動力となり、住宅地内にあることによる用途の制約がある中でも、池袋に近いという立地を活かして、貸会議室・貸スペースとして利用できる場にリノベーションされた。豊島区の指定文化財となることで、リノベーションに対する社会の応援と経済的支援を受けられたことも功を奏した。学校であったことから社会教育の場として、また新たな愛着を生む機会となっている結婚式場としての利用、更には収入を得る機会となっているロケ使用とが主な現在の用途である。結婚式場としての利用は、人生の中の重要な行事で使うことで、愛着の形成に繋がり、子どもを連れて思い出の場に戻ってくる人も多いという。結婚式場として利用するにあたっては、食事場所としての利用も意識された。このような利用方法は木造の建物にとって負担が大きいことは理解しているものの、使ってこそ生きる建物という近年重視されるようになった歴史的建造物への向き合い方を積極的に意識し、動態保存の空間として運営している。

近代建築は、建物の寿命ではなく、必要な用途との乖離、容積の小ささ、現代的設備が入れにくい等の理由で取り壊されていくものが多い。しかし、近代建築の意匠性に付加価値を見出すことができ、それを支えたいという人がいることで、様々な方法で利活用が実現する。また、保存手法にも様々な選択肢が開発され始めている。本学に残る3棟の鉄筋コンクリート造寮建築物についても、各々利用価値を見出し、保存・再生することは可能であろう。特に明桂寮の意匠性や歴史的価値は非常に高く、再現不能のものである。完全に北向きとなる部屋が少ないこと等の計画面でも、その優位性は高い。外壁の鉄筋の爆裂、中性化、さらには建物の歪は確認されたものの、コンクリートは十分な強度を有しており、技術的に十二分に耐震補強等の修理が可能であるもので、「老朽化」

といった安易な言葉で建築物を無下に破壊しようとするのではなく、いかに活用できるかという方策を探ることがステークホルダーとしての役割となろう。

(2) 家具の利用提案

本研究では、建物だけでなく、建物内にストックされている家具の確認を行った。特に木製家具は、時代を経てもなお使い続けられる状態である。そういった家具は、保管の場所があり丁寧に保管されているわけではなく、使われずに放置されているのが実態である。持続可能な社会をつくり、本学の寮の伝統を示す場としての活用が期待される。九州大学では、新たなキャンパスに移転するにあたり、市街地内にあった校舎は取り壊し等の対象となっている。そのような状況で、帝国大学時代からの歴史的な家具や什器が大量に廃棄された。それを見かねた教職員の有志が、それらを保管すると同時に、修理をした上で貸し出す仕組みを創設した。国立大学でもあり、基本的には国からの補助で購入をしたものであるため、払い下げるような方法にすることは難しいと考え、貸し出すという仕組みを設けたのである。また、この時、クラウドファンディングのような手法も使用された。これを「在野保存」と、名付けて取り組んでいる。歴史的な建物の保存とは別の角度から歴史的なものへの価値を見出し、活用する取り組みと言える。

博物館組織が什器の管理を行い、そのための倉庫が設けられている。利用希望者は、そこで実物を見て借りることもできる。一点一点状態が異なるものの貸し出しであるから、このような対応が必須となろう。更に壊れた個所の修繕は、借主が行う。学内の研究室にこれらの什器を取り入れる教員もいる。その際には、研究費で、家具の修繕にかかる費用を捻出することもある。

本学でも在野保存の形で、家具・什器を保管することで、卒業生の気持ちを改めてキャンパスに寄せてもらえるような場にするだけでなく、キャンパスの魅力を世界に発信する機会となろう。本学の歴史の刻まれた家具を、キャンパスの中に留めるのではなく、地域社会に広げることで、本学での学びや精神を、より多くの人に届ける可能性が生まれる。また同時に、SDGsの視点からも、大学として取り組むことで、社会に向けたメッセージ性を持つ取り組みとなろう。

5-4. まちづくりの一環として

(1) 都市マスタープランの位置づけ

近年、若年人口の減少を受け、特に地方都市等では若者をいかに住まわせるのかが、都市計画上も重要な課題となっている。そこで、全国の大学寮を「学生寮ネット」(<https://www.gakuryou.net/table/01.html>)を用いて、601の寮をリスト化し考察を行った。これらの寮の立地場所を整理したものが図5-4である。公立大学のはキャンパス内に建てられる傾向があり、国立・私立大学はキャンパス内の寮もあるものの、近傍やキャンパスから離れた場所でも寮を確保していることがある。キャンパス近傍よりも、キャンパスから離れた場所で確保している大学が一定数あることは興味深い。大学が見守りの体制をどのような気づくかが課題である。

これらの寮について、自治寮、教育寮、そして国際寮という特色を謳っているのかを確かめた結果が表5-1である。自治寮を謳う寮の割合は、国立大学で比較的多い。一方私立大学は、国際寮や教育寮と謳う寮の割合が多い。国際寮であることを一つの特色にした学生募集であることもあろう。また、寮を教育の場として位置付けることでの特色を示すとともに、教育の一環としての管理・指導を予め示すものでもある。

更にキャンパスが、その地域のマスタープランに位置づけられているものを探してみると、国立

大学では24の寮、私立大学では46の寮が位置づけられていた。全体の数の中では非常に小さな割合で、寮が各地域社会の中で、特別に扱われているわけではないことがわかる。またそのうち47大学が東京をはじめとした関東圏であり、23区が多い。建物の密集度が高い値域において、こういった寮に多くの人が入り出すということ以上に、空間的なゆとりが再認識されている。東京女子大学や清泉女子大学は、緑の拠点として、文化的にといった言葉が並ぶ。寮そのものよりも、その環境が周辺社会に役立っている。

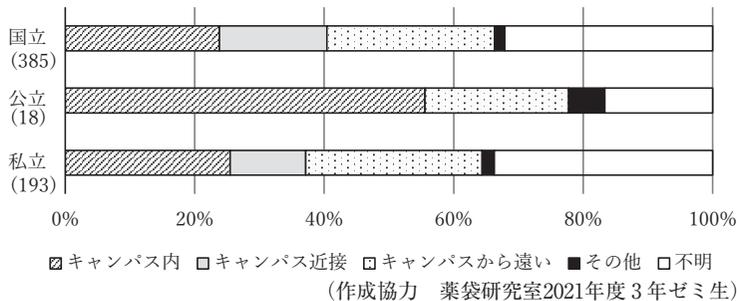


図5-4 寮の立地場所

表5-1 寮の位置づけ

	国立 193	私立 385	公立 18
自治寮	22	24	1
教育寮	1	11	0
国際寮	7	19	1

(作成協力 葉袋研究室2021年度3年ゼミ生)

(2) 木造密集市街地内の寮として

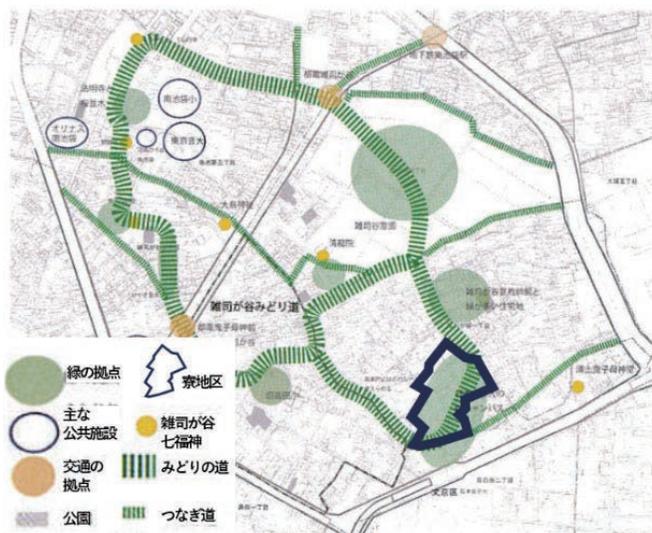
目白キャンパスの寮地区は、豊島区雑司が谷に位置する。この地域は東京都内でも木造住宅の密集度が高く、震災等の災害時のリスクの高さが指摘をされ、災害への対策の重点地域である。この背景には、道の狭隘さと道路構成の問題がある。図5-5に道路幅員を示すが、寮周辺の道路は南側の門前以外は、ほぼ狭隘道路に囲まれている。南側はかつて鶴巻川があり、橋を渡って寮にアクセスするような状況であったが、暗渠化され道路として利用されるようになった空間である。雑司が谷の狭隘道路の中には江戸時代の絵図にもみられる道もあり、歴史的な空間であるともいえる。周辺地域は防災まちづくりに取り組んでいるが、この歴史的な道空間を維持した形で、安全性が高まる工夫を1979（昭和54）年から継続している。こういった中であって、雑司が谷霊園に次ぐ、まとまった敷地が本学寮地区である。

地域のまちづくりを考える市民のグループが、話し合いをして豊島区に対して防災まちづくりの取り組みとしての提案を2015（平成27）年に行った（図5-6）。その提案の中に、日本女子大学の寮地区は緑の拠点として大事にしたいものとして位置づけられている。本学寮地区は、地域社会からは、緑の拠点として今後も維持されたい空間である。



作成：葉袋研究室 杉浦みずす

図 5-5 寮地区周辺の道路構成



(<https://zoshigaya.org/pdf/news/73.pdf>)

図 5-6 住民によるまちづくり提案 (2015)

5-5. 未来のリビングラボラトリに～まとめに代えて～

寮生活を送ることを希望する学生は、増えている。それは大学という寮の場だけでなく、共同生活を行うことで学びとることのできるものを得たいと感じているようだ。しかしそれは、与えられた寮生活の中で自主的に声を上げることは難しい。2021年度から入寮した自治寮で、学寮アドバイザーもいない中、そして食事中の飲食を禁止されていた状態では、仲間とのコミュニティ形成は難しい。たまたま声を掛け合う人がいることが混むにコミュニケーションのきっかけになっている。

これからのリビングラボラトリにとっても良い活用場になることを期待したい。学生自身がどう使いたいのか、ヒントを見せながら、学生自身の計画づくり、計画づくりへの参加により、利用者の主体的な計画づくりという設計の新しい方法論の試みとなり、そして未来の社会を担う人材の育成の場としてふさわしい空間となるであろう。

【付記】

自由学園明日館については、当館館長福田氏へのヒアリング調査に基づく内容である。

月島荘については、2021年4月に実施した乾汽船 不動産管理部長 小河原孝能氏、永井譲二氏へのヒアリングに基づく内容である。

殊に、家具の実測調査を卒業論文の一環として取り組んだ藤井美羽さん、石井優希さんが行い、家具リストの完成に貢献してくれました。また自らの修士論文とは異なるテーマではあっても、明桂寮に関心を寄せ続けて手伝ってくれた石田雅美さんに感謝します。

参考文献

「学生寮ネット」(<https://www.gakuryou.net/table/01.html>) (最終閲覧 2021年11月10日)

豊島区 都市づくりビジョン、2015年

「雑司が谷のまちづくり」(<https://zoshigaya.org/>) (最終閲覧 2023年6月20日)

山本秀樹『世界のエリートが今一番入りたい大学ミネルバ』(ダイヤモンド社、2018年)

謝辞

本研究には、ちょうどコロナ禍が日本列島を襲い、それがちょうど落ち着くまでの3年間に取り組んだものである。特に一年目は大学に行くこともままならず、当初予定していたヒアリング調査も実現できなかったものもある。特に高齢の方へのヒアリング調査は難しかった。しかし2022年度には、それでも大学まで足を運んでくださる多くの卒業生の方にヒアリング調査を行うことで、これまで明らかになっていなかった寮組織の運営の一端を明らかにすることができたことは、本学の歴史にとっても意味深いことと思っている。お越しくくださった方々に心よりお礼申し上げます。

また、若い在学生も、授業やアルバイトに忙しい中、ヒアリングに応じていただいた。この点についても感謝したい。

更に、学外の専門家の方にも多くの示唆をいただいた。鈴木賢次名誉教授、砂金宏和 RIA 東京支社副支社長、鈴木真歩岩手県立大学准教授、自由学園明日館福田竜館長、三島美佐子九州大学教授、新井竜治芝浦工業大学特任教授、クモノスコポーレーション様、3 dims 様等多くの方々にお知恵を頂戴したことで本研究はまとめることができた。

なお、本研究の主たる構成員は家政学部住居学科の教員や卒業生で、施設課、学生支援課の職員、そして学寮担当副学長という構成メンバーで取り組んできた。住居学科は創立から約60年を経た1962年に学科としてスタートを切り、さらに約60年を経る2024年に建築デザイン学部建築デザイン学科に変わる。この節目の年を迎えるにあたり、学内の部局を超えたと取り組みができたことに、謝意を表す。

〔編集後記〕

本年度5月に covid-19が5類に変更されたことにより、4年ぶりに日常が戻ってまいりました。オンラインの良い点はところどころに継続しつつ、キャンパスには学生達の楽しそうな生活風景がみられるようになりました。総合研究所の研究課題も6課題の研究がすすめられております。

さて、ここに「日本女子大学総合研究所紀要」第26号をお届けいたします。本号は2022年度に研究期間を終了した2件の研究を掲載しております。

研究課題(74)「西生田キャンパスの森を活用した新規学習プログラムの開発」は、附属幼稚園、小学校、中学校、高等学校教諭10名、理学部化学生命科学科教員4名、人間社会学部教育学科教員2名、客員研究員6名の研究で、2003年に学内有志が西生田キャンパスの森の保全と調査を目的とした研究グループを立ち上げ、総合研究所研究課題25として行われて以来、35、44、49、59、66、そして74と約20年間にわたる研究の最終報告書となります。コナラ林、アカマツ林の再生、ナラ枯れの現状、小学校と中学校の理科教員の連携による293.800m²の保全は施設課も関わって大変な労力を要する活動であったことが伺われます。西生田キャンパスの森の保全がこの研究グループにより保たれていたことは貴重な記録となることでしょう。

研究課題(75)「女子教育の場としての寮の在り方に関する研究—日本女子大学寮地区内の建物・家具の歴史的価値及び過去から現在の自治組織の在り方の考察を通して—」は、住居学科教員を中心に、学寮担当副学長、施設課学生支援課の職員との研究で、本学の寮の歴史や、現在の明桂寮についての詳細な実態調査を含む報告書で、総合研の研究ならではの本学の歴史を紐とく重要な研究成果と考えます。

コロナが収束し、新規学部である国際文化学部の誕生、そして2024年度は建築デザイン学部の誕生と新たな扉をつぎつぎに開く本学園の総合研究の進展を期待しつつ編集後記とさせていただきます。

飯田文子、橋本のぞみ、大崎園夏、下田直子

日本女子大学総合研究所紀要 第26号

2024(令和6)年1月15日 発行

発行人 飯田文子

発行所 日本女子大学総合研究所

〒112-8681 東京都文京区目白台2丁目8番1号

電話 03 (5981) 3277 (直通・FAX)

印刷所 メディア・パック

〒178-0061 東京都練馬区大泉学園町6丁目13番20号

電話 03 (5947) 9135
